

平成 27 年度 ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

試掘調査

堀口遺跡（第 17～21 次）

平磯長堀南遺跡（第 1 次）

愛宕神社古墳（第 1 次）

寄居新田遺跡（第 1 次）

津田若宮遺跡（第 11 次）

西谷津遺跡（第 4 次）

松原遺跡（第 5 次）

高野富士山遺跡（第 8 次）

東原遺跡（第 5～7 次）

孫目古墳群（第 2 次）

君ヶ台遺跡（第 10 次）

勝倉城跡（第 1 次）・勝倉古墳群（第 2 次）・勝倉富士山遺跡（第 2 次）

市毛上坪遺跡（第 15 次）

小谷金東遺跡（第 1 次）

黒袴遺跡（第 4 次）

岡田遺跡（第 25～27 次）

地藏根遺跡（第 1 次）

金上塙遺跡（第 9 次）

雷遺跡（第 4 次）

堂端遺跡（第 1 次）

平井遺跡（第 3 次）

足崎西原遺跡（第 3 次）

2016

ひたちなか市教育委員会
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社



勝倉城跡第1次調査区（ひたちなか市立勝倉小学校校庭）



勝倉城跡第1次調査区6トレンチ



勝倉城跡第1次調査区12トレンチ1号堀跡断面



勝倉城跡第1次調査区第1号堀跡出土遺物（インク壺，土師器）

序 文

ひたちなか市は、関東地方の北東部、那珂川の河口の左岸に位置しております。関東平野の北端にほど近く、阿武隈山系へとつながる那珂台地が市域の大半を占めておりますが、那珂川沿いは水田の広がる沖積低地であり、東側は太平洋に面し、その海岸には砂丘や磯が広がるなど、大変バラエティに富んだ景観を呈しています。

このように海・山・川がバランスよくそろった多様な自然環境に恵まれたひたちなか市域は、原始・古代から人々の生活の地として栄えており、面積 99.83K m²の市域には合計約三百数十箇所へのぼる埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

このなかでも古墳時代の埴輪作りの村である馬渡埴輪製作遺跡や装飾壁画で知られる虎塚古墳は国の史跡指定を受け、市を代表する遺跡として市民の誇りであるとともに、研究者等の注目も集めております。

このようにひたちなか市は緑豊かな自然に恵まれ、人口も僅かながら増加を続けておりますが、その一方で毎年活発な開発行為等が行われており、それに伴う発掘調査により多くの埋蔵文化財が出土しております。やむを得ぬ理由で失われていく文化財を少しでも後世に遺していくため、この市内遺跡発掘調査事業は、大きな意義を持っています。

今年度は、ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に委託し、市内 29 箇所の埋蔵文化財包蔵地内において調査を実施いたしました。専門性豊かな職員を擁する同公社の手によって調査が行われることによって、出土した貴重な文化財がより有効に活用されるであろうと考えております。

最後になりますが、快く調査のご承諾をいただきました地権者や関係各位、また調査に参加されました皆様に感謝申し上げますとともに、本報告書が郷土ひたちなかの歴史について、新たな知見を加え、市民の皆様が歴史に触れる縁となれば幸甚に存じます。

平成 28 年 3 月

ひたちなか市教育委員会
教育長 木下 正善

例 言

- 1 本書は、平成27年度国費補助事業として、ひたちなか市教育委員会の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施したひたちなか市内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、平成27年1月から12月にかけて実施された発掘調査についての報告であり、堀口遺跡・平磯長堀南遺跡・愛宕神社古墳・寄居新田遺跡・津田若宮遺跡・西谷津遺跡・松原遺跡・高野富士山遺跡・東原遺跡・孫目古墳群・君ヶ台遺跡・勝倉城跡・勝倉古墳群・勝倉富士山遺跡・市毛上坪遺跡・小谷金東遺跡・黒袴遺跡・岡田遺跡・地蔵根遺跡・金上塙遺跡・雷遺跡・堂端遺跡・平井遺跡・足崎西原遺跡の計24遺跡について、30件の試掘・確認調査を実施した。調査期間等は2～3頁一覧表のとおりである。
- 3 発掘調査および整理報告は、ひたちなか市教育委員会文化財室の指導のもとに、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである。

理 事 長	永盛 啓司	
副 理 事 長	木下 正善	
常 務 理 事	鈴木 隆之 横須賀 重夫	
理 事	楨 和美 綱川 正 大和田 健 加藤 恭子 鈴木 一成 永井 喜隆 薄井 悟	
監 事	武藤 猛 安 智範	
次 長	大和田 幸治	
文 化 課 文化財調査 事務所	参 事 兼 課 長	西野 均
	副 参 事 兼 所 長	鈴木 素行
	課 長 補 佐	佐々木 義則
	係 長	稲田 健一
	嘱 託	菊池 順子 鈴鹿 八重子

- 4 発掘調査の従事者は次の通りである。

調査員：佐々木義則

調査補助員：海老原四郎、菊池順子、坪内治良、廣水一真、福原雅美、矢野徳也、渡辺恵子

- 5 整理事業及び本書の作成に従事したものは、次の通りである。

稲田健一、海老原四郎、菊池順子、桐嶋美子、栗田昌幸、後藤みち子、佐々木義則、佐藤富美江、鈴鹿八重子、

鈴木素行、坪内治良、西野陽子、廣水一真、福原雅美、矢野徳也、渡辺恵子

- 6 本書は、佐々木義則が編集した。

- 7 本書の執筆と分担は以下のとおりである。

栗田昌幸（調査経緯） 鈴木素行（弥生時代以前の遺物） 稲田健一（古墳時代の遺物） 佐々木義則（左記以外）

- 8 発掘調査の出土資料は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターで一括保管している。

- 9 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50音順・敬称略）

（株）アーバンハウジング、相田美樹男、青山芳文、秋葉照代、雨澤三保子、磯貝武司、（株）一条工務店、（株）エイチ・エス・ケイ、（株）エムズ・エステート、大内賢輔、大須賀和子、岡大輔、荻谷勝一、笠井忠雄、加藤茂雄、加藤弘子、川崎純徳、川崎徹、河崎雄次、川又友博、川又廣、黒澤晃、黒沢進、小石川正志、小松崎憲二、佐藤晋也、清水國江、清水良一、下内雅明、下内洋明、白鳥孝子、城川孝雄、鈴木脩弥、砂押信孝、（株）だいち、大和ハウス工業（株）、高野新一、高橋幸子、高橋正徳、田口勝一、豊住明子、豊住信義、西野好海、野口武敏、（株）ノーブルホーム、原口節子、藤田美木子、藤田達也、三木保、（有）三井考測、武藤守、安雄三、山崎京子、山本良子、横山さつ江、（株）ローソン

- 10 事務局は、ひたちなか市教育委員会総務課文化財室内に置き、組織は次のとおりである。

総 務 課 文 化 財 室	課 長	岩崎 龍士
	文 化 財 室 長	千葉 美恵子
	主 任	栗田 昌幸
	主 事	住谷 光男

挿 図 目 次

第1図	調査遺跡の位置	1	第47図	市毛上坪遺跡第15次調査区	39
第2図	堀口遺跡の調査地点	4	第48図	小谷金東遺跡の調査地点	39
第3図	堀口遺跡第17次調査区	5	第49図	小谷金東遺跡第1次調査区	39
第4図	堀口遺跡第17次調査区出土遺物(1)	6	第50図	小谷金東遺跡第1次調査区出土遺物	39
第5図	堀口遺跡第17次調査区出土遺物(2)	6	第51図	黒袴遺跡の調査地点	40
第6図	堀口遺跡第17次調査区出土遺物(3)	7	第52図	黒袴遺跡第4次調査区	41
第7図	堀口遺跡第18次調査区(1)	9	第53図	黒袴遺跡第4次調査区出土遺物	41
第8図	堀口遺跡第18次調査区(2)	10	第54図	岡田遺跡の調査地点	42
第9図	堀口遺跡第18次調査区出土遺物(1)	11	第55図	岡田遺跡第26次調査区出土遺物(1)	43
第10図	燃糸文系土器群の参考資料	11	第56図	岡田遺跡第26次調査区出土遺物(2)	43
第11図	堀口遺跡第18次調査区出土遺物(2)	12	第57図	岡田遺跡第25次調査区	44
第12図	堀口遺跡第18次調査区出土遺物(3)	15	第58図	岡田遺跡第26次調査区	44
第13図	堀口遺跡第18次調査区出土遺物(4)	17	第59図	岡田遺跡第27次調査区	45
第14図	堀口遺跡第18次調査区出土遺物(5)	19	第60図	地藏根遺跡の調査地点	45
第15図	堀口遺跡第19次調査区	20	第61図	地藏根遺跡第1次調査区	46
第16図	堀口遺跡第20次調査区	21	第62図	金上埜遺跡の調査地点	47
第17図	堀口遺跡第20次調査区出土遺物(1)	22	第63図	金上埜遺跡第9次調査区	48
第18図	堀口遺跡第20次調査区出土遺物(2)	22	第64図	金上埜遺跡第9次調査区出土遺物	49
第19図	堀口遺跡第21次調査区	23	第65図	雷遺跡の調査地点	51
第20図	平磯長堀南遺跡の調査地点	23	第66図	雷遺跡第4次調査区	51
第21図	平磯長堀南遺跡第1次調査区	24	第67図	堂端遺跡の調査地点	52
第22図	愛宕神社古墳の調査地点	25	第68図	堂端遺跡第1次調査区	52
第23図	愛宕神社古墳第1次調査区	25	第69図	堂端遺跡第1次調査区出土遺物	53
第24図	寄居新田遺跡の調査地点	25	第70図	平井遺跡の調査地点	54
第25図	寄居新田遺跡第1次調査区	25	第71図	平井遺跡第3次調査区	54
第26図	津田若宮遺跡の調査地点	26	第72図	平井遺跡第3次調査区出土遺物	54
第27図	津田若宮遺跡第11次調査区	26	第73図	足崎西原遺跡の調査地点	55
第28図	西谷津遺跡の調査地点	27	第74図	足崎西原遺跡第3次調査区	55
第29図	西谷津遺跡第4次調査区	27	第75図	堀口遺跡における「十王台式」の住居跡の分布	56
第30図	松原遺跡の調査地点	27	第76図	堀口遺跡採集土器の報告	57
第31図	松原遺跡第5次調査区	28	第77図	堀口遺跡採集土器	58
第32図	松原遺跡第5次調査区出土遺物	29	第78図	参考資料	59
第33図	高野富士山遺跡の調査地点	29	第79図	堀口遺跡第1次調査(1979年度)出土遺物	60
第34図	高野富士山遺跡第8次調査区	30	第80図	堀口遺跡第17・18次調査(2015年度)出土遺物	60
第35図	東原遺跡の調査地点	30	第81図	堀口遺跡第7次調査(1993年度)出土遺物	60
第36図	東原遺跡第5次調査区	31	第82図	堀口遺跡第8次調査(1996年度)出土遺物	61
第37図	東原遺跡第6・7次調査区	31	第83図	堀口遺跡第4・5次調査(1984・1985年度)出土遺物	61
第38図	東原遺跡第6次調査区出土遺物	32	第84図	武田西埜遺跡における「十王台式」の集落跡	62
第39図	孫目古墳群の調査地点	32	第85図	津田遺跡群における「十王台式」の遺跡の分布	64
第40図	孫目古墳群第2次調査区	33	第86図	津田天神山遺跡採集土器と第1次調査(1965年度)出土遺物	65
第41図	君ヶ台遺跡の調査地点	34	第87図	中台遺跡採集土器	65
第42図	君ヶ台遺跡第10次調査区	35	第88図	中台東遺跡1978年度発掘調査出土遺物	66
第43図	勝倉城跡・勝倉古墳群・勝倉富士山遺跡の調査地点	36	第89図	若宮遺跡第4次調査(1985年度)出土遺物	67
第44図	勝倉城跡第1次・勝倉古墳群第2次・勝倉富士山遺跡第2次調査区出土遺物	36	第90図	若宮遺跡第6次調査(1997年度)出土遺物	67
第45図	勝倉城跡第1次・勝倉古墳群第2次・勝倉富士山遺跡第2次調査区	37	第91図	黒袴遺跡第3次調査(2015年度)出土遺物	67
第46図	市毛上坪遺跡の調査地点	38	第92図	若宮遺跡第7次調査(2001年度)出土遺物	68
			第93図	若宮遺跡第7次調査(2001年度)第1号住居跡と武田石高遺跡第5号住居跡	69

表 目 次

第 1 表	平成 27 年市内遺跡発掘調査一覧	2
第 2 表	堀口遺跡調査一覧	5
第 3 表	津田若宮遺跡調査一覧	26
第 4 表	西谷津遺跡調査一覧	27
第 5 表	松原遺跡調査一覧	28
第 6 表	高野富士山遺跡調査一覧	29
第 7 表	東原遺跡調査一覧	30
第 8 表	君ヶ台遺跡調査一覧	34
第 9 表	市毛上坪遺跡調査一覧	38
第 10 表	黒袴遺跡調査一覧	40
第 11 表	岡田遺跡調査一覧	43
第 12 表	金上埜遺跡調査一覧	47
第 13 表	雷遺跡調査一覧	51

写真図版目次

図版 1	試掘調査 (1)
図版 2	試掘調査 (2)
図版 3	試掘調査 (3)
図版 4	試掘調査 (4)

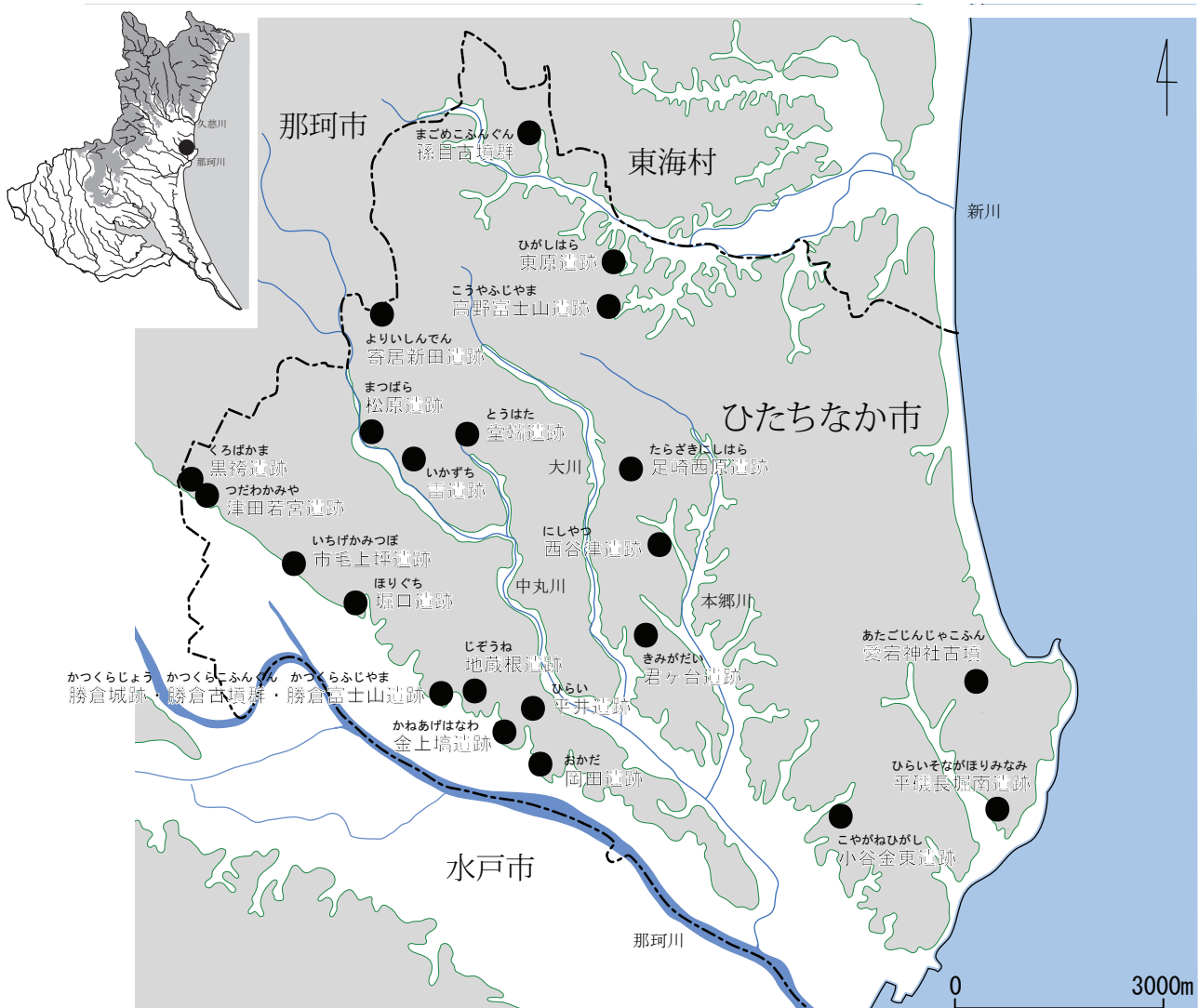
I 概要

ひたちなか市は、茨城県の中央部に位置し、面積 99.83 km²、人口約 16 万人を擁する地方中心都市である。市域南側を東流する那珂川は栃木県那須岳に源を発し、茨城県のほぼ中央部を東西に横断し太平洋へと注ぐ全長 150km の河川であり、古くから流域の文化形成に大きな役割を果たしてきた。本市は、この那珂川河口左岸域に位置する。市域は那珂川の支流である中丸川・大川・本郷川により開析され、小支谷が発達する。市域の北側を東流する新川流域の低地は、近世まで真崎浦という入り江であったが、現在は広く水田化され、東海村との境となっている。

現在市内には、約 300 か所以上の遺跡が所在する。市域では昭和 30 年ごろから都市化が進み、周知遺跡内

における住宅建設件数も増加の一途をたどり、そうした事態に対応すべく、昭和 54（1979）年から、国・県の補助を受け、市教育委員会を主体とした市内遺跡発掘調査事業を継続して実施してきた。市内遺跡発掘調査は市内各地で実施されてきたこともあり、市域の埋蔵文化財の全体的状況を知る上で、その調査成果は貴重な資料となっている。

平成 20 年度から、市内遺跡発掘調査は市教育委員会から財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社（現在の公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社）に委託されるようになり、公社が主体となり実施されるようになった。平成 27 年は 24 か所の遺跡において、試掘調査 30 件が実施され、堀口遺跡における多数の住居跡の確認や、勝倉城跡における堀跡の確認等の成果を得ている。



第 1 図 調査遺跡の位置

第1表 平成27年市内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	調査 回数	所在地	調査期間	調査原因	調査 種別	対象 面積	調査 面積	出土遺構	主な出土遺物
1	ほりぐちいせき 堀口遺跡	17次	堀口字表坪90番	1月28日～ 2月4日	集合住宅	試掘	919㎡	105㎡	住居跡16基(弥生1,古墳4, 時期不明11),土坑2基(時期不 明),ピット9基(時期不明)	弥生土器,土師器, 須恵器,砥石,火打石
2	ひらいながほりみないせき 平磯長堀南遺跡	1次	平磯町字長堀4962番 1	2月12～17日	個人住宅	試掘	621㎡	26㎡	溝1条(時期不明)	なし
3	あなごじんじゃこふん 愛宕神社古墳	1次	阿字ケ浦町字前畑 355番2・3・8・9	2月24～27日	個人住宅	試掘	452㎡	20㎡	なし	なし
4	よしいしんでんいせき 寄居新田遺跡	1次	田彦字根崎388番36	3月11～12日	個人住宅	試掘	497㎡	44㎡	なし	なし
5	つねわかみやいせき 津田若宮遺跡	11次	津田字若宮3444番2	3月17～20日	個人住宅	試掘	390㎡	33㎡	なし	なし
6	にしやついでいせき 西谷津遺跡	4次	馬渡字西谷津2525番 35	4月23～28日	集合住宅	試掘	446㎡	38㎡	なし	なし
7	まつばらいせき 松原遺跡	5次	田彦字松原800番1, 801番2・3	4月23～28日	集合住宅	試掘	973㎡	90㎡	住居跡1基(古墳), 井戸跡1基(時期不明)	旧石器,土師器, 須恵器,陶器
8	こうやふじやまいせき 高野富士山遺跡	8次	高野字富士山1692番 1	5月13～15日	個人住宅	試掘	298㎡	36㎡	なし	なし
9	ほりぐちいせき 堀口遺跡	18次	堀口字表坪68番12, 69番1,70,79番1, 81番4,84番2,85 番2,86番2,87番, 88・89番,974番	5月13日～ 6月11日	宅地造成	試掘	7,034㎡	841㎡	住居跡120基(弥生3,古墳20, 奈良5,平安9,時期不明83), 土坑14基,土坑墓2基,溝2条, ピット20基	旧石器,縄文土器, 弥生土器,土師器, 須恵器,砥石, 鉄製品
10	ひがしはらいせき 東原遺跡	5次	高野字東原991番1	5月27日～ 6月2日	個人住宅	試掘	362㎡	29㎡	なし	なし
11	ほりぐちいせき 堀口遺跡	19次	堀口33番1	6月10～12日	個人住宅	試掘	373㎡	17㎡	住居跡1基(時期不明)	なし
12	まごめぐふんぐん 孫目古墳群	2次	佐和字篠根沢2052番 59・60・61・108・ 116・355・369・ 438	6月23～25日	店舗	試掘	2,470㎡	145㎡	溝5条(時期不明), ピット1基(時期不明)	なし
13	きみがたいせき 君ヶ台遺跡	10次	中根字荒谷1916番 2,北谷3560番1・3, 3561番1	6月30日～ 7月7日	店舗	試掘	1,948㎡	26㎡	なし	なし
14	かつくらじょうあと 勝倉城跡 かつくらごふんぐん 勝倉古墳群 かつくらふじやまいせき 勝倉富士山遺跡	1次 2次 2次	勝倉2995番1, 2997番3,2999番, 3010番1	6月30日～ 7月15日	小学校校舎	試掘	1,244㎡	100㎡	堀跡1条(中世),土坑1基(縄文)	土師器,陶器
15	いちばかみつばいせき 市毛上坪遺跡	15次	市毛字上坪1262番2, 1263番2	7月14～15日	個人住宅	試掘	291㎡	24㎡	住居跡1基(古墳), 溝1条(時期不明)	縄文土器,土師器,陶器, 石製模造品
16	こやかねひがしいせき 小谷金東遺跡	1次	小谷金11167番1	7月14～15日	個人住宅	試掘	1,196㎡	19㎡	ピット2基(時期不明)	縄文土器
17	くろばかまいせき 黒袴遺跡	4次	津田3372番4	7月24～28日	個人住宅	試掘	227㎡	25㎡	住居跡1基(弥生), 溝1条(時期不明)	縄文土器,弥生土器
18	おかだいせき 岡田遺跡	25次	三反田字岡田3488番 1	7月24～28日	個人住宅	試掘	280㎡	30㎡	住居跡1基(古墳), ピット1基(時期不明)	弥生土器,土師器
19	じろうねいせき 地蔵根遺跡	1次	勝倉字地蔵根2826番 1・4,2830番1・3, 2835番1,2836番	9月2～18日	宅地造成	試掘	2,844㎡	351㎡	住居跡1基(時期不明), 井戸跡1基(近世以後), 溝3条(時期不明)	土師器,須恵器
20	ひがしはらいせき 東原遺跡	6次	高野字東原965番1	9月14～18日	個人住宅	試掘	357㎡	31㎡	住居跡1基(古墳時代後期)	土師器,敲石

No.	遺跡名	調査 回数	所在地	調査期間	調査原因	調査種別	対象面積	調査面積	出土遺構	主な出土遺物
21	ほりぐちいせき 堀口遺跡	20次	堀口字表坪 77 番	9月14～18日	集合住宅	試掘	777 m ²	42 m ²	住居跡 5 基 (古墳), 土坑 5 基 (時期不明), ピット 13 基 (時期不明)	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石製模造品
22	かみねがはなわいせき 金上埴遺跡	9次	金上字埴 802 番 1・6, 804 番 1・3	9月29日～ 10月6日	集合住宅	試掘	655 m ²	95 m ²	住居跡 4 基 (古墳 2, 平安 2), 溝 2 条 (時期不明), 土坑 1 基 (時期 不明), ピット 1 基 (時期不明)	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石斧, 砥石
23	いづみいせき 雷遺跡	4次	田彦字雷土 1491 番 7	9月30日～ 10月6日	集合住宅	試掘	314 m ²	21 m ²	溝 1 条 (時期不明)	なし
24	あかだいらいせき 岡田遺跡	26次	三反田字岡田 3488 番 3	10月1～6日	個人住宅	試掘	280 m ²	39 m ²	住居跡 5 基 (弥生 1, 古墳 1, 平安 1, 時期不明 2), ピット 1 基 (奈良・平安時代)	弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶器
25	ひがしほらいせき 東原遺跡	7次	高野字東原 965 番 1	10月27～30日	個人住宅	試掘	54 m ²	35 m ²	なし	なし
26	とうはたいせき 堂端遺跡	1次	東石川字トウハタ 2433 番 102・103	11月11～13日	宅地造成	試掘	1,589 m ²	194 m ²	なし	縄文土器, 石器
27	ほりぐちいせき 堀口遺跡	21次	堀口字表坪 100 番 1	11月27日～ 12月2日	個人住宅	試掘	320 m ²	35 m ²	なし	なし
28	ひらいせき 平井遺跡	3次	金上字遠原 1017 番 1, 1018 番 1, 1019 番 1, 1022 番 1, 1023 番	12月1～9日	集合住宅	試掘	2,088 m ²	163 m ²	溝 2 条 (時期不明), ピット 1 基 (時期不明), 土坑 1 基 (時期不明)	旧石器, 縄文土器, 須恵器
29	あかだいらいせき 岡田遺跡	27次	三反田字岡田 3488 番 5	12月10～22日	個人住宅	試掘	279 m ²	21 m ²	住居跡 1 基 (古墳), 土坑 1 基 (時期不明)	なし
30	たらぎにしほらいせき 足崎西原遺跡	3次	足崎字西原 1458 番 26 外 6 筆	12月17～18日	宅地造成	試掘	8,600 m ²	72 m ²	溝 1 条 (時期不明)	なし

Ⅱ 試掘調査報告

1 堀口遺跡

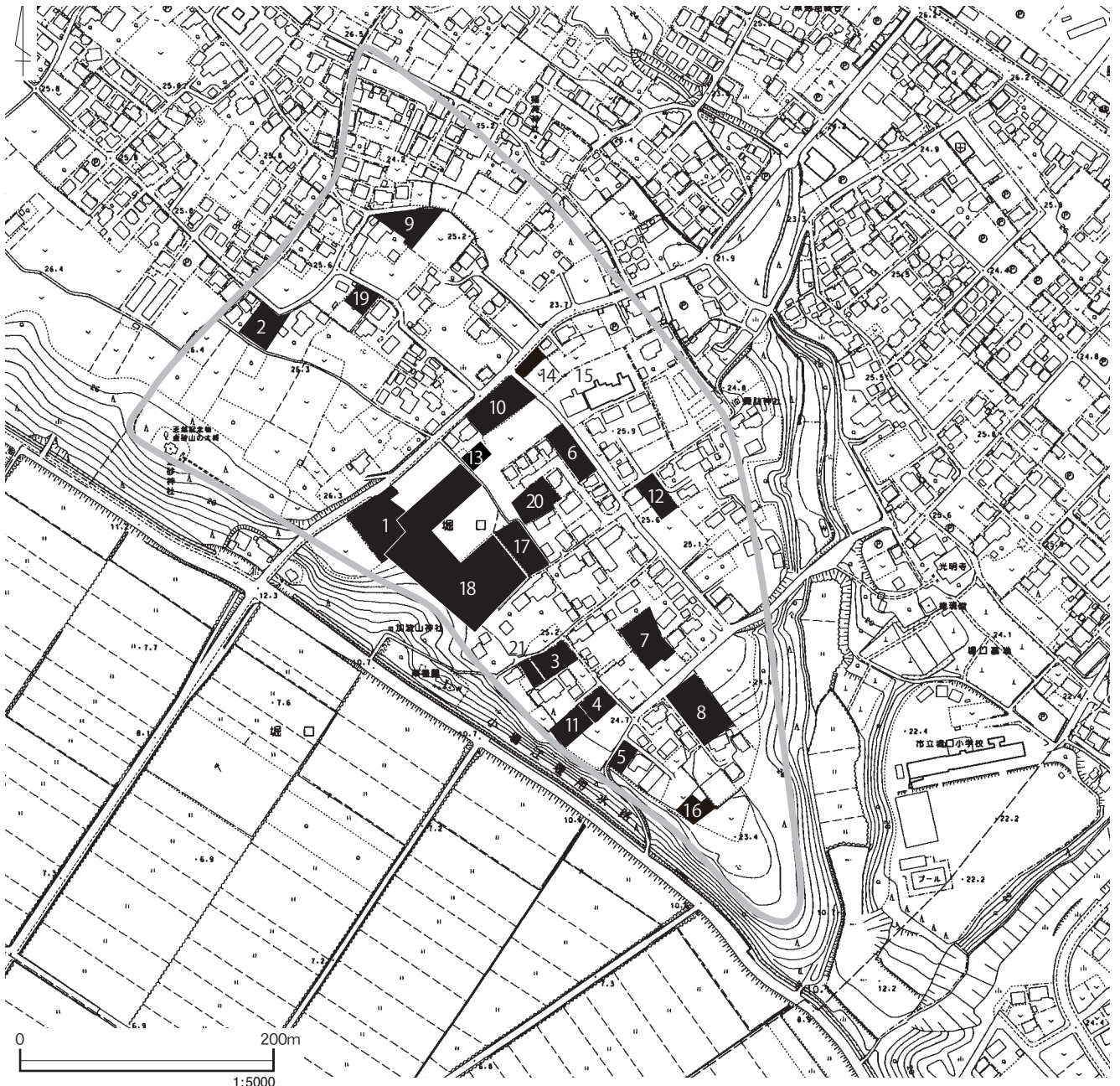
(1) 過去の調査

堀口遺跡においては、これまで16次に及ぶ調査が実施され、住居跡は85基確認されている。住居跡数を時期別にみると、弥生3基(中期1,後期2),古墳33基(前期3,中期15,後期6,不明11),奈良・平安28基(奈良7,平安18,不明3),時期不明21基となり、とくに古墳時代中期と平安時代の住居跡が多い。平安時代の

住居跡は西方の台地内部にも広く展開し、遺跡全体に存在するようである。

(2) 第17次調査報告

調査経緯 堀口字表坪90に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちな



第2図 堀口遺跡の調査地点

第2表 堀口遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 17 (十五台 1, 古墳中期 3, 古墳後期 2, 奈良 4, 平安 3, 時期不明 4)	1
2	1979	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安)	2
3	1983	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 平安 1)	3
4	1984	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳 1, 時期不明 1)	4
5	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 4 (古墳中期 1, 平安 2, 時期不明 1)	5
6	1992	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳中期 1, 奈良 1)	6
7	1993	勝田市教委	本調査	住居跡 8 (十五台 1, 古墳中期 4, 古墳後期 1, 平安 2)	7
8	1996	市教委	本調査	住居跡 6 (古墳前期 2, 古墳中期 2, 奈良 1, 平安 1)	8
9	2006	市教委	試掘	なし	9
10	2007	市教委	本調査	住居跡 7 (古墳前期 1, 古墳後期 1, 奈良 1, 平安 4)	10
11	2008	公社	試掘	住居跡 2 (奈良・平安 1, 時期不明 1), 溝 1	11
12	2009	公社	試掘	住居跡 25 (弥生中期 1, 古墳 8, 奈良・平安 2, 時期不明 14), 土坑 3 (古墳 2, 時期不明 1), 溝 1	11
13	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳)	12
14	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳中期 1, 平安 1), 溝 2 (時期不明)	12
15	2014	公社	本調査	住居跡 4 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 平安 2), 溝 1	13
16	2015	公社	試掘	住居跡 1 (平安), 堀跡 1 条 (時期不明)	13

文献

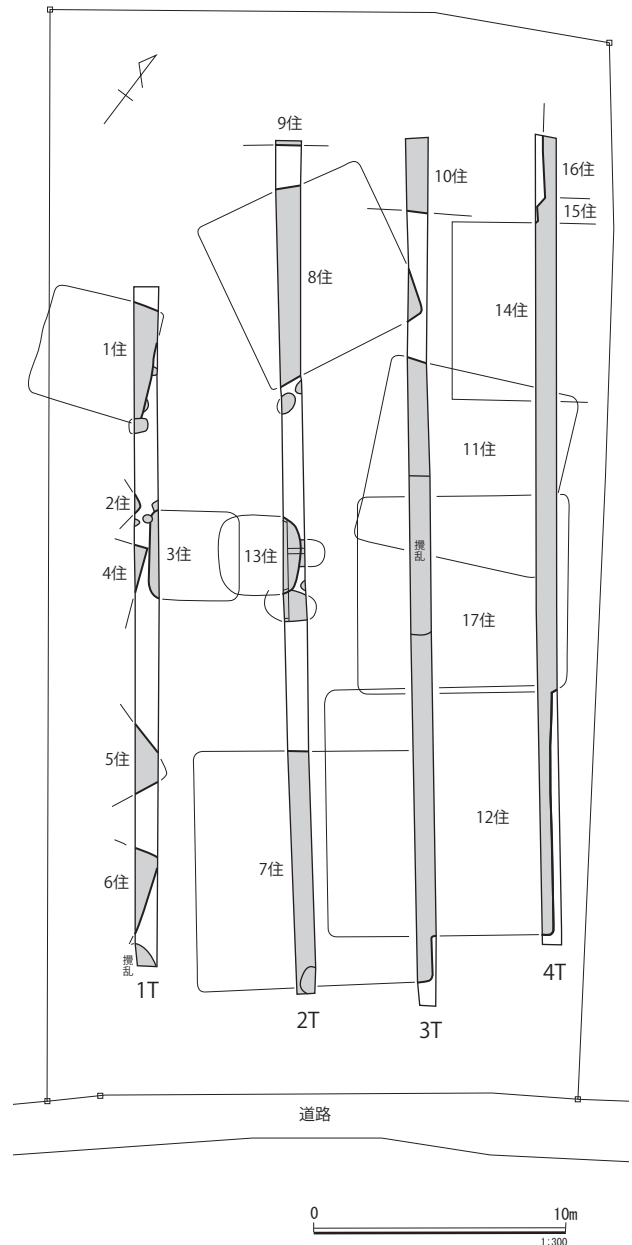
- 茨城県勝田市堀口遺跡発掘調査報告書
- 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 54 年度)
- 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 58 年度)
- 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 59 年度)
- 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 60 年度)
- 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成 5 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 堀口遺跡発掘調査報告書
- 平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

か市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 1 月 28 日～2 月 4 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川を望む台地縁辺から 100 m ほどの場所に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。

今回の調査は、4 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.9 m を測る。

調査の結果、弥生時代後期かと思われる住居跡 1 基 (13 住), 古墳時代中期の住居跡 2 基 (8・11 住), 古



第3図 堀口遺跡第17次調査区

墳時代の住居跡 2 基 (7・10 住), 時期不明の住居跡 11 基を確認した。遺物は土師器製の破片が多数出土したほか、第3トレンチの第11号住居跡覆土中から遺存状況の良い高杯が出土した。トレンチ出土の土器から判断すると、確認された住居跡の多くは古墳時代になると考えられる。

なお、土坑・ピットからは時期を決定できる遺物は出土していない。このほか、3トレンチ中央部には大きな攪乱が入っていた。

遺物説明

第4図

- 出土位置: 7住 注記: 2T7住 時代時期: 弥生時代中期 (足洗式) 器種:

大型壺形土器 文様：平行沈線(半截竹管)

2 出土位置：11住 注記：3T11住 時代時期：弥生時代中期(足洗式)

文様：付加条縄文

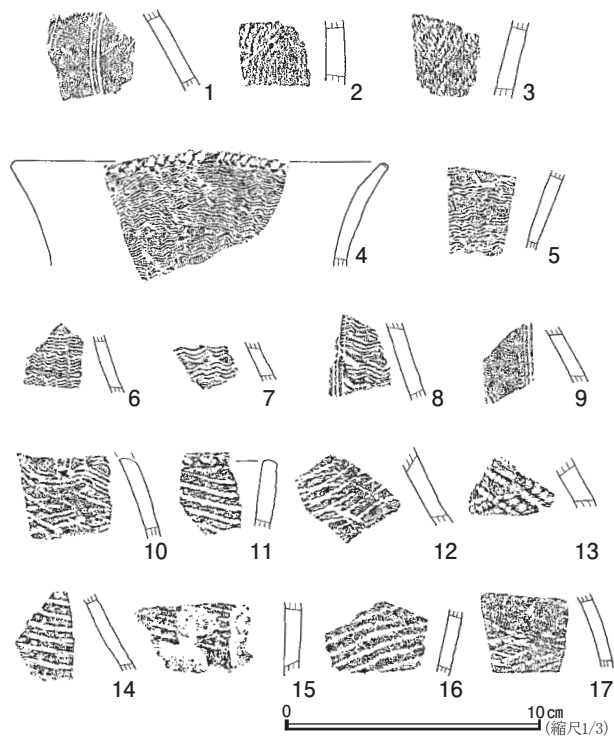
3 出土位置：13住 注記：2T13住 時代時期：弥生時代中期(足洗式)

文様：付加条縄文

4 出土位置：13住 注記：2T13住 時代時期：弥生時代後期(十王台式)

器種：壺形土器(中・小型) 法量：口径146mm(残存率16%) 文様：

口唇部刻み(筥状工具)，口縁部櫛描文(6本櫛歯) 備考：器内外面に炭



第4図 堀口遺跡第17次調査区出土遺物(1)

化物附着

5 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(4本櫛歯)

6 出土位置：3トレ表土 注記：3T表土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(5本櫛歯) 備考：

細頸形か

7 出土位置：7住 注記：3T7住 時代時期：弥生時代後期(十王台式)

器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(3本櫛歯) 備考：器外面

に炭化物附着

8 出土位置：3トレ表土 注記：3T表土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(4本櫛歯)

9 出土位置：3トレ表土 注記：3T表土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(3本櫛歯) 備考：

胎土に金雲母を含む

10 出土位置：7住 注記：3T7住 時代時期：弥生時代後期(十王台式)

器種：壺形土器(中・小型) 文様：櫛描文(4本櫛歯)，付加条縄文(L-Z, R-S) 備考：器外面に炭化物附着

11 出土位置：11住 注記：3T11住 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(L×L) 備考：胎土に金雲母を含む

12 出土位置：8住 注記：2T8住 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(L-S)

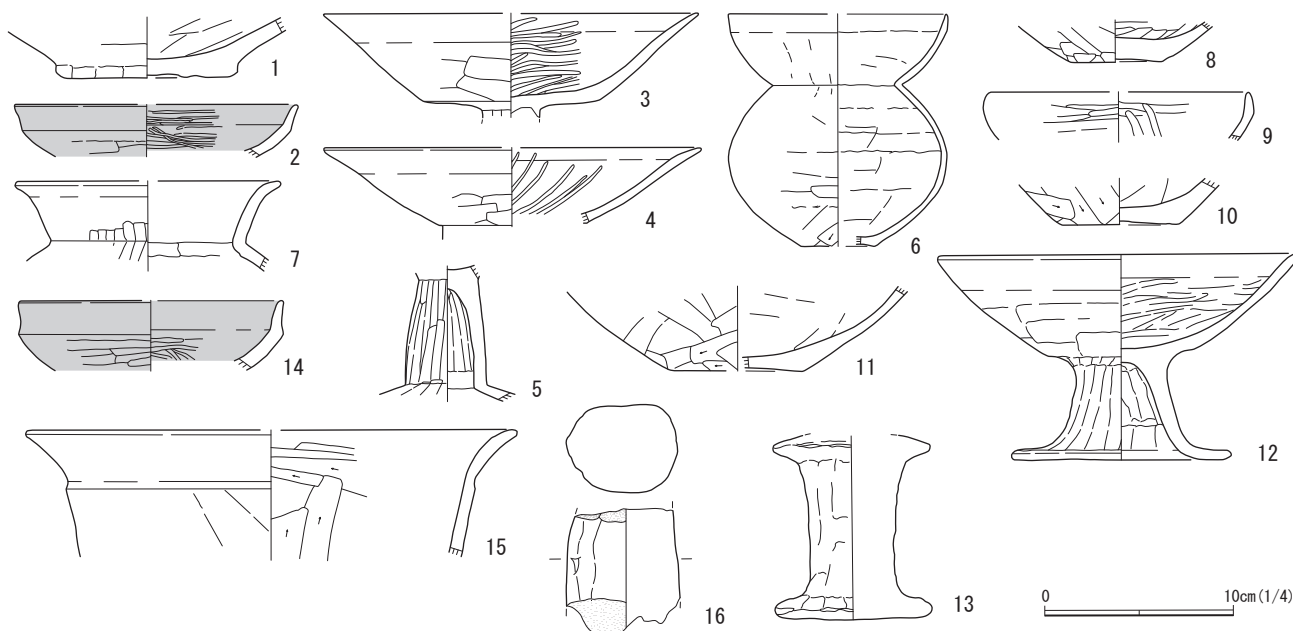
13 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む

14 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む

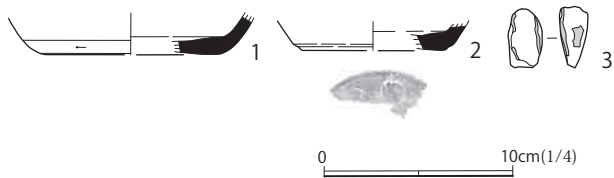
15 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む

16 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む

17 出土位置：4トレ覆土 注記：4Tフク土 時代時期：弥生時代後期(十王台式) 器種：壺形土器(大型) 文様：付加条縄文(R×R) 備考：胎土に金雲母を含む



第5図 堀口遺跡第17次調査区出土遺物(2)



第6図 堀口遺跡第17次調査区出土遺物(3)

14 出土位置:3トレ覆土 注記:3Tフク土 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(L-Z) 備考:胎土に金雲母を含む,器内面剥落

15 出土位置:7住 注記:3T7住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(L-Z) 備考:器外面剥落

16 出土位置:SK1 注記:2TSK1 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(R-S)

17 出土位置:13住 注記:2T13住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(L-Z, R-S) 備考:器外面に炭化物附着

第5図

1 台帳:1トレ1住 材質:土師器 器種:甕 残存:底部50% 法量:器高(3.3),底径9.6 色調:外面にぶい黄橙~黒褐色,内面橙色 胎土:礫(透少),砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面へラ削り,内面へラナデ。使用痕:外面器面が摩滅している。備考:—

2 台帳:1トレ6住 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(14.0),器高(2.7) 色調:内外面ともに黒褐色 胎土:砂(白少,透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部へラ削り。内面口縁部ヨコナデ後へラミガキ,体部へラナデ後へラミガキ。内外面とも黒色処理されている。使用痕:— 備考:—

3 台帳:2トレ8住 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部30% 法量:口径(20.0),器高(5.5) 色調:内外面とも赤橙色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部へラ削り・へラナデ。内面口縁部ヨコナデ,体部へラミガキ。脚部との接合はソケット状。使用痕:— 備考:—

4 台帳:4トレフク土,3トレ8住 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部20% 法量:口径(20.0),器高(4.1) 色調:外面赤橙~橙~黒褐色,内面橙~暗褐色 胎土:砂(白少,透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部へラ削り・ナデ。内面口縁部ヨコナデ,体部ナデ・へラミガキ。使用痕:— 備考:—

5 台帳:3トレ8住 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部100% 法量:器高(7.2),脚径4.3 色調:内外面とも橙色 胎土:砂(白少,透少,黒少) 焼成:良好 技法等:外面へラミガキ。内面へラナデ。使用痕:— 備考:—

6 台帳:3トレ8住 材質:土師器 器種:罎 残存:口縁部20%,体部60%,底部10% 法量:口径(11.6),体部最大径(11.6),器高12.3,底径(4.0) 色調:外面橙~黒褐色,内面橙色 胎土:礫(茶微),砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ,下位へラナデ,体部上位へラナデ?,下位~底部へラ削り。内面口縁部上位ヨコナデ,下位へラナデ,体部へラナデ,輪積痕がみえる。使用痕:外面器面が摩滅している。備考:—

7 台帳:3トレ8住 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(14.0),器高(4.8) 色調:内外面ともにぶい黄褐色 胎土:砂(白少,透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,下位~胴部へラナデ。内面口縁部ヨコナデ,胴部へラナデ。使用痕:— 備考:—

8 台帳:3トレ10住 材質:土師器 器種:甕 残存:底部50% 法量:器高(2.2),底径5.0 色調:外面にぶい褐~黒褐色,内面黒褐色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:内外面ともへラ削り。使用痕:— 備考:—

9 台帳:3トレ10住 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(13.8),器高(2.6) 色調:内外面とも橙色 胎土:砂(白多,透多) 技法等:外面口縁部ヨコナデ後へラミガキ,体部へラ削り。内面へラナデ後,へラミガキ。使用痕:— 備考:—

10 台帳:3トレ11住,表土 材質:土師器 器種:甕 残存:底部30% 法量:器高(2.5),器高(6.2) 色調:外面にぶい褐~黒褐色,内面黒褐色。胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面へラ削り。内面へラナデ。使用痕:— 備考:—

11 台帳:3トレ11住 材質:土師器 器種:甕 残存:底部50% 法量:器高(4.5),底径(7.0) 色調:外面黒褐~にぶい褐色,内面にぶい褐色 胎土:砂(白少,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面へラ削り。内面へラナデ・ナデ。使用痕:外面が二次焼成をうけている。備考:—

12 台帳:3トレ11住 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部80%,脚部100% 法量:口径19.0,器高10.9,裾部径11.6 色調:外面赤褐~にぶい赤褐~黒色。内面杯部橙色,脚部赤褐~黒色。胎土:礫(白微,灰微),砂(白多,透多,黒少) 技法等:外面口縁部ヨコナデ,杯部へラ削り・へラナデ,脚部へラナデ,裾部ヨコナデ。内面口縁部ヨコナデ,体部へラナデ・へラミガキ,胴部ナデ・へラナデ,裾部ヨコナデ。使用痕:— 備考:—

13 台帳:3トレ11住 材質:土師器 器種:支脚? 残存:40% 法量:高(9.8) 色調にぶい黄褐色 胎土:礫(白多,透多),砂(白多,透多) 焼成:やや良好 技法等:ナデ 使用痕:器面が摩滅している。備考:—

14 台帳:4トレフク土 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(14.0),器高(3.7) 色調:外面黒褐色,内面褐灰色 胎土:砂

(白微, 透微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。
内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理
されている。 使用痕:— 備考:—

15 台帳:3トレ表土 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10%
法量:口径(26.0), 器高(7.7) 色調:内外面ともにぶい橙~黒褐色
胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴
部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り, 胴部ヘラ削り。 使用痕:
— 備考:—

16 台帳:4トレフク土 材質:土師器 器種:支脚 残存:— 法量:
高(6.7) 色調:にぶい黄橙色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好
技法等:ナデ 使用痕:器面が摩滅している 備考:—

第6図

1 出土位置:4トレンチ 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周
20% 法量:底径(9.5) 色調:明灰色 胎土:砂(透多) 技法等:
外面体部下端・底部回転ヘラ削り 備考:産地不明

2 出土位置:3トレンチ 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周
20% 法量:底径(7.5) 色調:灰色 胎土:砂(白, 透少) 技法等:
底部外面ナデ。焼成硬質。外面体部下端やや摩滅。

3 出土位置:表採 材質:石(めのう?) 器種:火打石 残存:完形
法量:3.1×1.8×1.5, 重量12.2g 色調:白色透明 技法等:稜部分
に鉄錆が付着し, その一部が摩滅(トーン部分)している。

(3) 第18次調査報告

調査経緯 堀口字表坪79-1外9筆に所在する土地に
ついて, 埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについ
ての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡の範囲内に
当たっており, 現地踏査したところ確認調査の必要な土
地であったため, 教育委員会は建築・土木工事を行なう
際は, 事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。
これに従い文化財保護法93条1項に基づく届出が提出
されたため, 試掘調査についてひたちなか市生活・文化
・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は5月13日~6
月11日にかけて行われた。

調査結果 調査地は那珂川を望む台地縁辺部に位置
し, 平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。

今回の調査は, 52か所のトレンチを設定し, 重機に
よる表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2~0.7
mを測る。

調査の結果, 住居跡120基, 溝跡2条, 土坑墓2基,
土坑14基ほかを確認した。住居跡はほぼすべてのトレ

ンチで確認されている。住居跡の時期は多くは不明であ
るが, トレンチ出土土器は土師器を主とすることからみ
て, 多くが古墳時代から平安時代にかけての住居跡であ
ろう。とくに古墳時代中期~後期の住居跡が多数を占め
るものと思われる。時期が推測できる住居跡を挙げれば,
弥生時代後期が3基(2・27・47号住居跡), 古墳時
代が20基(前期51号住居跡, 中期1・8・11・28・
30・34・52・56・63・69・73・74・90B・98号住居跡,
後期6・23・72・88・110号住居跡), 奈良時代が5
基(12・14・21・53・97号住居跡), 平安時代が9基
(13・45・76・77・82・83・90A・93・104号住居跡)
となる。なお土壇・土坑・溝・ピットの時期は不明である。

調査区からの遺物は旧石器剥片, 縄文土器(撚糸文系),
弥生土器(足洗式, 十王台式等), 土師器, 須恵器, 砥石,
鉄製品等が出土している。

遺物説明

第9図

1 出土位置・注記:21トレ 時代時期:旧石器時代 器種:剥片 法量:
長さ28mm, 幅45mm, 厚さ6.5mm, 重量8.6g 備考:表面にローム土
が付着しており, 旧石器時代のものと考えられる。打面は剥離面もしくは節理

2 出土位置・注記:41トレ 時代時期:縄文時代早期(撚糸文系) 器
種:深鉢形土器 文様:縄文(LR) 備考:胎土に白色粒(石英等)目立つ

3 出土位置・注記:32トレ51住 時代時期:縄文時代早期(撚糸文系)
器種:深鉢形土器 文様:撚糸文(Lの絡条体) 備考:堀口遺跡第3次
調査(1983年度)でも撚糸文系土器群の破片が2点検出されている(第
10図)

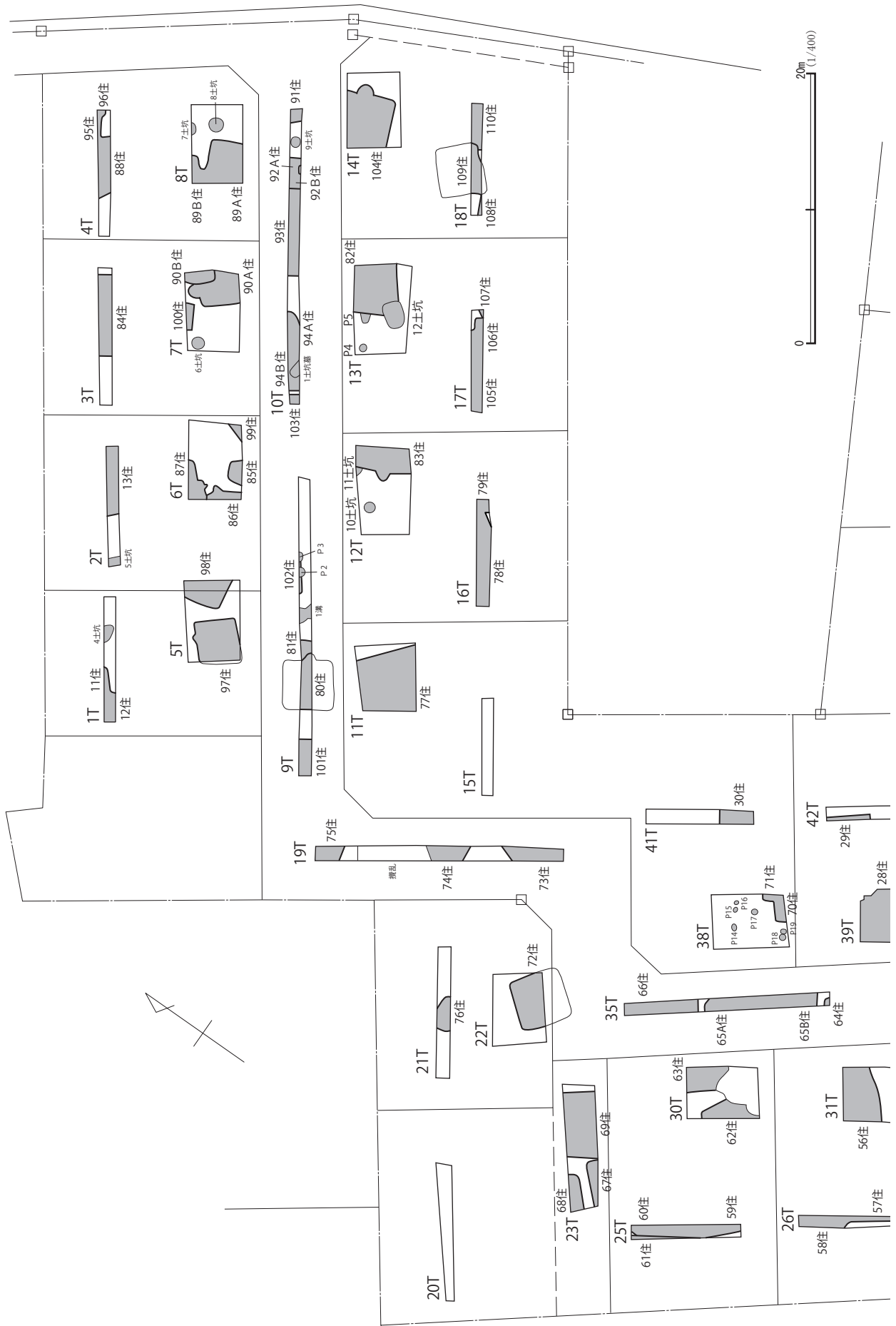
4 出土位置・注記:32トレ51住 時代時期:弥生時代中期(足洗式)
器種:大型壺形土器 法量:口径134mm・頸径91mm(残存率11%の
部分から推定) 文様:口唇部-付加条縄文(LR+2R), 口縁部-平行沈線
文(半截竹管)

5 出土位置・注記:33トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 器種:
大型壺形土器 文様:沈線文(籠状工具)

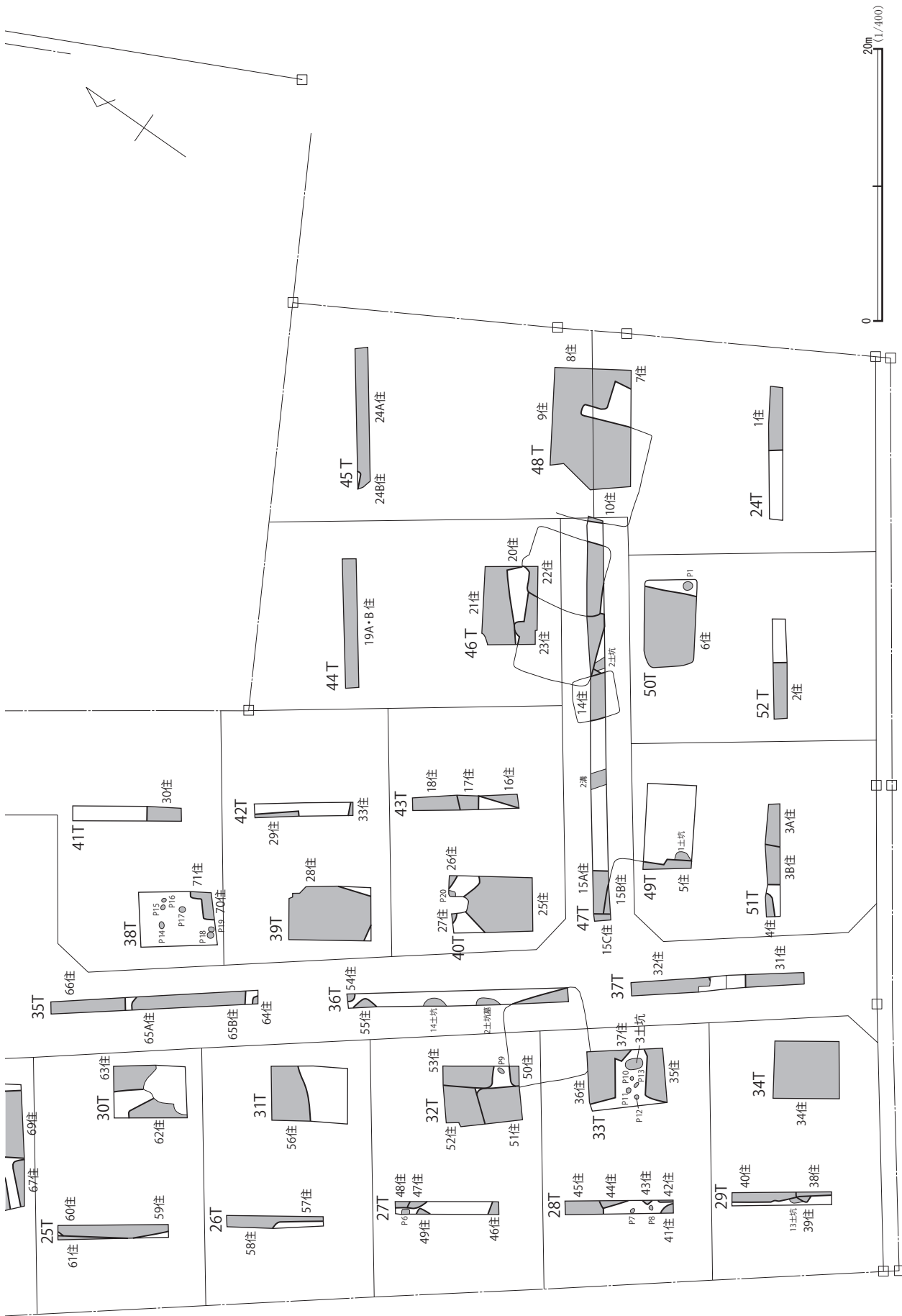
6 出土位置・注記:13トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様:
平行沈線文(半截竹管) 備考:器外面無文部のみ赤彩(実測図断面網の
範囲)

7 出土位置・注記:31トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 器種:
大型壺形土器 文様:平行沈線文(半截竹管)

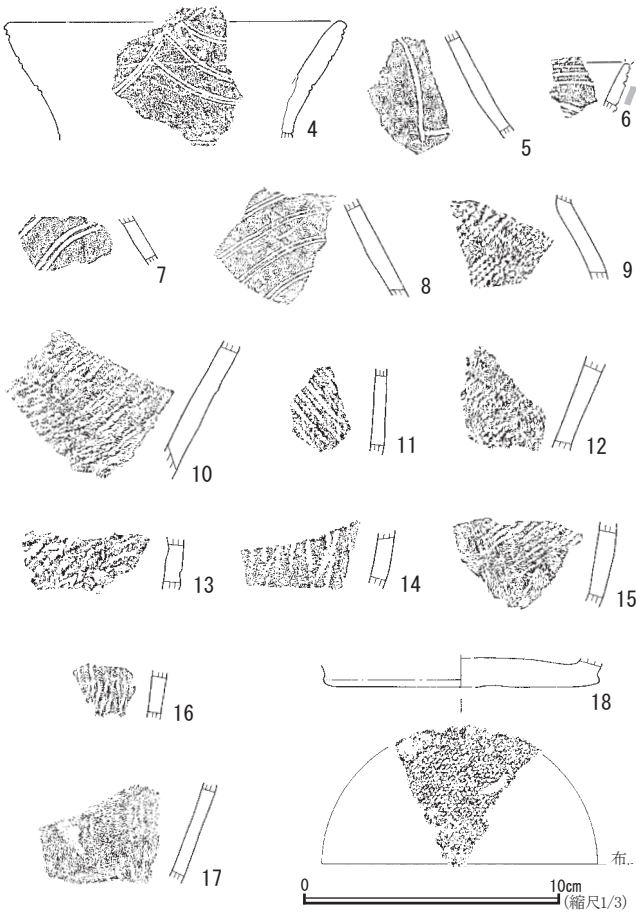
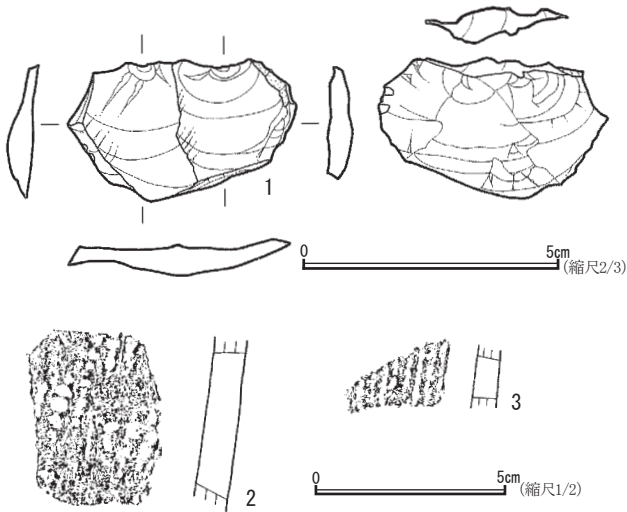
8 出土位置・注記:11トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 器種:
大型壺形土器 文様:平行沈線文(半截竹管)



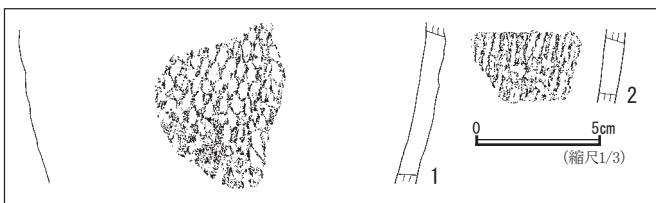
第7图 掘口遺跡第18次調査区(1)



第 8 図 堀口遺跡第 18 次調査区 (2)



第9図 堀口遺跡第18次調査区出土遺物(1)



第10図 撚糸文系土器群の参考資料

(堀口遺跡第3次調査区)

9 出土位置・注記:47トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 器種: 甕形土器 文様:付加条縄文(LR+2R)

10 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(LR+R)

11 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(LR+2R)

12 出土位置・注記:47トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(LR+2R)

13 出土位置・注記:44トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(LR+2Rカ)

14 出土位置・注記:41トレ 30住 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様:付加条縄文(R-S)

15 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(L+2lカ)

16 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 付加条縄文(L+2lカ)

17 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 文様: 縄文(不明)

18 出土位置・注記:43トレ 時代時期:弥生時代中期(足洗式) 法量:底径108mm(残存率18%) 備考:底面-布目痕

第11図

1 出土位置・注記:52トレ2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:大型壺形土器 法量:口径265mm(残存率6%) 文様:口唇部-縄文原体刻み 備考:口縁部器内外面赤彩(実測図断面網の範囲),胎土に金雲母を含む

2 出土位置・注記:39トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:大型壺形土器 法量:口径230mm(残存率9%) 文様:口唇部-付加条縄文(R×R) 備考:胎土に金雲母を含む

3 出土位置・注記:52トレ2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:中・小型壺形土器 法量:口径178mm(残存率12%の部分から推定) 文様:口唇部-篋状工具刻み,口縁部-櫛描文(櫛歯4本)

4 出土位置・注記:52トレ2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:中・小型壺形土器 法量:口径132mm(残存率18%) 文様:口唇部-棒状工具刻み

5 出土位置・注記:5トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:中・小型壺形土器 法量:頸径82mm(残存率14%の部分から推定) 文様:口縁部-櫛描文,隆帯-棒状工具刻み,胴上部-櫛描文・格子状文(篋状工具) 備考:胎土に金雲母を含む

6 出土位置・注記:52トレ表土 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:小型壺形土器 法量:頸径86mm(残存率26%) 文様:櫛描文(櫛



第11図 堀口遺跡第18次調査区出土遺物(2)

- 歯 5 本) 備考:胎土に金雲母を含む
- 7 出土位置・注記:52 トレ 2 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:最大口径 160 mm (残存率 14%) 文様:
櫛描文(櫛歯 3 本)
- 8 出土位置・注記:52 トレ表土 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:最大口径 128 mm (残存率 20%の部
分から推定) 文様:付加条縄文(L×L, R×R) 備考:胎土に金雲母を
含む
- 9 出土位置・注記:52 トレ表土 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 85 mm (残存率 32%) 文様:付
加条縄文(R×R) 備考:底面-木葉痕, 器内面変色あり
- 10 出土位置・注記:34 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 73 mm (残存率 18%) 文様:付
加条縄文(R×R) 備考:底面-木葉痕, 器内面変色あり
- 11 出土位置・注記:29 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 74 mm (残存率 27%) 文様:付
加条縄文(R×r) 備考:底面-木葉痕
- 12 出土位置・注記:19 トレ 74 住 時代時期:弥生時代後期(十王台
式) 器種:中・小型壺形土器 法量:底径 85 mm (残存率 25%) 文様:
付加条縄文(R×R) 備考:底面-布目痕
- 13 出土位置・注記:15 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 68 mm (残存率 24%) 文様:付
加条縄文(R×R) 備考:底面-布目痕
- 14 出土位置・注記:19 トレ 73 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 90 mm (残存率 11%の部分から推定)
文様:付加条縄文(L×L) 備考:底面-布目痕
- 15 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 84 mm (残存率 13%) 文様:付
加条縄文(L×L) 備考:底面-調整, 胎土に金雲母を含む
- 16 出土位置・注記:35 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 法量:底径 65 mm (残存率 26%) 文様:付
加条縄文(R×R) 備考:底面-砂痕, 胎土に金雲母を含む
- 17 出土位置・注記:41 トレ 30 住 時代時期:弥生時代後期(十王台
式) 器種:高坏形土器 法量:括れ部径 26 mm (残存率 100%) 文様:
櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:脚裾部付近に三角形?の透かし孔あり, 坏部
底面の接合部分にひび割れ
- 18 出土位置・注記:22 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:高坏形土器 法量:括れ部径 29 mm (残存率 36%の部分から推定)
文様:櫛描文(櫛歯 4 本力) 備考:坏部成形の積上げ部分で剥離
- 19 出土位置・注記:47 トレ SK2 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:口唇部-突起・篋状工具刻み, 口縁部-
櫛描文(櫛歯 5 本)
- 20 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:口唇部-篋状工具刻み, 口縁部-櫛描文(櫛
歯 6 本) 備考:器外面に炭化物付着
- 21 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:口唇部-突起?・篋状工具刻み, 口縁部
-櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:器外面に炭化物付着
- 22 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器(細頸形力) 文様:櫛描文(櫛歯 6 本)
- 23 出土位置・注記:32 トレ 51 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 5 本) 備考:胎土に金雲
母を含む
- 24 出土位置・注記:31 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本以上) 備考:胎土に
金雲母を含む
- 25 出土位置・注記:23 トレ 68 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本)
- 26 出土位置・注記:39 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本)
- 27 出土位置・注記:16 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 6 本)
- 28 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 5 本) 備考:器外面に炭
化物付着
- 29 出土位置・注記:47 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 5 本) 備考:器外面に炭
化物付着
- 30 出土位置・注記:52 トレ 2 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 5 本)
- 31 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:器外面に炭
化物付着
- 32 出土位置・注記:11 トレ 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 5 本) 備考:器外面に炭
化物付着
- 33 出土位置・注記:41 トレ 30 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本)
- 34 出土位置・注記:30 トレ 63 住 時代時期:弥生時代後期(十王台式)
器種:大型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に金雲母を

含む

35 出土位置・注記：52 トレ 2 住 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器 文様：櫛描文（櫛歯 3 本），付加条縄文（L-Z カ）

36 出土位置・注記：35 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器 文様：櫛描文（櫛歯 4 本），付加条縄文（R × R）

備考：胎土に金雲母を含む，器外面に炭化物付着

37 出土位置・注記：46 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器（細頸形カ） 文様：櫛描文（櫛歯 2 本以上），付加条縄文（L-Z）

38 出土位置・注記：39 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器 文様：櫛描波状文（櫛歯 3 本以上），付加条縄文（L-Z） 備考：器外面に炭化物付着

39 出土位置・注記：31 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：小型壺形土器 文様：口唇部 - 縄文原体刻み

40 出土位置・注記：48 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（L-Z） 備考：胎土に金雲母を含む

41 出土位置・注記：46 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器 文様：隆帯 - 縄文原体刻みカ，付加条縄文（r-S カ）

42 出土位置・注記：12 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（R-S，L-Z） 備考：胎土に細かな金雲母を含む

43 出土位置・注記：13 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（L-Z，R-S） 備考：胎土に金雲母を含む

44 出土位置・注記：8 トレ 89A・B 住 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（L-Z，R-S） 備考：胎土に細かな金雲母を含む

45 出土位置・注記：52 トレ 2 住 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：中・小型壺形土器 文様：付加条縄文（L × L，R × R） 備考：胎土に金雲母を含む

46 出土位置・注記：50 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（LR × L，LR+R） 備考：胎土に金雲母を含む

47 出土位置・注記：50 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（L × L，R × R） 備考：胎土に金雲母を含む

48 出土位置・注記：35 トレ 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（R-S，L-Z） 備考：胎土に金雲母を含む

49 出土位置・注記：52 トレ 2 住 時代時期：弥生時代後期（十王台式）

器種：大型壺形土器 文様：付加条縄文（L × L，R × R）

50 出土位置・注記：11 住 時代時期：弥生時代後期 器種：小型壺

形土器 文様：付加条縄文（RL+2L） 備考：「二軒屋式」かその系統の縄文が施文された土器，底面 - 調整

51 出土位置・注記：40 住 時代時期：弥生時代 文様：縄文（LR） 備考：黒色粒と透明粒が多量で異質な胎土，「天王山式」か

第 12・13 図

1 台帳：47 トレ 23 住 材質：土師器 器種：杯 残存：80% 法量：口径 14.6，器高 4.8，最大径 15.6 色調：内外面とも赤～橙～暗褐色

胎土：礫（白少），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ，ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

2 台帳：47 トレ 23 住 材質：土師器 器種：杯 残存：50% 法量：口径 15.0，器高（4.8）色調：内外面とも赤褐～黒褐色 胎土：砂（白多，透多，灰少，赤微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り後ヘラナデ，ヘラミガキ。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：

口縁端部が非常に摩滅している。 備考：—

3 台帳：42 トレ 29 住，42 トレ 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁～胴部中位 20% 法量：口径（17.0），胴径（20.0），器高（11.5）

色調：外面赤褐～褐色，内面にぶい黄橙～黒褐色 胎土：礫（白微，灰微），砂（白少，透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，胴部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，胴部ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

4 台帳：41 トレ 30 住 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 10%，胴部 30% 法量：口径（17.6），胴径（23.3），器高（16.0）色調：外面黒褐色，内面にぶい褐～暗褐色。 胎土：礫（白少），砂（白多，透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り後ヘラ

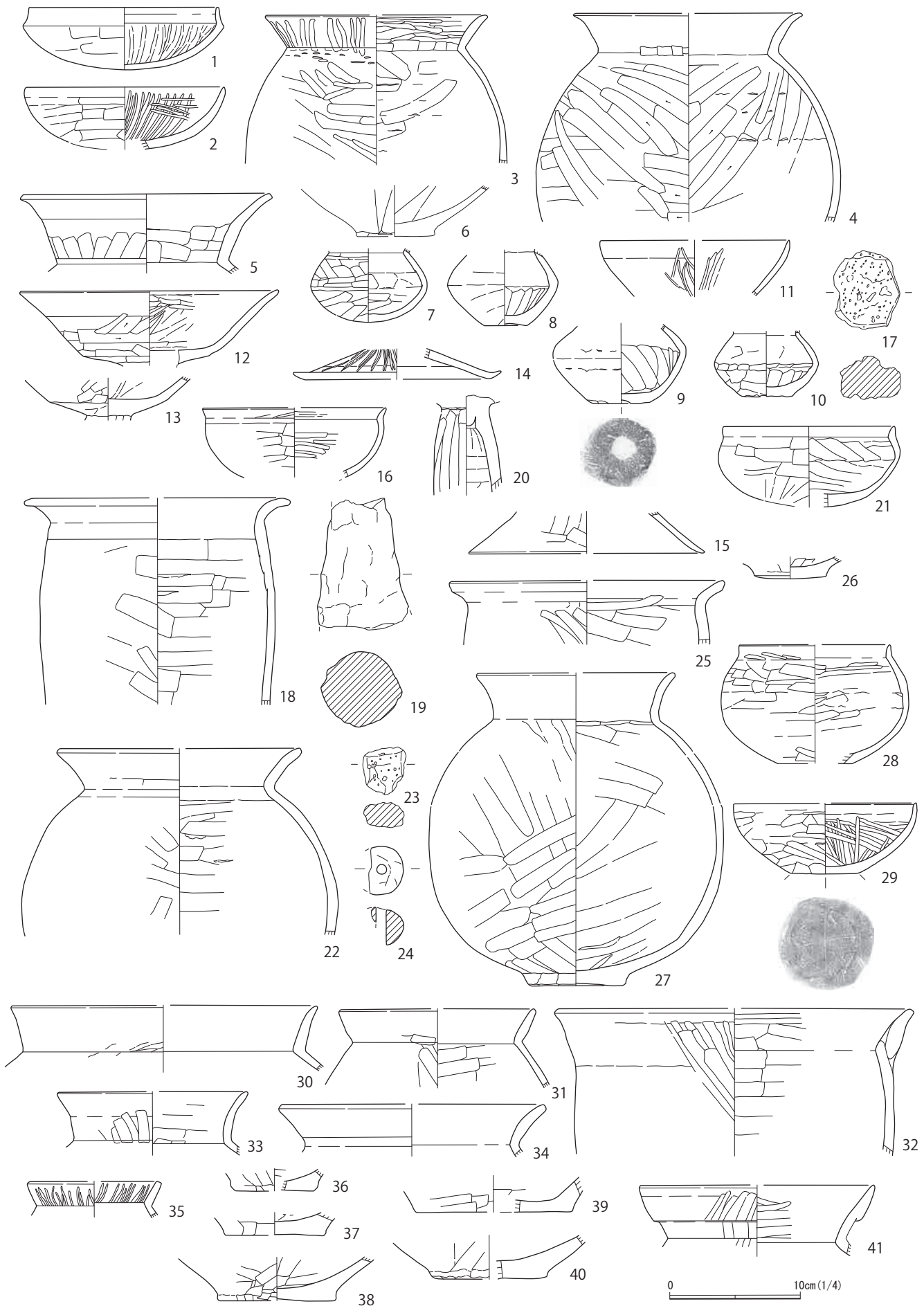
ミガキ。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

5 台帳：41 トレ 30 住 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 80% 法量：口径（19.2），器高（6.2）色調：外面暗褐～黒褐色，内面橙～暗褐色。 胎土：小石（白微），礫（白少），砂（白多，透多） 焼成：良好

技法等：外面口縁部上位ヨコナデ，中位ヘラナデ，下位ヨコナデ。内面上位ヨコナデ，下位ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

6 台帳：41 トレ 30 住 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 10% 法量：底径（5.9），器高（3.9）色調：暗褐～黒色，内面橙色 胎土：小石（白微），砂（白多，透明多，黒少） 焼成：良好 技法等：外面胴部ヘラナデ，ヘラミガキ，底面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

7 台帳：41 トレ 30 住 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部 40% 法量：最大径（9.0），器高（5.7）色調：外面橙～黄褐～暗褐色，内面褐



第12图 堀口遺跡第18次調査区出土遺物(3)

色。胎土：礫（白少），砂（白多，透多，灰少）焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラミナデ。使用痕：— 備考：—

8 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部100% 法量：最大径8.5，器高（5.8），底径3.3 色調：外面にぶい黄橙～黒色，内面鈍い黄橙色。胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ナデ・ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

9 台帳：4トレ30住 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部40%，底部100% 法量：最大径（10.2），器高（6.2），底径4.4 色調：外面にぶい橙～にぶい褐～暗褐色，内面鈍い橙～暗褐色 胎土：砂（白多，透多，赤微）焼成：良好 技法等：内外面ともナデ・ヘラナデ。底部は輪台 使用痕：— 備考：—

10 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：埴 残存：胴部20% 法量：最大径（8.0），器高（5.0），底径（3.9） 色調：外面黒褐色，内面黒色。胎土：砂（白少，透少）焼成：良好 技法等：外面ナデ・ヘラナデ。内面上位ナデ，下位ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

11 41トレ30住 材質：土師器 器種：埴 残存：口縁部10% 法量：口径（14.5），器高（4.3） 色調：内外面とも橙色 胎土：礫（灰微），砂（白多，透多，灰少）焼成：良好 技法等：外面上位ヨコナデ，下位ヘラミガキ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。使用痕：— 備考：—

12 41トレ30住 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部40% 法量：口径19.8，器高（5.8） 色調：外面橙～暗橙色～黒色，内面橙～にぶい黄橙色 胎土：砂（白多，透多，黒微）焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り。内面ヘラミガキ，胴部との接合はソケット状。使用痕：— 備考：—

13 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部下位60% 法量：器高（3.4） 色調：外面橙～黒褐色，内面橙色 胎土：砂（白多，透多，灰少）焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。使用痕：— 備考：内面器面がやや摩滅している。

14 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：高杯 残存：20% 法量：底径（16.0），器高（2.3） 色調：外面黒色，内面浅黄～黒褐色。胎土：砂（白少，透多，黒微）焼成：良好 技法等：外面ヘラミガキ，下位ヨコナデ。内面ヘラナデ，下位ヨコナデ。使用痕：— 備考：—

15 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：高杯 残存：裾部 法量：底径（18.0），器高（3.2） 色調：内外面とも黄橙色 胎土：礫（白少），砂（白多，透多，灰少，黒少）焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ後ヘラミガキ。内面不明。使用痕：— 備考：内外面とも器面が摩滅となる。

16 台帳：41トレ30住 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（14.1），器高（5.3） 色調：外面橙～暗褐色，内面橙～黒褐色 胎土：礫（白微），砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：口縁部ヨコナデ，

体部ヘラ削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。使用痕：— 備考：—

17 台帳：41トレ30住 材質：軽石 種類：砥石？ 法量：長5.8，幅4.6，厚3.2，重量：17.76g 色調：にぶい黄褐色 備考：底面は不明

18 台帳：33トレ35住 材質：土師器 器種：甑？ 残存：口縁～胴部中位40% 法量：口径（20.8），器高（15.8） 色調：外面黄橙～褐～暗褐色，内面にぶい黄橙～暗褐色。胎土：礫（白微），砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：外面器面全体が被熱し，粘土が付着している。備考：—

19 台帳：33トレ35住 材質：土師器 器種：支脚 残存：下位 色調：橙～にぶい褐～暗褐色 胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：ナデ？ 使用痕：全体に被熱した粘土の付着がみられる 備考：—

20 台帳：23トレ69住 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部80% 法量：器高（7.5） 色調：外面橙～にぶい橙～暗褐色，内面にぶい黄橙色。胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

21 台帳：19トレ73住，19トレ 材質：土師器 器種：杯 残存：口縁部90%，体部60% 法量：口径13.0，器高6.2，最大径14.0 色調：外面赤～褐～黒色，内面赤～褐～暗褐色 胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ・ヘラミガキ。使用痕：— 備考：—

22 台帳：19トレ74住，19トレ 材質：土師器 器種：甑 残存：口縁～胴部中位10% 法量：口径（18.8），胴径（24.2），器高（14.2） 色調：外面にぶい褐～暗褐色，内面にぶい橙～にぶい褐色 胎土：砂（白多，透多，黒少）焼成：良好 技法等：内外面とも口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

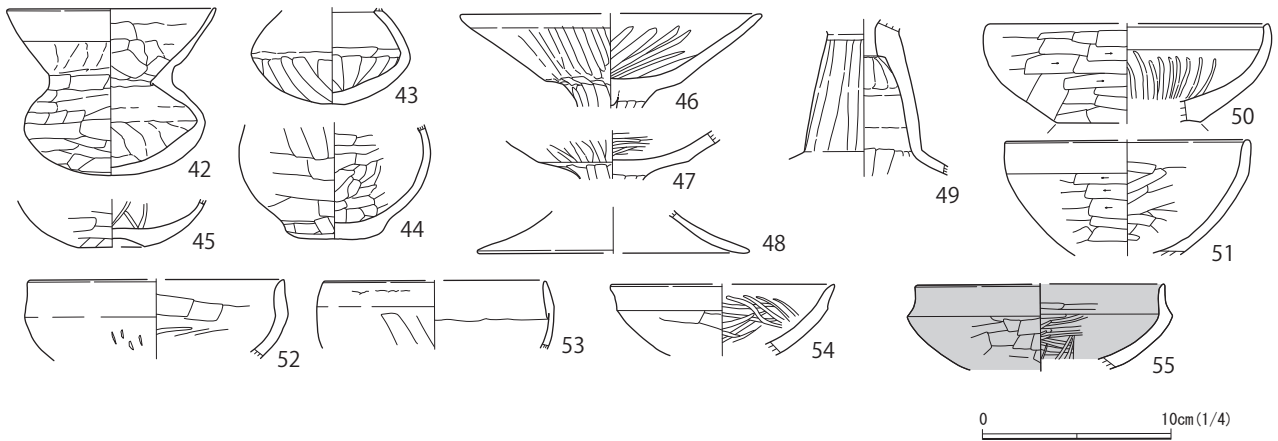
23 台帳：19トレ74住 材質：軽石 種類：砥石？ 法量：長3.5，幅3.2，厚1.9，重量6.57g 色調：黒褐色 備考：底面は不明

24 台帳：19トレ74住 材質：土師質 種類：土錘 残存：40% 色調：にぶい褐～暗褐色 法量：長2.6，最大径3.7，孔径0.7 備考：—

25 台帳：12トレ83住 材質：土師器 器種：甑 残存：口縁部10% 法量：口径（11.0），器高（4.9） 色調：内外面とも赤褐～暗赤褐色 胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：内外面とも口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ 使用痕：— 備考：—

26 台帳：12トレ83住 材質：土師器 器種：甑 残存：底部100% 法量：底径5.4，器高（1.7） 色調：外面赤褐～暗褐色，内面黒褐色 胎土：砂（白多，透多）焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ。使用痕：— 備考：—

27 台帳：5トレ98住 材質：土師器 器種：甑 残存：口縁部10%，



第13図 堀口遺跡第18次調査区出土遺物(4)

胴部30%, 底部100% 法量:口径(15.0), 胴径(22.6), 器高24.0, 径7.3 色調:外面橙~赤褐~褐~黒褐色, 内面橙~暗褐色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り後ヘラミガキ, 底面ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ・若干のヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

28 台帳:5トレ98住, 5トレ, 8トレSK7 材質:土師器 器種:壺 残存:口縁~胴部中位60%, 下位~底部30% 法量:口径(11.6), 最大径(14.4), 底径(5.6) 色調:外面赤褐~黒色。内面明赤褐~暗褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕:外面全体にスス状物が付着している。 備考:—

29 台帳:5トレ98住 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁~体部40%, 底径100% 法量:口径(14.0), 器高5.4, 底径5.2 色調:内外面とも赤褐~黒色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体~底部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

30 台帳:40トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 口径(23.4), 器高(5.1) 色調:外面橙色 胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

31 台帳:41トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(15.0), 器高(6.1) 色調:外面橙色, 内面黄橙色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:内外面とも口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

32 台帳:19トレ 材質:土師器 器種:甗? 残存:口縁部10%未満 法量:口径(17.6), 器高(11.3) 色調:内外面ともにぶい褐~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多, 黒微, 灰微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 胴部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラナデ・

ヘラミガキ。 使用痕:外面にスス状物の付着がみられる。 備考:—

33 台帳:40トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(14.6), 器高(4.9) 色調:内外面とも橙~にぶい橙色。 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面上位ヨコナデ, 下位ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

34 台帳:19トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(20.4), 器高(4.0) 色調:内外面とも橙~黒褐色 胎土:砂(白少, 透多, 灰少, 赤微) 焼成:良好 技法等:内外面ともヨコナデ 使用痕:— 備考:—

35 台帳:表採 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部60% 法量:口径(10.0), 器高(2.8) 色調:内外面とも鈍い黄褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:内外面ともヨコナデ後ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

36 台帳:16トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:底部10% 法量:底径(6.0), 器高(1.7) 色調:外面黒色, 内面にぶい褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

37 台帳:16トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:底部10% 法量:底径(7.6), 器高(1.8) 色調:内外面ともにぶい黄橙~暗褐色 胎土:砂(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

38 台帳:34トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:底部30% 法量:底径(9.0), 器高(3.4) 色調:外面橙~暗褐色, 内面にぶい橙色 胎土:礫(白多), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り後, ヘラナデ。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

39 台帳:36トレ 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:底径(11.8), 器高(2.8) 色調:外面橙~にぶい橙~暗褐色, 内面橙~暗褐色 胎土:礫(茶微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:

外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

40 台帳：44トレ 材質：土師器 器種：甕 残存：底部10% 法量：底径(8.8), 器高(3.4) 色調：内外面とも橙～暗褐色 胎土：砂(白多, 透多, 黒微) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面不明 使用痕：外面・底面と内面の器面が摩滅し, 一部が剥離している。

41 台帳：19トレ 材質：土師器 器種：壺 残存：口縁部10% 法量：口径(18.0), 器高(5.4) 色調：外面にぶい褐～黒褐色, 内面橙色 胎土：小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面は口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラ削り後ヘラナデ, ヘラミガキ。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

42 台帳：16トレ 材質：土師器 器種：埴 残存：口縁部40%, 胴～底部70% 法量：口径11.0, 器高8.9 色調：内外面とも橙～暗褐色～黒褐色 胎土：砂(白少, 透多, 黒少, 赤少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヘラナデ, 胴～底部ヘラ削り。内面ヘラナデ・ナデ。 使用痕：— 備考：—

43 台帳：39トレ 材質：土師器 器種：埴 残存：胴～底部100% 法量：最大径8.4, 器高(5.2) 色調：外面にぶい黄橙～暗褐色。内面暗褐色胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面上位ヘラナデ, 下位ヘラ削り。内面ナデ・ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

44 台帳：43トレ 材質：土師器 器種：壺 残存：胴～底部30% 法量：胴径(10.2), 底径(5.0), 器高(6.2) 色調：外面黒色。内面にぶい黄橙～黄褐色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

45 台帳：33トレ 材質：土師器 器種：埴 残存：底部100% 法量：底径3.5, 器高12.5 色調：外面橙～にぶい褐～黒褐色, 内面にぶい褐～黒褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り後ヘラミガキ, 底部凹み底。内面ヘラナデ, ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

46 台帳：16トレ 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部20% 法量：口径(16.0), 器高(5.0) 色調：内外面とも橙色 胎土：砂(白少, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ後ヘラミガキ, 脚部ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。脚部との接合はソケット状。 使用痕：— 備考：—

47 台帳：39トレ 材質：土師器 器種：高杯 残存：杯部20% 法量：器高(2.1) 色調：内外面とも橙色 胎土：礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

48 台帳：39トレ 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部10% 法量：底径(14.4), 器高(2.3) 色調：内外面とも赤橙色 胎土：砂(白多, 透多, 黒少) 焼成：良好 技法等：内外面ともヘラナデ? 使用痕：

— 備考：—

49 台帳：44トレ 材質：土師器 器種：高杯 残存：脚部60% 法量：器高(8.4) 色調：内外面とも赤～橙～にぶい橙～暗褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ。内面ナデ・ヘラナデ。 使用痕：— 備考：—

50 台帳：31トレ 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(14.8), 器高5.3, 底径(7.6) 色調：内外面とも赤色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部放射状にヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

51 台帳：31トレ 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(12.8), 器高(6.1) 色調：外面橙色, 内面に黄橙色 胎土：礫(白微), 砂(白多, 透多), 骨針を微量含む 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

52 台帳：45トレ 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(13.6), 器高(4.3) 色調：内外面とも褐色 胎土：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：内外面とも器面が摩滅している。

53 台帳：39トレ 材質：土師器 器種：椀? 残存：10%未満 法量：口径(11.8), 器高(3.6) 色調：内外面ともぶい黄褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ?。内面ヨコナデ。 使用痕：— 備考：—

54 台帳：表採 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(11.8), 器高(3.8) 色調：外面にぶい褐～黒褐色。内面黒褐色 胎土：砂(白少, 透小) 焼成：良好 技法等：外面は口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：— 備考：内外面とも器面が摩滅している。

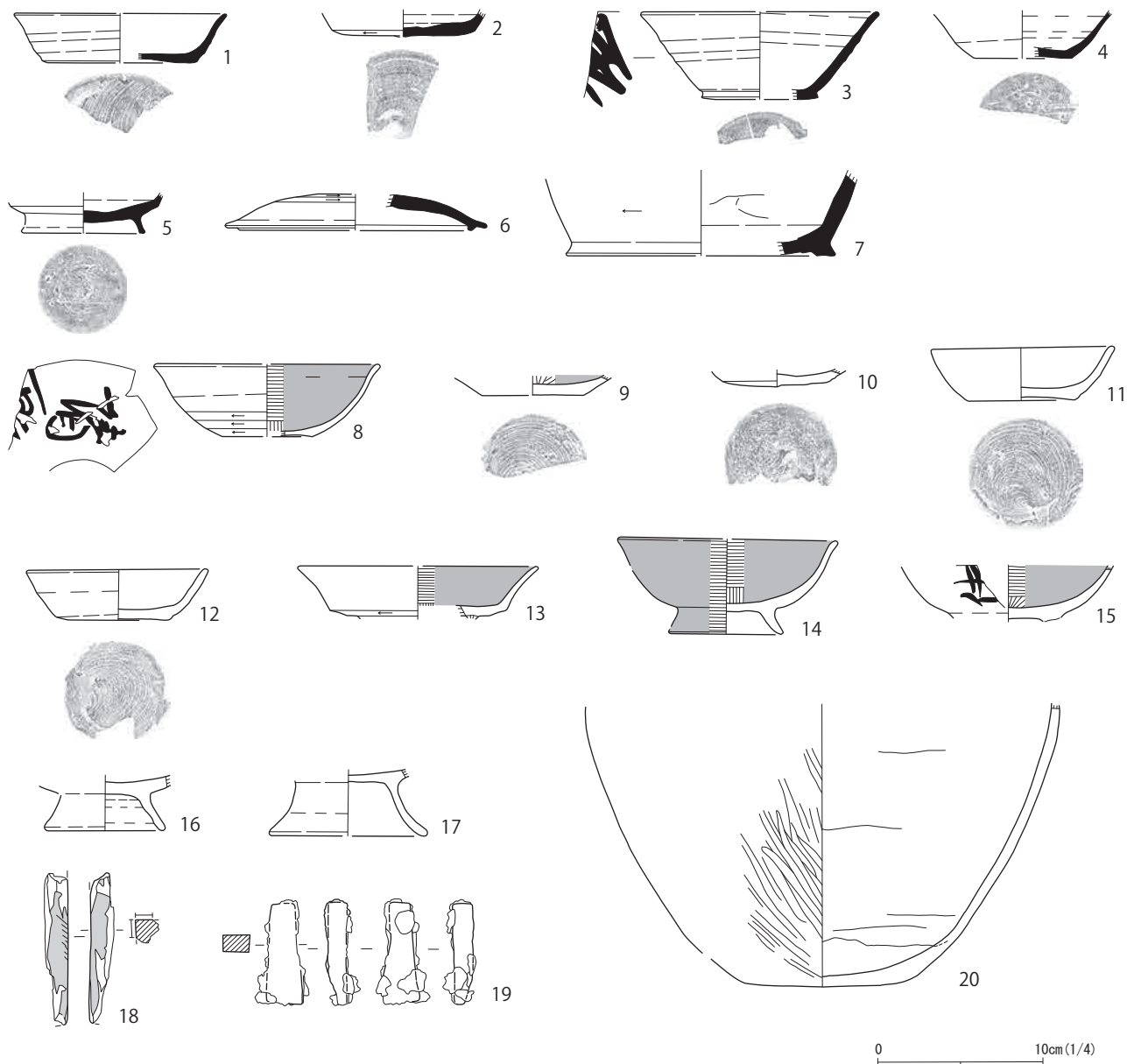
55 台帳：33トレ 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径(13.8), 器高(4.6) 色調：外面黒褐色。内面暗褐色 胎土：砂(白多, 透多) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 備考：—

第14図

1 出土位置：9トレンチ 材質：須恵器 器種：杯 残存：20% 法量：口径(12.6), 器高3.0, 底径(9.3) 色調：赤色, 内面底部の一部褐色 胎土：砂(褐, 白透少) 技法等：糸切り

2 出土位置：12トレンチ83住 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部25% 法量：底径(8.6) 色調：灰色 胎土：砂(白) 技法等：回転ヘラ切り。底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。外面に降灰。

3 出土位置：10トレンチ94住 材質：須恵器 器種：杯 残存：体部15%, 底部外周25% 法量：口径(14.1), 器高5.3, 底径(7.0)



第14図 堀口遺跡第18次調査区出土遺物(5)

色調：明褐色，明灰褐色 胎土：礫（白透少），砂（透，灰少），骨針微量 技法等：底部外面ヘラ記号。体部外面墨書。備考：木葉下窯産か。

4 出土位置：11トレンチ 材質：須恵器 器種：杯 残存：底部40%，体部下半30% 法量：底径（6.0）色調：灰色 胎土：礫（白，灰），骨針少 技法等：回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号。焼成硬質。

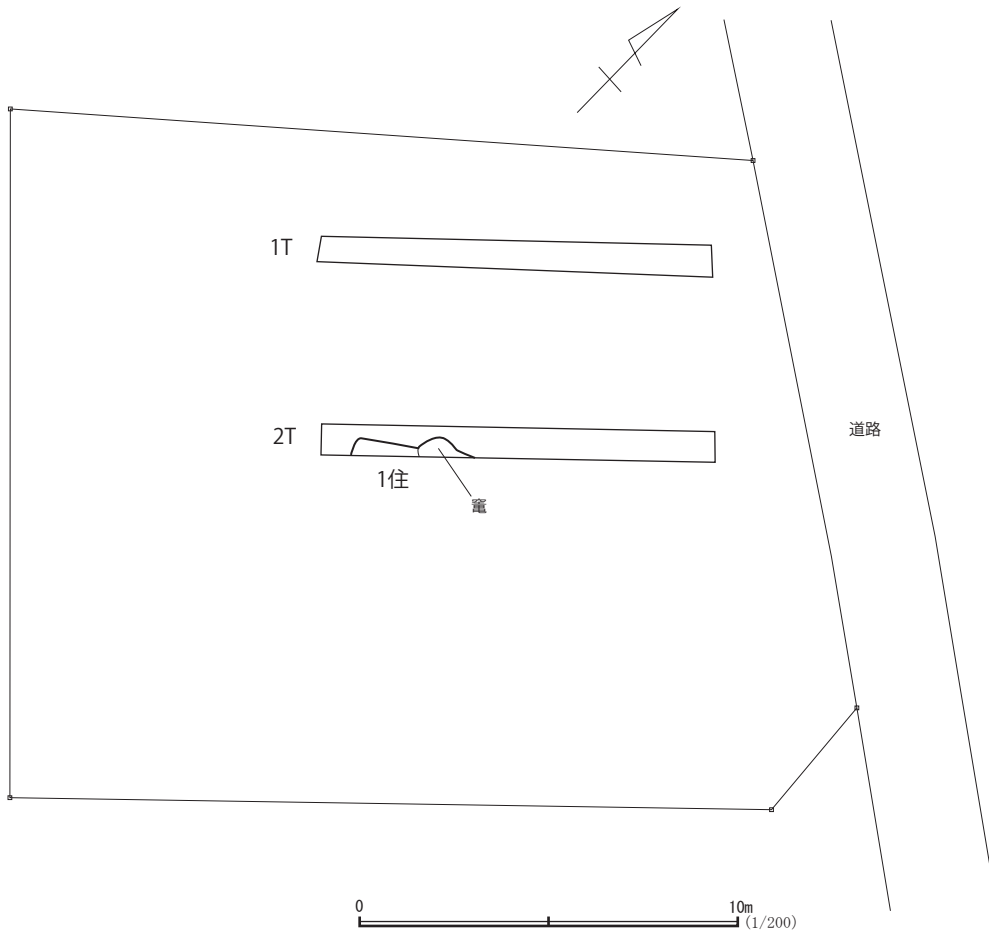
5 出土位置：46トレンチ 材質：須恵器 器種：有台杯 残存：底部（高台下半25%欠失） 法量：高台径（7.2）色調：灰色 胎土：礫（白多，灰少），骨針微量 技法等：回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号「三」。焼成硬質。重ね焼き皿類。備考：木葉下窯産

6 出土位置：1トレンチ 材質：須恵器 器種：蓋 残存：体部25% 法量：口径（15.4）色調：明灰色，白雲多 技法等：天井部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。重ね焼き痕あり。かえり部先端が摩滅。備考：新治窯産。

7 出土位置：2トレンチ 材質：須恵器 器種：短頸壺か 残存：高台部付近20% 法量：高台径（16.1）色調：外面暗灰色，内面灰色 胎土：砂（白，灰少），骨針微量 技法等：外面胴部下部回転ヘラ削り。底部外面の一部に自然釉。焼成硬質。備考：木葉下窯産か。

8 出土位置：40トレンチ 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径（13.3），器高4.4，底径（5.4）色調：外面褐色・一部黒色，内面黒色 胎土：礫（白，微少），砂（透） 技法等：外面体部下半・底部回転ヘラミガキ（底部1方向）・黒色処理。口唇部内面および底部周縁摩滅する。体部外面横位墨書。

9 出土位置：10トレンチ94住 材質：土師器 器種：杯 残存：底部50% 法量：底径（6.1）色調：外面褐色・黒色，内面黒色 胎土：小石（白少），砂（透，白透少，茶灰少），黒雲母微量 技法等：回転糸切り。内面ヘラミガキ（底部放射状）・黒色処理。



第15図 堀口遺跡第19次調査区

10 出土位置：6トレンチ 材質：土師器 器種：杯 残存：底部70%
法量：底径6.5 色調：明褐色，黒褐色 胎土：礫（白少，白透少），砂（透，
灰，白） 技法等：回転ヘラ切り

11 出土位置：10トレンチ94住 材質：土師器 器種：小皿 残存：
体部45%欠失 法量：口径10.8，器高3.2，底径6.4 色調：外面橙色・
明褐色，内面明褐色 胎土：砂（透多，灰少，白少） 技法等：回転糸切り。

12 出土位置：10トレンチ94住 材質：土師器 器種：小皿 残存：
体部20%欠失。底部外周15%欠失 法量：口径10.7，器高3.1，底径6.0
色調：明褐色，橙色 胎土：砂（透，白透，灰） 技法等：回転糸切り

13 出土位置：14トレンチ104住 材質：土師器 器種：有台杯 残存：
体部10%，底部外周20% 法量：口径（14.2） 色調：外面暗褐色・明
褐色，内面黒色 胎土：砂（透，茶），角閃・輝石類 技法等：底部外面
回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ（底部1方向）・黒色処理。

14 出土位置：13トレンチ82住 材質：土師器 器種：椀 残存：体
部下半30%欠失，体部上半60%欠失。法量：口径（13.0），器高5.8，
高台径6.6 色調：内外面黒色，体部上半一部褐色 胎土：礫（灰，白），
砂（灰，白，透） 技法等：高台部内側を除く，内外面ヘラミガキ（底1
方向）・黒色処理。高台設置面および口縁部内面摩滅。

15 出土位置：6トレンチ 材質：土師器 器種：椀 残存：底部

60%，体部下半50% 法量：一
色調：破面明褐色，外面橙色・褐色・
一部黒色，内面黒色・一部明褐色
胎土：礫（褐少），骨針微量 技法等：
高台設置面に糸切り痕あり。内面
ヘラミガキ（底1方向）・黒色処理。
体部外面横位墨書。

16 出土位置：12トレンチ 材質：
土師器 器種：椀 残存：底部（高
台下端20%欠失） 法量：高台径
6.9 色調：橙褐色 胎土：礫（灰
少），砂（透，白，灰） 技法等：一

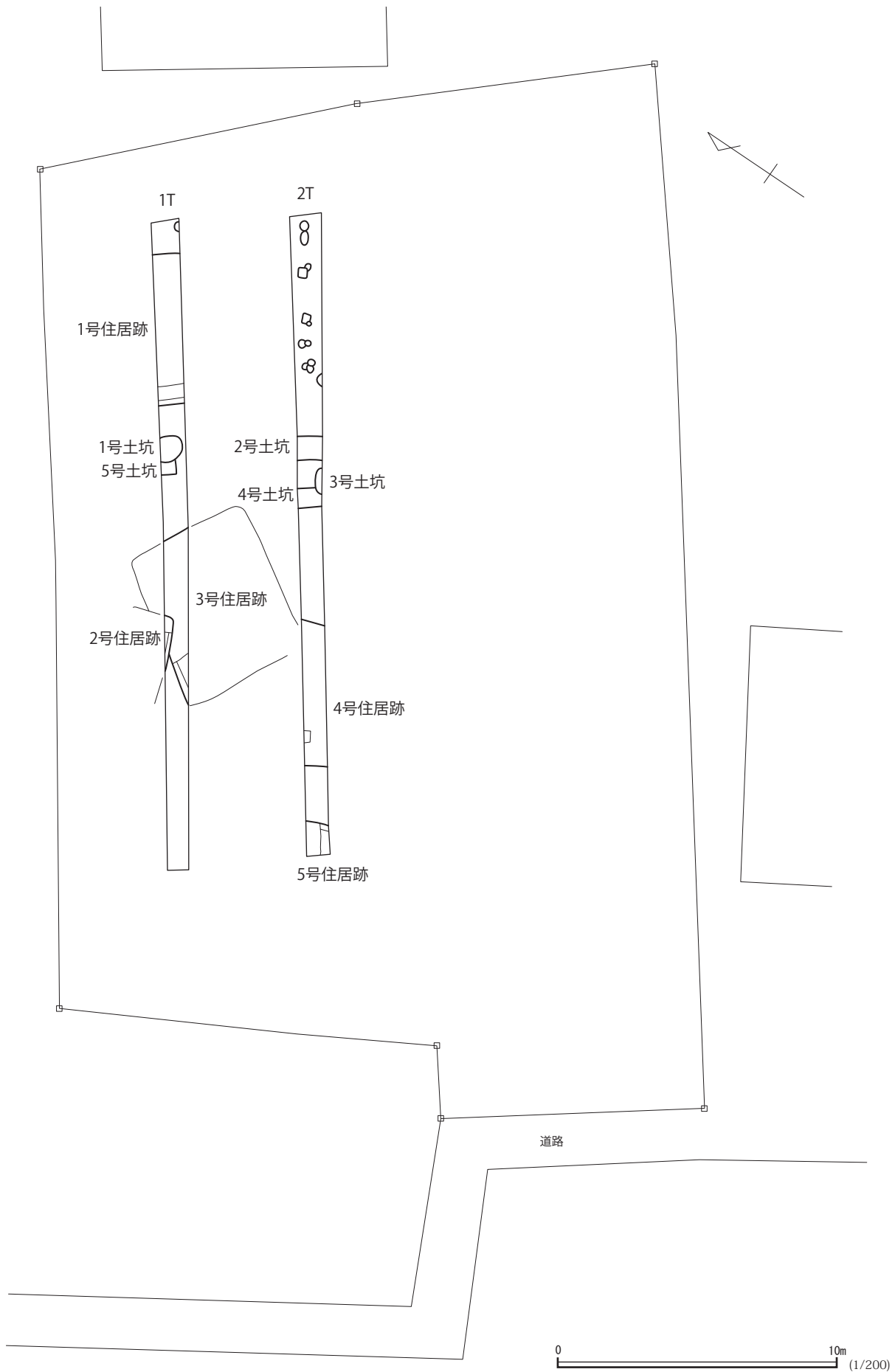
17 出土位置：6トレンチ 材質：
土師器 器種：足高高台椀 残存：
底部（高台下半90%欠失） 法量：
高台径（9.2） 色調：明褐色，底
部内面暗褐色 胎土：礫（透少，
白透少），砂（透多） 技法等：一
備考：底部にひび割れあり

18 出土位置10トレンチ94住
材質：石 器種：砥石 残存：破

片 法量：長9.0，幅1.4，厚1.4，重量23.6g 色調：暗青灰色 技法等：
使用面2面。A面の一部に刻線あり。 備考：日立市産の千枚岩か。

19 出土位置：12トレンチ83住 材質：鉄 器種：鑿もしくは楔 残
存：完形 法量：長6.0，重量54.0g

20 出土位置：46トレンチ21住 材質：土師器 器種：甕 残存：胴
部下半20%，底部 法量：底径10.0 色調：外面底部明褐色・一部黒色，
胴部褐色。内面灰褐色。 胎土：礫（白透多），白雲母多 技法等：外面
…胴部斜方向ヘラミガキ。底部ナデ？。内面…胴部から底部にかけてヘ
ラナデ。底部外周に粘土接合痕が巡り，その付近を横方向にナデを加える。
備考：新治窯付近産の常陸型甕。卵形を呈し底部外面ナデである点から
みて，8世紀始め頃のものか。



第 16 图 堀口遺跡第 20 次調査区

(4) 第19次調査報告

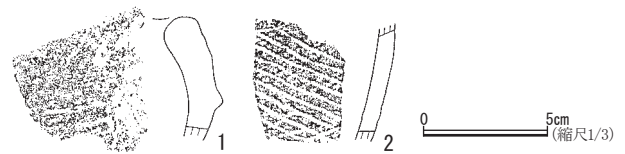
調査経緯 堀口33-1に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は6月10日～12日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から190mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は2か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.6mを測る。調査の結果、住居跡を1基確認した。出土遺物はなく時期は不明であるが、カマドをもつことから、古墳時代後期以後であろう。なおトレンチからの出土遺物はなかった。

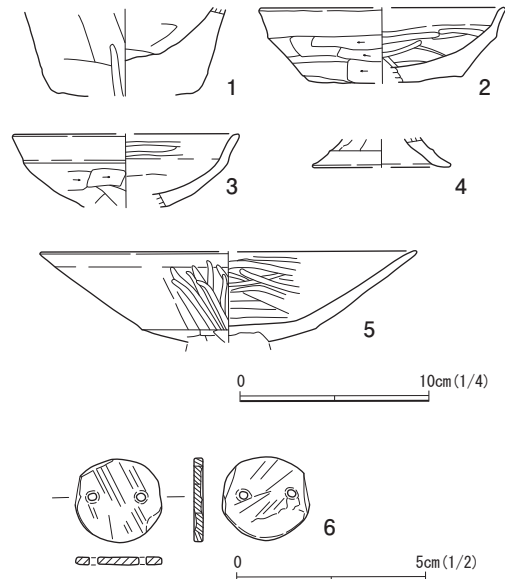
(5) 第20次調査報告

調査経緯 堀口字表坪77番に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は9月14日～18日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から70mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は2か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.6～0.8mを測る。調査の結果、住居跡5基（古墳時代）、土坑5基（時期不明）、ピット13基（時期不明）が確認された。出土した土師器からみると、3号住居跡は古墳時代中期、4・5号住居跡は古墳時代後期の住居跡であろう。



第17図 堀口遺跡第20次調査区出土遺物(1)



第18図 堀口遺跡第20次調査区出土遺物(2)

遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石製模造品等が出土している。

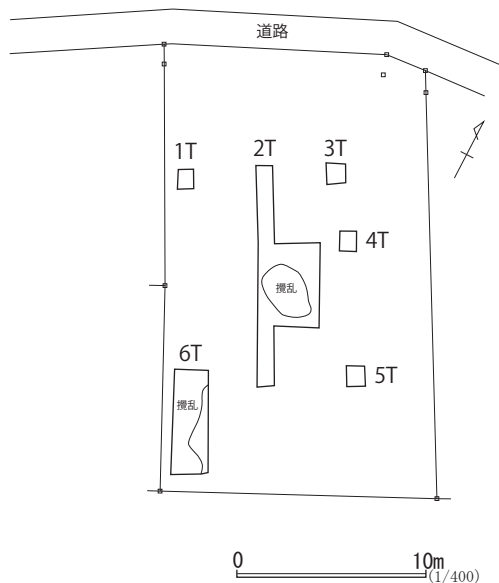
遺物説明

第17図

- 1 出土位置・注記：1住 時代時期：縄文時代中期（加曾利E3式） 器種：深鉢形土器 文様：隆帯 備考：胎土に多量のコケムシ、白色粒子を含む
- 2 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：中・小型壺形土器 文様：付加条縄文（L×L-R-S） 備考：胎土にコケムシを含む

第18図

- 1 台帳：4住 材質：土師器 器種：甕？ 残存：底部30% 法量：底径（7.5）、器高（4.6） 色調：外面灰黄褐色、内面にぶい橙色 胎土：礫（白少）、砂（白多、透多） 焼成：良好 技法等：外面ヘラナデ？。内面ヘラナデ。 使用痕：外面が被熱し、摩滅している。 備考：—
- 2 台帳：5住 材質：土師器 器種：杯 残存：40% 法量：口径（13.0）、器高4.0 色調：内外面ともにぶい褐～暗褐色 胎土：礫（白微）、砂（白多、透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：器面がゆがんでいる。



第19図 堀口遺跡第21次調査区

3 台帳:5住 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.0), 器高(3.9) 色調:外面にぶい橙~黒褐色。内面にぶい褐色。胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 外部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

4 台帳:5住 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部40% 法量:底径(7.3), 器高(1.5) 色調:内外ともにぶい黄褐~黒褐色 胎土:砂(白少, 透少, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面上位ヘラ削り, 下位ヨコナデ。内面ヨコナデ。 使用痕:— 備考:—

5 台帳:表採 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部20% 法量:口径(20.0), 器高(4.8) 色調:内外面とも赤色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヘラナデ後ヘラミガキ, 下位ヘラ削り。内面ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:脚部との接合面はソケット状。

6 台帳:4住 材質:滑石 種類:双孔円板 法量:長2.2, 幅2.3, 厚0.2, 孔径0.2, 重量2.24g 色調:暗緑灰色 備考:—

(6) 第21次調査報告

調査経緯 堀口100-1に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堀口遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。こ

れに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は11月27日~12月2日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から20mほど離れた地点に位置し、台地の縁に向かい緩く傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は6か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2~0.3mを測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。遺構確認面に鹿沼パミス層が露出していることから、過去に大きく削平を受けているようである。

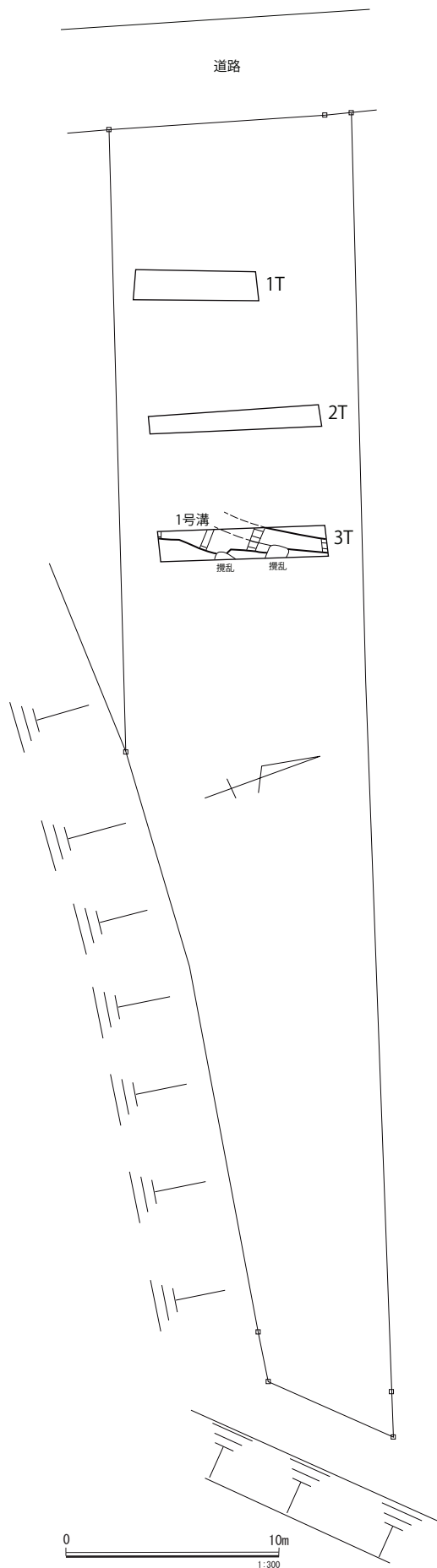
2 平磯長堀南遺跡

(1) 第1次調査報告

調査経緯 平磯町字長堀4962-1に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は平磯長堀南遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行



第20図 平磯長堀南遺跡の調査地点



第 21 図 平磯長堀南遺跡第 1 次調査区

なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 2 月 12 日～2 月 17 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、平磯の海岸から北方にのびる大きな谷に臨む台地縁辺から 100 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.7 m を測る。

調査の結果、時期不明の溝跡 1 条を確認した。なお調査区からの出土遺物はなかった。

3 愛宕神社古墳

(1) 第 1 次調査報告

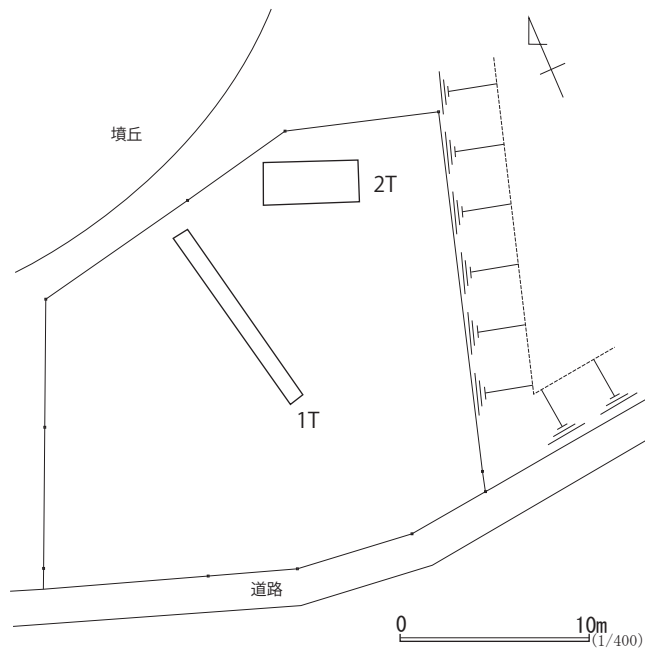
調査経緯 阿字ヶ浦町字前畑 355-2 外に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は愛宕神社古墳の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 2 月 24 日～2 月 27 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、阿字ヶ浦地区の台地上に点在する 5 か所の古墳のひとつとされ、ひたちなか海浜鉄道阿字ヶ浦駅の西側に位置する。塚の所在する一帯は砂に覆われ、頂部に愛宕神社社殿をのせている。塚の高さは約 1.5 m、塚の直径は 15 m ほどである。調査地は塚南東側の塚縁辺部に接する場所であり、古墳であれば周溝の存在が予想される場所である。調査地は、かつて住宅が建っていた場所であるが、調査時は建物は解体され整地された状況であった。

今回の調査は、2 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。トレンチは、深さ 0.9 ～ 1.1 m まで掘削したが、表土から砂の堆積が続いていたため、その深さで掘削を止めている。

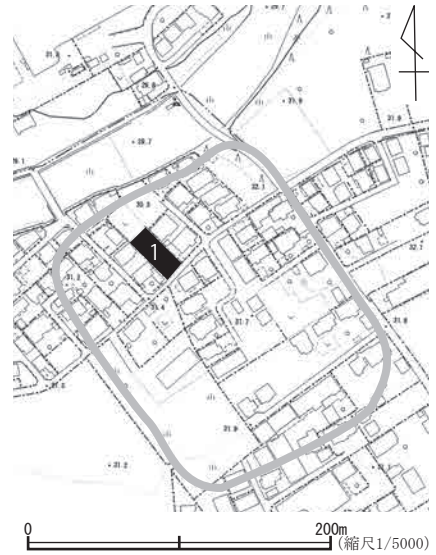


第 22 図 愛宕神社古墳の調査地点

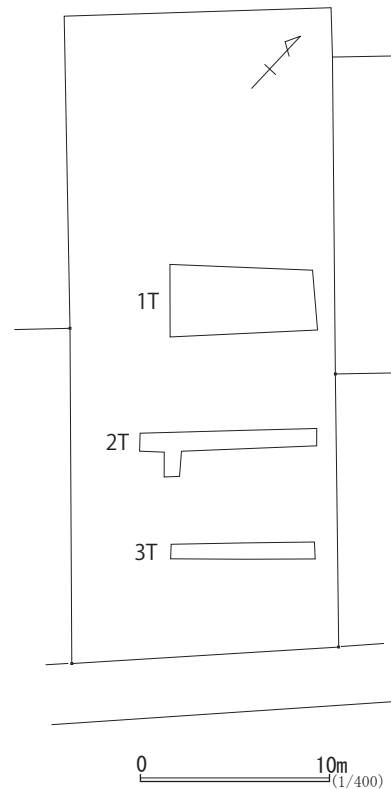


第 23 図 愛宕神社古墳第 1 次調査区

調査の結果、遺構・遺物の検出はなかった。調査区は厚い砂層で覆われていることがわかったため、深さ 1 m ほどで掘削を止めているが、周溝や埴輪等の古墳関連遺構・遺物の検出はなく、愛宕神社古墳が古墳である確証は得られなかった。古墳は厚い砂層の下に埋もれている可能性もあろう。愛宕神社古墳を古墳かどうか判断するには、やはり墳丘部の発掘調査により資料を得ることが必要であろう。



第 24 図 寄居新田遺跡の調査地点



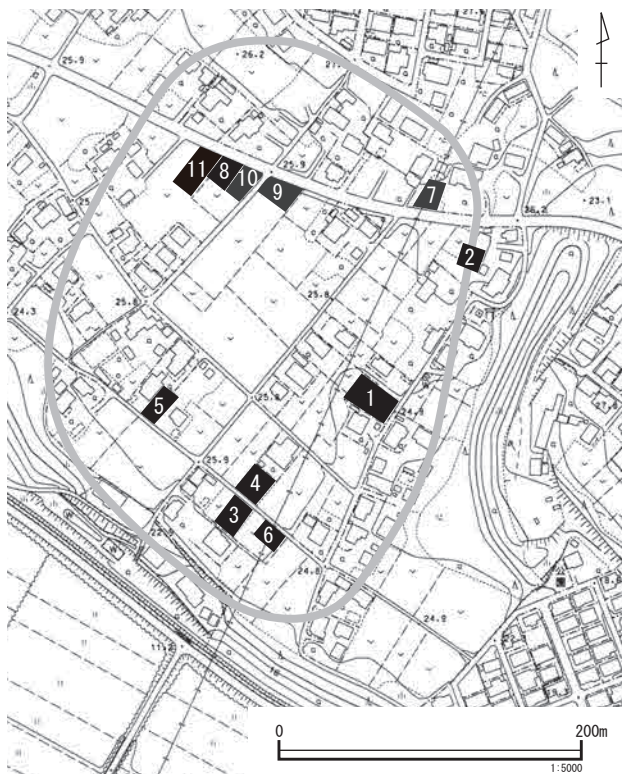
第 25 図 寄居新田遺跡第 1 次調査区

4 寄居新田遺跡

(1) 第 1 次調査報告

調査経緯 田彦字根崎 388-36 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は寄居新田遺跡の範囲内に当たっており、確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調

査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 3 月 11 日～12 日にかけて行われた。



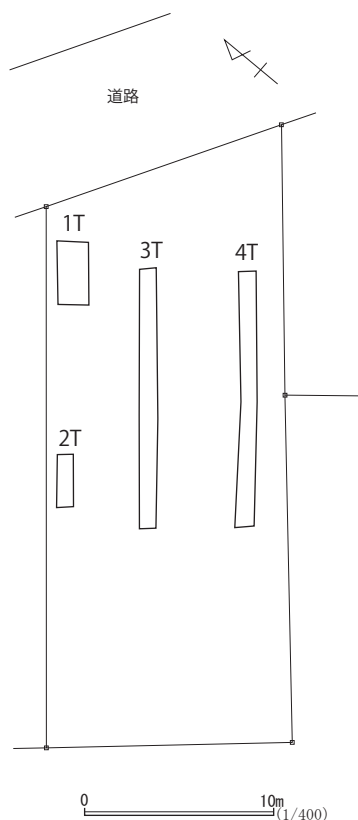
第 26 図 津田若宮遺跡の調査地点

第 3 表 津田若宮遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1981	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (古墳前期 1, 奈良 1), 土坑墓 2 (江戸)	1
2	1982	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳前期 1)	1
3	1983	勝田市教委	本調査	住居跡 3 (古墳中期 1, 古墳後期 1, 時期不明 1), 土坑 1 (弥生中期 1)	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (縄文 1, 古墳前期 1)	3
5	1993	勝田市教委	試掘調査	なし	4
6	1997	市教委	本調査	住居跡 4 (縄文中期 1, 時期不明 3)	5
7	2001	市教委	本調査	住居跡 2 (古墳前期 1, 時期不明 1)	6
8	2011	公社	試掘	掘立 1 (時期不明)	7
9	2014	公社	試掘	溝 1 (時期不明), 道 1 (時期不明)	8
10	2014	公社	試掘	溝 1 (時期不明), 土坑 1 (時期不明)	8

文献

- 1 昭和 56 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 58 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 5 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 津田若宮遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第 27 図 津田若宮遺跡第 11 次調査区

調査結果 調査地は、中丸川の支谷に臨む台地縁辺に位置し、北に傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ～ 0.5 m を測る。

調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

5 津田若宮遺跡

(1) 過去の調査

津田若宮遺跡においては、これまで 10 次に及ぶ調査が実施され、14 基の住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、縄文時代 2 基、古墳時代 6 基（前期 4, 中期 1, 後期 1）、奈良時代 1 基、時期不明 5 基となる。縄文時代の住居跡は中期を主体とするようであり、遺跡南部の 4・6 次調査区で確認されている。古墳時代前期の住居跡は、第 1・2・4・7 次調査区で確認されており、遺跡東方の谷沿いに集落域が広がるようである。

(2) 第 11 次調査報告

調査経緯 津田字若宮 3444-2 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は津田若宮遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 3



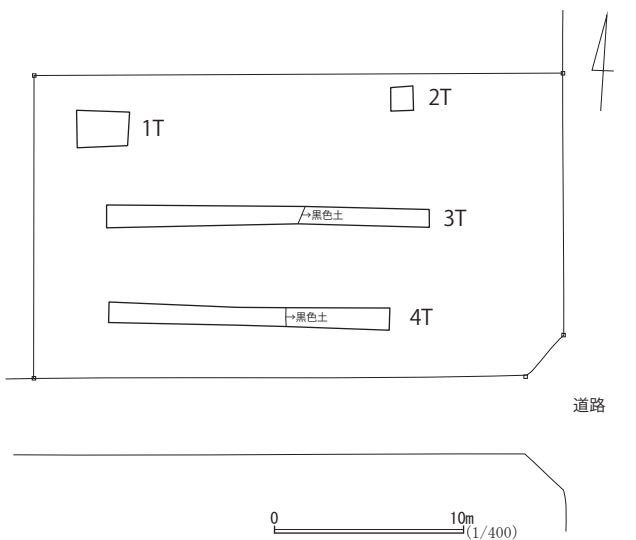
第 28 図 西谷津遺跡の調査地点

第 4 表 西谷津遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	2000	公社	本調査	陥穴 1 (縄文草創期, 住居 2 (古墳後期))	1
2	2002	公社	本調査	文化層 1 (旧石器), 溝 4 (時期不明)	1
3	2008	公社	試掘	なし	2

文献

- 1 向野遺跡群
- 2 平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第 29 図 西谷津遺跡第 4 次調査区

月 17 日～ 20 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から 180 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 4 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深

さは 0.6 ～ 0.7 m を測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

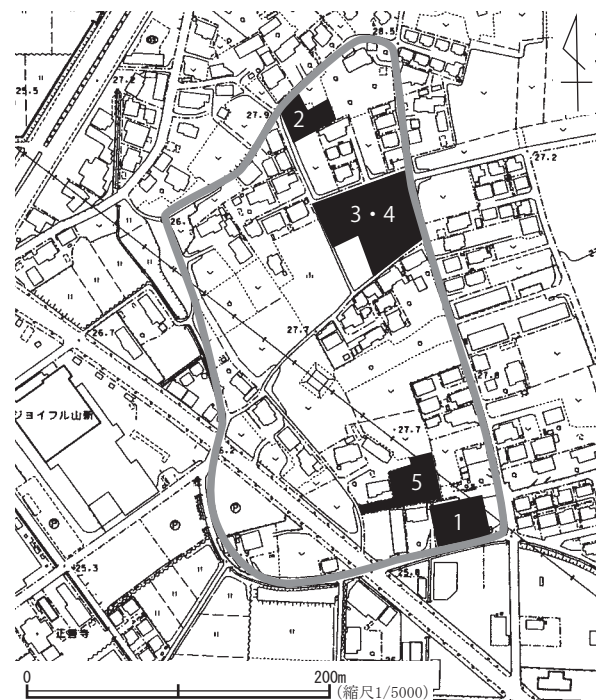
6 西谷津遺跡

(1) 過去の調査

西谷津遺跡においては、これまで 3 次に及ぶ調査が実施され、古墳時代後期の住居跡が 2 基検出されている。このほか旧石器の出土や縄文時代草創期の陥穴の検出などにも注意する必要がある。

(2) 第 4 次調査報告

調査経緯 馬渡字西谷津 2525-35 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は西谷津遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 4 月 23 日～ 28 日にかけて行われた。



第 30 図 松原遺跡の調査地点

調査結果 調査地は、本郷川から馬渡埴輪窯跡群へと至る小支谷（現在は埋め立てられている。）から100mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは

0.6～1.2mを測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

7 松原遺跡

第5表 松原遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1998	市教委	試掘	なし	1
2	2001	市教委	試掘	なし	2
3	2008	公社	試掘	住居5（古墳前期1，時期不明4）， 土坑1（時期不明），ピット1 （時期不明），溝2（時期不明）， 不明遺構1（時期不明）	3
4	2009	調査会	本調査	未報告	—

文献

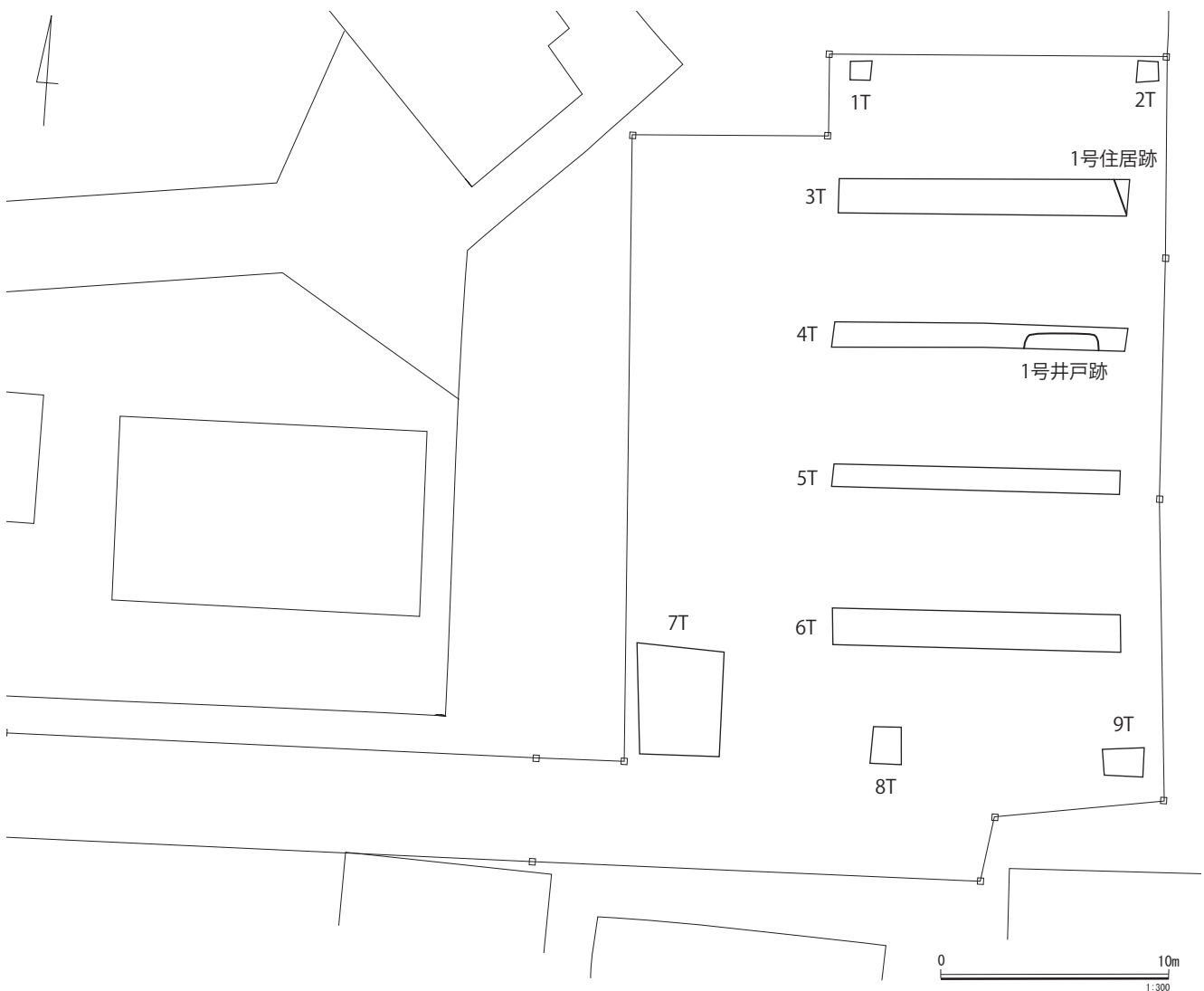
- 1 平成10年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成13年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成20年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

(1) 過去の調査

松原遺跡においては、これまで4次に及ぶ調査が実施されている。第3次試掘調査で住居跡が5基確認されたため、調査会により第4次発掘調査が実施されたが、報告書が未刊行のためその内容は不明となっている。出土遺物を見ると古墳時代前期の集落が広がるようである。

(2) 第5次調査報告

調査経緯 田彦字松原800-1外3筆に所在する土地



第31図 松原遺跡第5次調査区

について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は松原遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文

化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 4 月 23 日～28 日にかけて行われた。

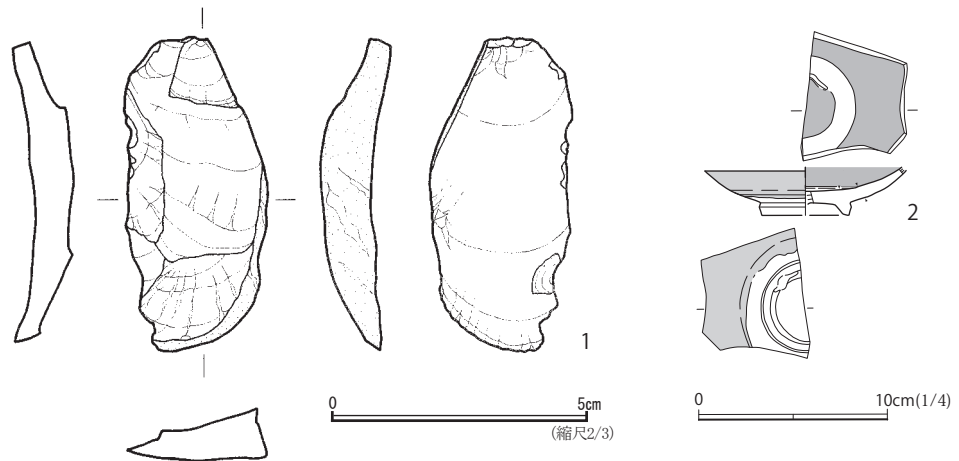
調査結果 調査地は、中丸川の低地を望む台地縁辺から 50 m ほど離れた地点に位置し、南西方向にゆるく傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 9 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4～0.7 m を測る。調査の結果、住居跡 1 基（古墳時代）、井戸跡 1 基（時期不明）が確認された。遺物はトレンチ表土より、土師器・須恵器・陶器の小片が出土した。また、住居跡覆土中より、土師器小片とともに旧石器が 1 点出土している。

遺物説明

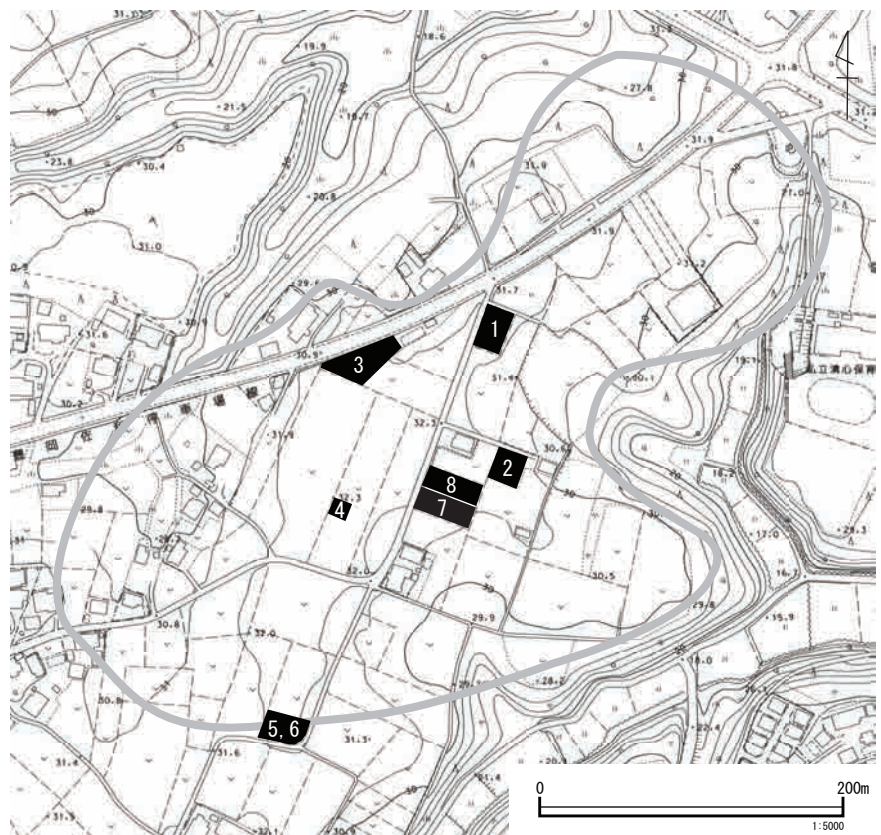
第 32 図

1 出土位置・注記：1 住フク土 時代時期：旧石器時代 器種：剥片 石材：ガラス質黒色安山岩 法量：長さ 82 mm，幅 28 mm，厚さ 8 mm 重量：21.3 g 備考：表面にローム土が付着する，右側面は自然面，打面は剥離面

2 出土位置：松原 5 次 7 トレンチ表土 材質：陶器 器種：皿 残存：底部 50%，体部下半 20% 法量：高台径（4.6） 色調：素地明褐色 胎土：－



第 32 図 松原遺跡第 5 次調査区出土遺物



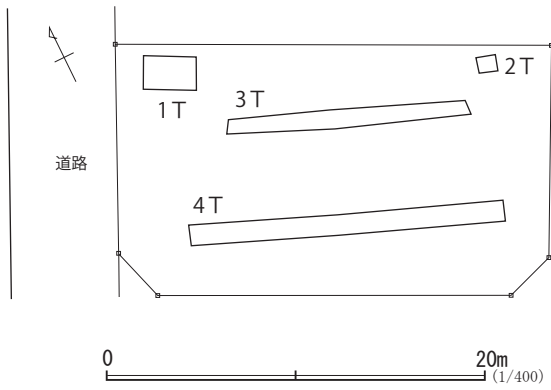
第 33 図 高野富士山遺跡の調査地点

第 6 表 高野富士山遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘調査	なし	1
2	1989	勝田市教委	試掘調査	住居跡 1(古墳)	2
3	2001	市教委	本調査	土坑墓 1(近世), 住居跡 1(古墳)	3
4	2007	市教委	試掘調査	なし	4
5	2010	公社	試掘調査	住居跡 3(平安), 土坑 2	5
6	2010	公社	本調査	住居跡 1(平安)	5
7	2013	公社	試掘調査	なし	6

文献

- 1 昭和 57 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 平成元年度勝田市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成 13 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 19 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 22 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書



第34図 高野富士山遺跡第8次調査区

技法等：内面青緑釉。体部外面透明釉。底部外面露胎。見込み蛇ノ目
 釉ハギ。内外面に目跡あり。備考：肥前産青緑釉輪弁皿。

8 高野富士山遺跡

(1) 過去の調査

高野富士山遺跡においては、これまで7次に及ぶ調査が実施され、古墳時代2基、平安時代3基の住居跡が確認されている。遺跡中央部では古墳時代の住居跡が検出され、平安時代の住居跡は遺跡南端部で確認されており、時代により集落域が異なるようである。

(2) 第8次調査報告

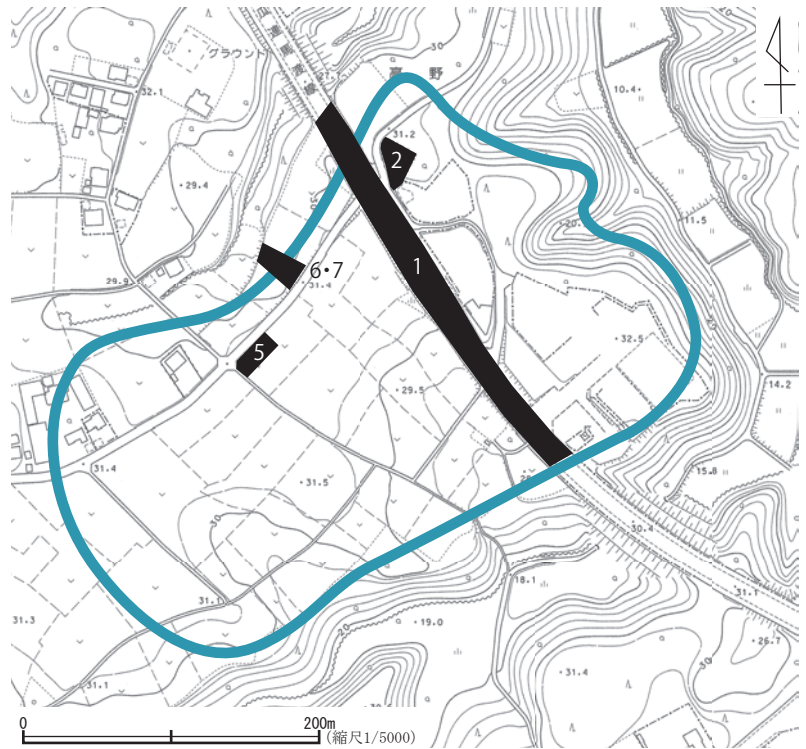
調査経緯 高野字富士山 1692-1 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は高野富士山遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、茨城県教育委員会にそれを進達するとともに、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は5月13日～15日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南西方向に入り込む谷から140mほど離れた地点に位置し、南東方向にゆるく傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.8～1.0mを測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

9 東原遺跡

(1) 過去の調査

東原遺跡においては、これまで4次に及ぶ調査が実施され、第1次調査で13基の住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、古墳時代3基、奈良時代5基、平安時代1基、時期不明4基となる。土器



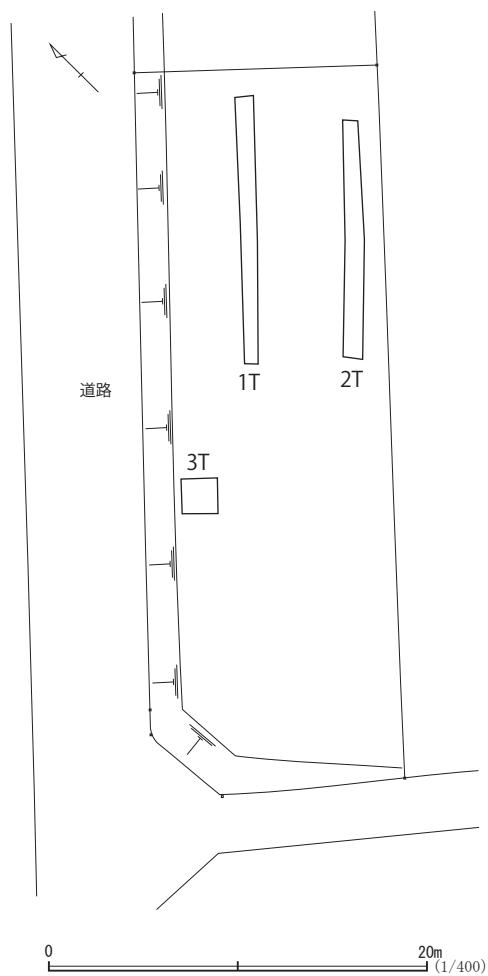
第35図 東原遺跡の調査地点

第7表 東原遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1989	県教育財団	本調査	住居跡13(古墳3, 奈良5, 平安1, 不明4), 土坑7, 溝5, 井戸1	1
2	1999	市遺跡調査会	本調査	土坑1(縄文中期)	2
3	2006	市遺跡調査会	本調査	不明	なし
4	2007	市遺跡調査会	本調査	不明	なし

文献

- 1 主要地方道瓜連馬渡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書
- 2 東原遺跡発掘調査報告書



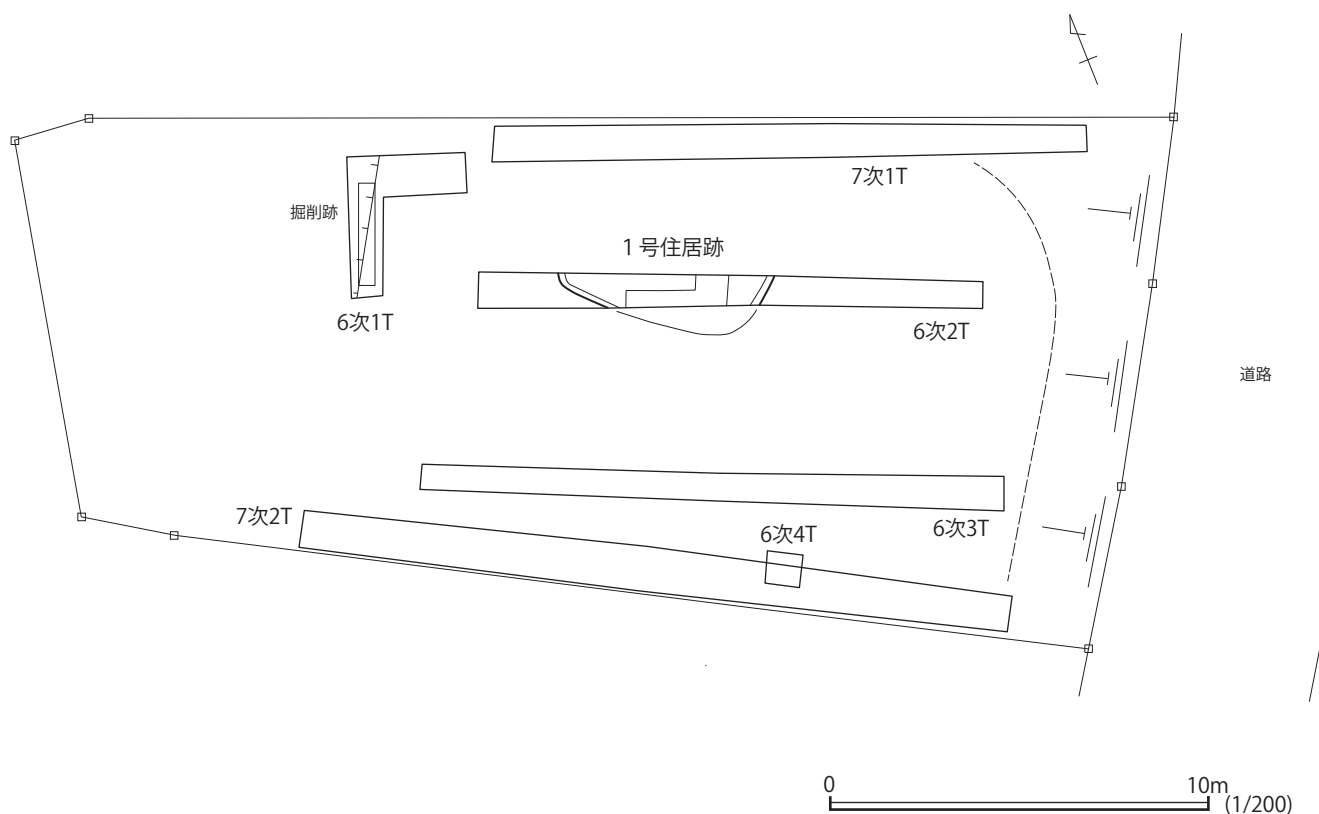
第 36 図 東原遺跡第 5 次調査区

からみると 7～9 世紀を主とする集落のようである。また 2 次調査では縄文時代中期の土坑も検出されており、縄文時代の遺構も存在するようである。

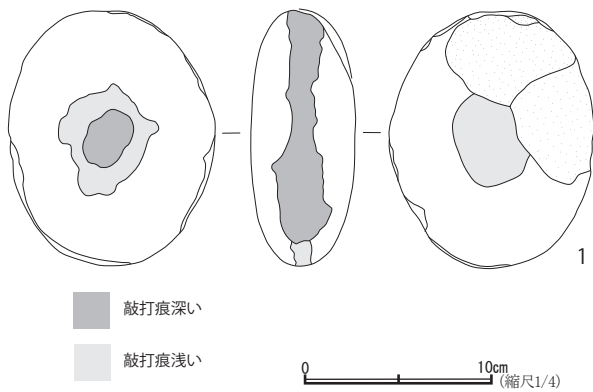
(2) 第 5 次調査報告

調査経緯 高野字東原 991 番 1 の一部に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は東原遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行った。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 5 月 27 日～6 月 2 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南に入り込む小支谷脇の台地縁辺に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4～0.5 m を測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。



第 37 図 東原遺跡第 6・7 次調査区



第38図 東原遺跡第6次調査区出土遺物

(3) 第6・7次調査報告

調査経緯 高野字東原 965 番 1 の一部に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は東原遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 9 月 14 日～ 18 日、10 月 27～ 30 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から南に入り込む小支谷脇の台地縁辺に位置し、西に傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。

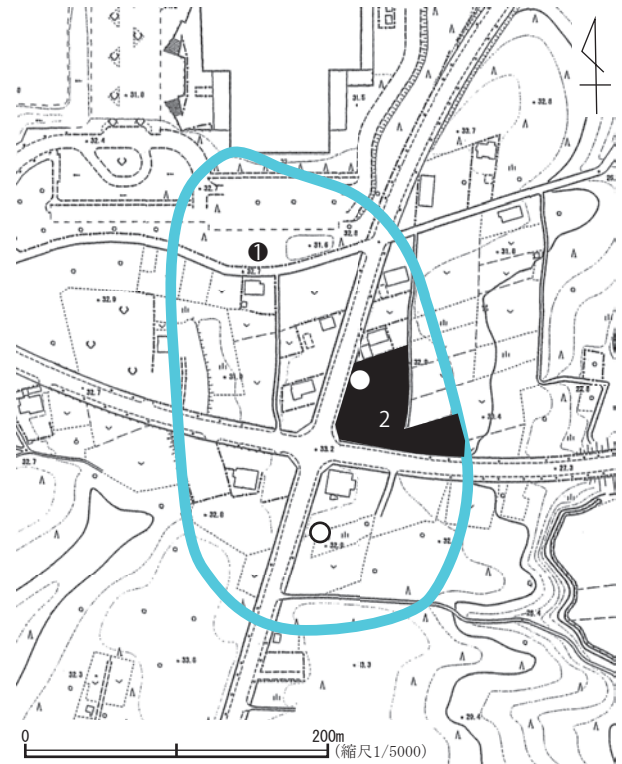
第 6 次調査は 4 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.1～ 0.5 m を測る。調査の結果、住居跡 1 基（古墳時代後期）が確認された。1 号住居跡は、土師器片の出土や、覆土中に竈崩壊土と思われる白色粘土が混じることからみて、古墳時代後期の住居跡であろう。遺物は 1 号住居跡覆土から土師器片や敲石が出土している。

第 7 次調査は擁壁の入る場所に 2 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2～ 1.1 m を測る。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

遺物説明

第 38 図

1 出土位置：1 住 材質：石（砂岩） 器種：敲石 残存：一部欠失
 法量：長 13.7、幅 11.0、厚 5.6、重 1120.3g 色調：灰色 技法等：平



第 39 図 孫目古墳群の調査地点（○印は古墳のおおよその位置を示す）

坦面両面中央に敲打痕。側面は敲打痕が全周する。

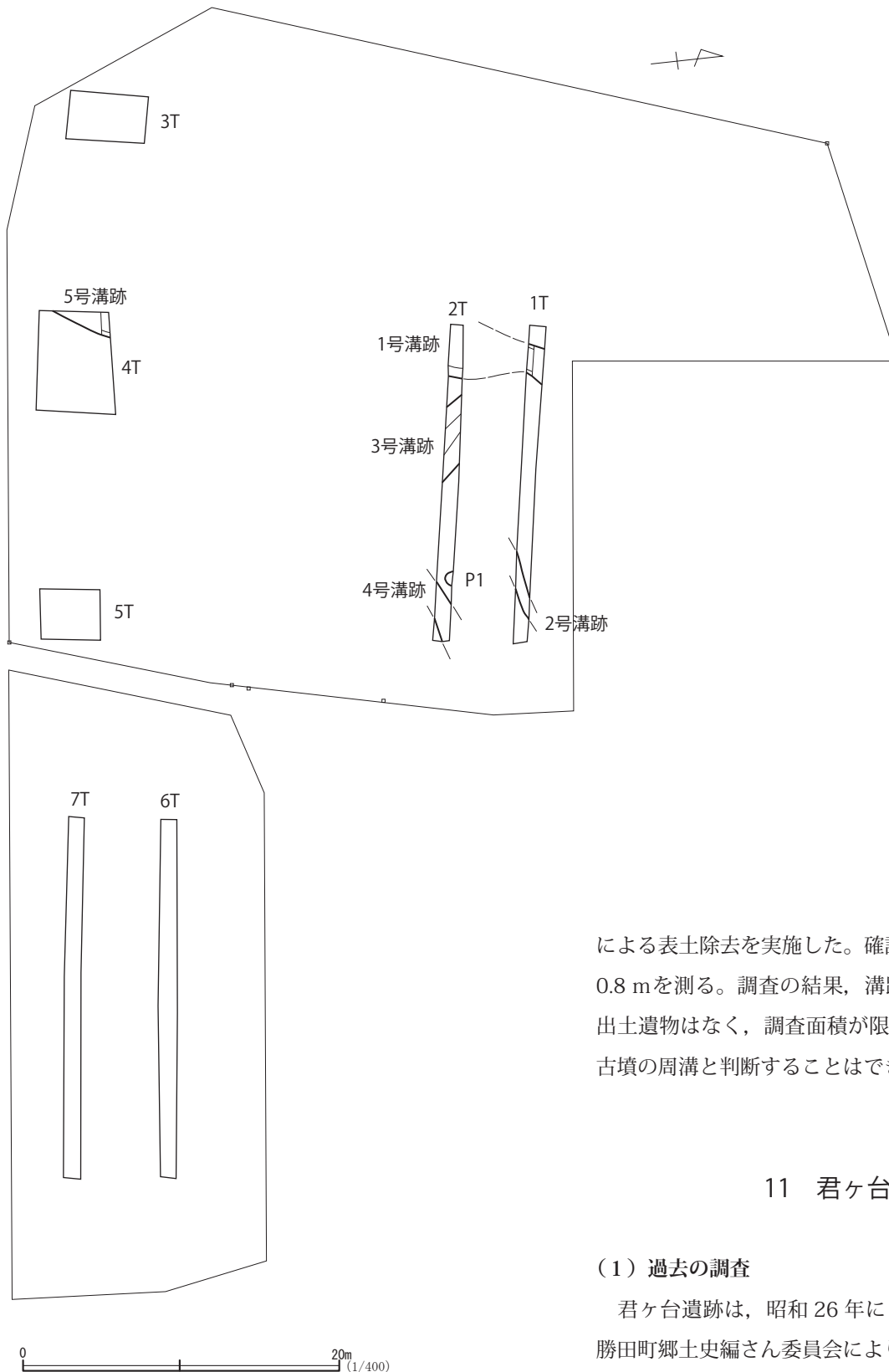
10 孫目古墳群

(1) 過去の調査

孫目古墳群は『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』において、3 基の小規模な円墳が確認されている（第 39 図の丸印）。そのうちの墳丘径 18m ほどの円墳 1 基を、1998 年から 1999 年にかけて茨城県教育財団が発掘調査を実施し、凝灰質泥岩の切石で構築された横穴式石室が検出されている。

(2) 第 2 次調査報告

調査経緯 佐和字篠根沢 2052-59 外に所在する土地について個人住宅建築の計画があり埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は孫目古墳群に当たっており、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。続いて、文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 6 月 23 日～ 25 日にかけて行われた。



第40図 孫目古墳群第2次調査区

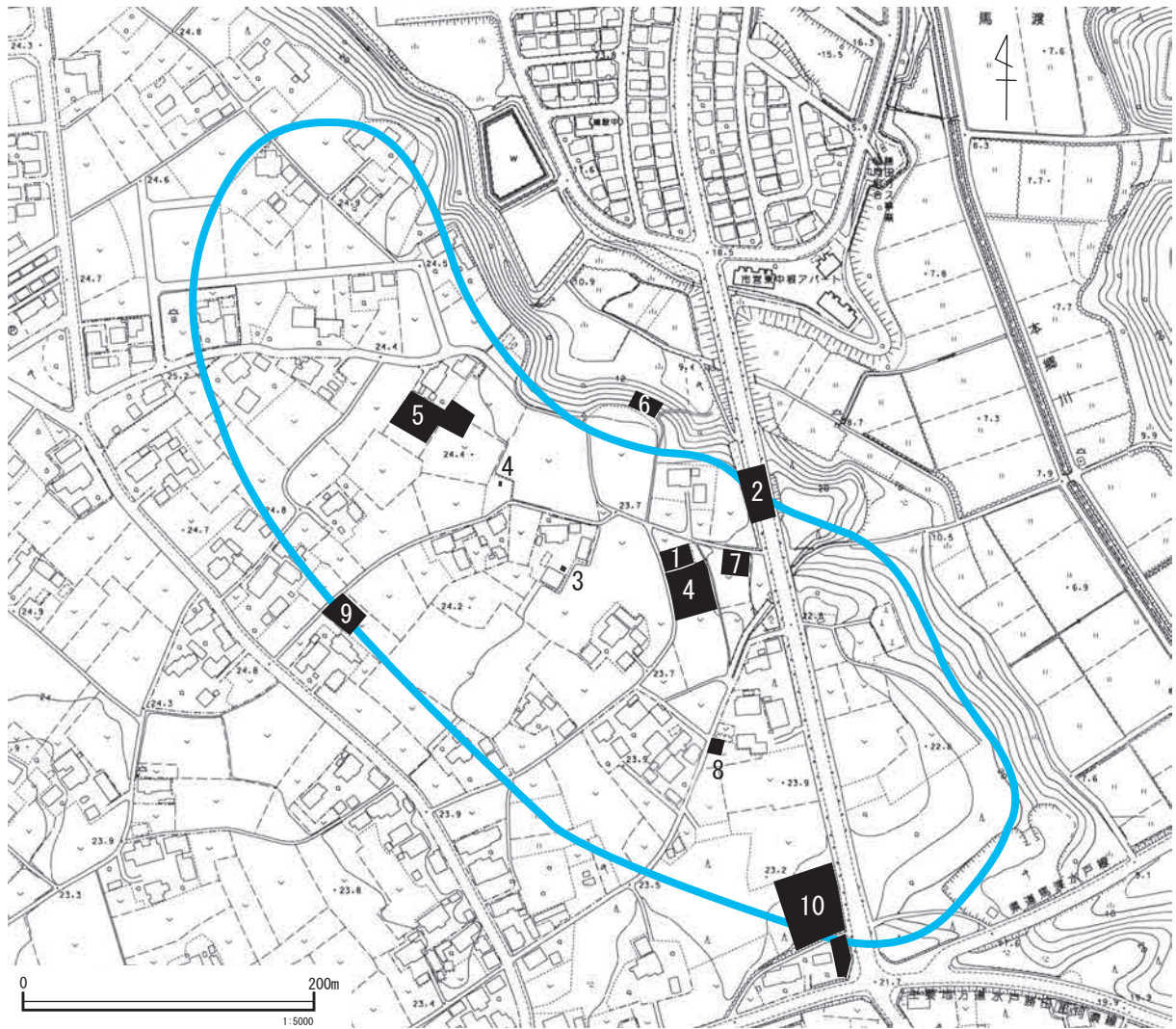
調査結果 調査地は、新川が流れる旧真崎浦の低地から北方向に入り込む谷から100mほど離れた地点に位置し、東方向にゆるく傾斜する地形を呈する。調査時は畑であった。調査は7か所のトレンチを設定し、重機

による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.8mを測る。調査の結果、溝跡5条が確認されたが、出土遺物はなく、調査面積が限られていたこともあり、古墳の周溝と判断することはできなかった。

11 君ヶ台遺跡

(1) 過去の調査

君ヶ台遺跡は、昭和26年に甲野勇氏の指導の下で、勝田町郷土史編さん委員会により、縄文時代中期末の土坑や古墳時代の住居跡が調査されているようであるが、内容は未報告である。この昭和26年の調査を第1次調査とすると、君ヶ台遺跡はこれまでに9次の調査が実施されている。第2次調査以後、住居跡は8基調査されており、いずれも縄文時代の住居跡と思われる。第2次調査では住居跡覆土中の貝層が検出されている。また、



第41図 君ヶ台遺跡の調査地点

第8表 君ヶ台遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1951	勝田町郷土史編纂委員会	本調査	土坑群, 住居跡	—
2	1979	勝田市教委	本調査	土坑 16, 住居跡 4	1
3	1994	市教委	本調査	土坑 3, 住居跡 2	2
4	1999	市教委	試掘	なし	3
5	2001	市教委	試掘	住居跡 1, 土坑 1	4
6	2003	市教委	本調査	貝塚 1	5
7	2006	市教委	試掘	なし	6
8	2006	市教委	本調査	住居跡 1	—
9	2010	公社	試掘	土坑 2, 溝 1	7

文献

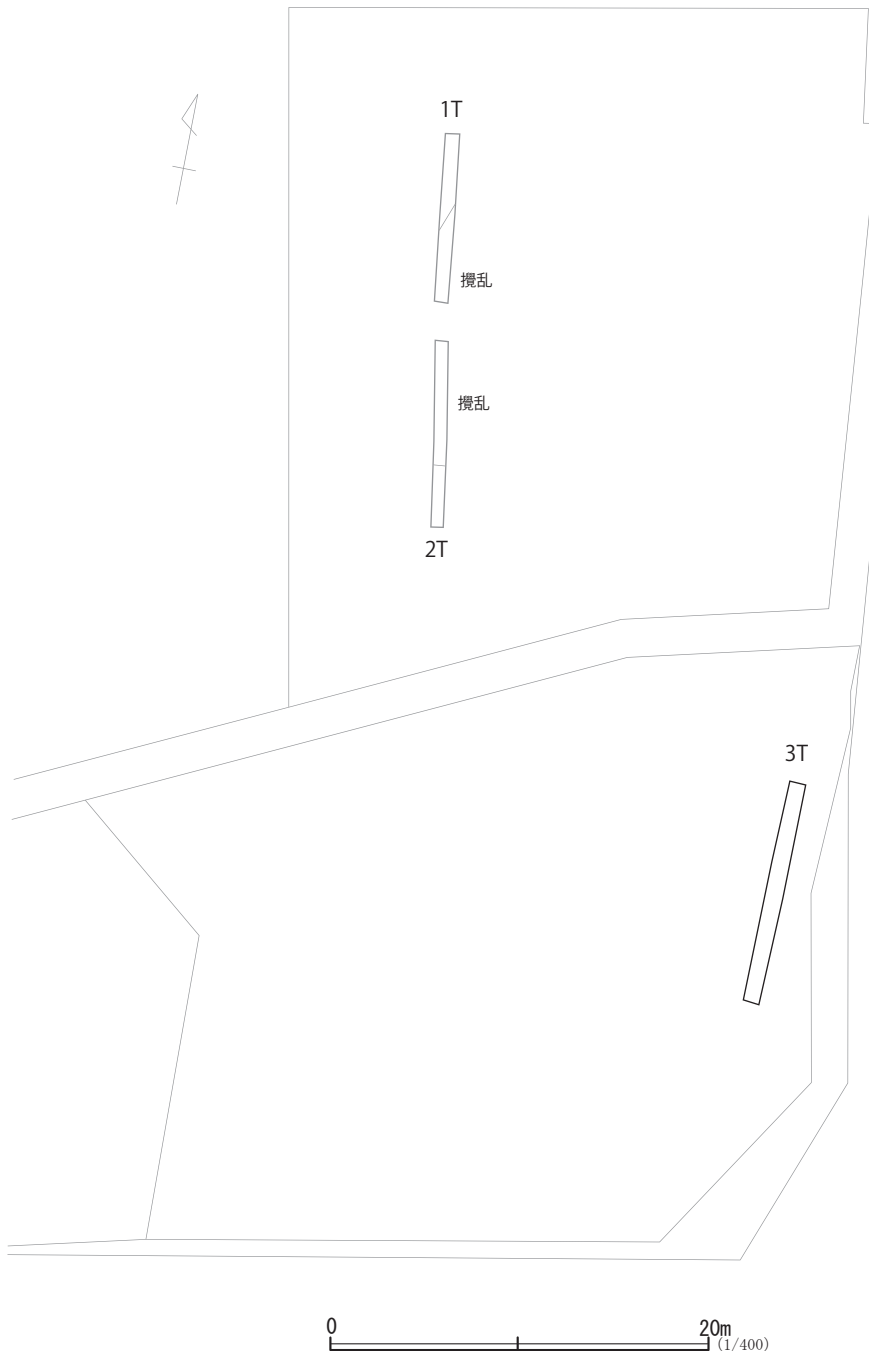
- 1 君ヶ台遺跡調査報告書
- 2 平成6年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 平成10年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成13年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成15年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成18年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成22年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

第6次調査では、工事により露出した斜面部の貝層の調査も実施されている。

(2) 第10次調査報告

調査経緯 中根字荒谷 1916-2外 3筆に所在する土地について店舗建築の計画があり埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は君ヶ台遺跡の範囲内に当たっており、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行った。これに従い文化財保護法 93条 1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は6月30日～7月7日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、本郷川低地を望む台地縁辺から150mほど離れた地点に位置する。調査区中央部に東側から浅い谷が入り込み、現状はその部分に排水溝が設けられている。調査区の現況は荒地であった。調査は開発による削平部分を中心に3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは



第 42 図 君ヶ台遺跡第 10 次調査区

0.4 ～ 1.4 m を測り、2 トレンチと 3 トレンチの間に入り込む浅い谷部に向け、確認面は傾斜していた。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

12 勝倉城跡・勝倉古墳群・勝倉富士山遺跡

(1) 過去の調査

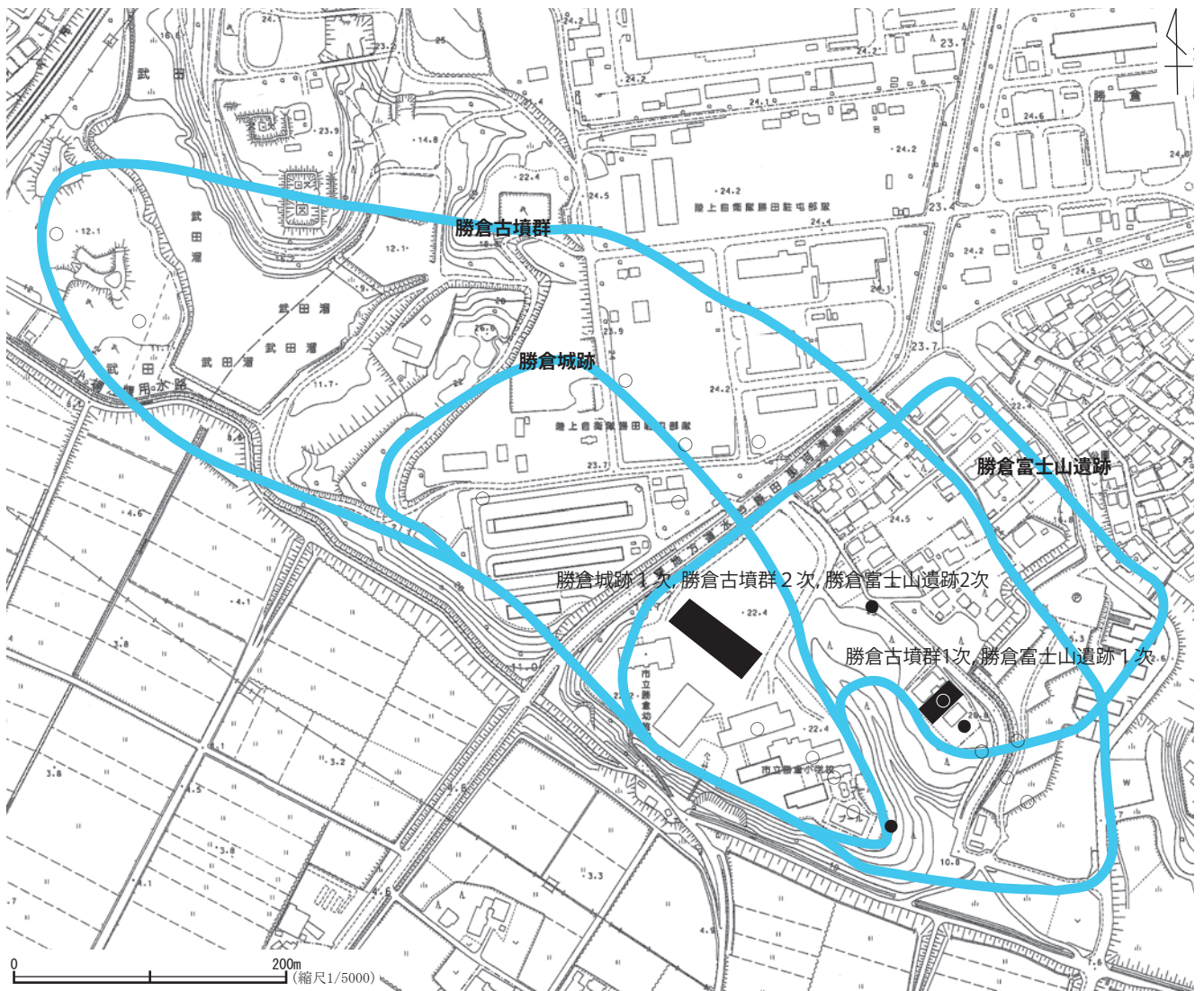
勝倉古墳群において 1997 年に古墳周溝部の調査が実

施され、幅 2m ほどの周溝が確認されている（『平成 9 年度市内遺跡発掘調査報告書』）。古墳に伴う埴輪等の遺物は出土していないが、中・後期の弥生土器片が出土しているため、周辺に弥生時代の住居跡が存在するものと考えられる。

(2) 勝倉城跡第 1 次・勝倉古墳群第 2 次・勝倉富士山遺跡第 2 次調査報告

調査経緯 勝倉 2995 番 1 外に所在する土地について、小学校建築に伴う埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は勝倉富士山遺跡・勝倉城跡・勝倉古墳群の範囲内に当たっており、土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従文化財保護法 94 条 1 項に基づく通知が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 6 月 30 日～7 月 15 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から 80 m ほど離れた地点に位置し、現況は勝倉小学校の運動場となっており、平坦な地形を呈する。調査は 12 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.1 ～ 0.3 m を測る。調査の結果、確認面の幅が 6m ほどの堀跡を 1 条確認した。堀跡の時期を決定できる遺物の出土はなかったが、規模の大きな堀跡であることから、戦国期の遺構と思われる。地元の方からの聞き取りによると、昭和 21 年ごろの運動場造成時に、堀跡に伴う土塁は削平されたらしい。幼稚園玄関前に高さ 5 m ほどの土塁の一部が残っているため、規模の大きな土塁が今



第43図 勝倉城跡・勝倉古墳群・勝倉富士山遺跡の調査地点

回検出の堀跡に沿うように存在していたのであろう。12トレンチで堀跡の一部を重機を用いて掘り込んでみた。確認面から175cmのところまで掘ったが、堀底は確認できなかった。堀跡からの遺物は堀埋土から土師器小片少量と、堀確認面から昭和時代のインク壺が出土している。

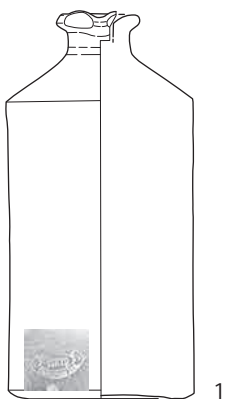
なお2トレンチで調査された土坑は、ローム土を主とする覆土で、長さ3メートルを測る細

長い形状を持つことから、縄文時代の陥穴と推定される。覆土からみて縄文時代の古い時期のものであろう。

遺物説明

第44図

1 出土位置：8トレンチ（堀確認面） 材質：陶器 器種：インク壺
 残存：完形 法量：口径4.4，器高20.4，底径9.8 色調：外面底部露胎部灰褐色 胎土：— 技法等：底面を除く外面全体に錆釉。片口を持つ。外面胴部下端に刻印（上段「SHINOZAKI□」中段「TOKYO」下段「CHAMPIONINC」 備考：篠崎インキ製造株式会社の製品と思われる。



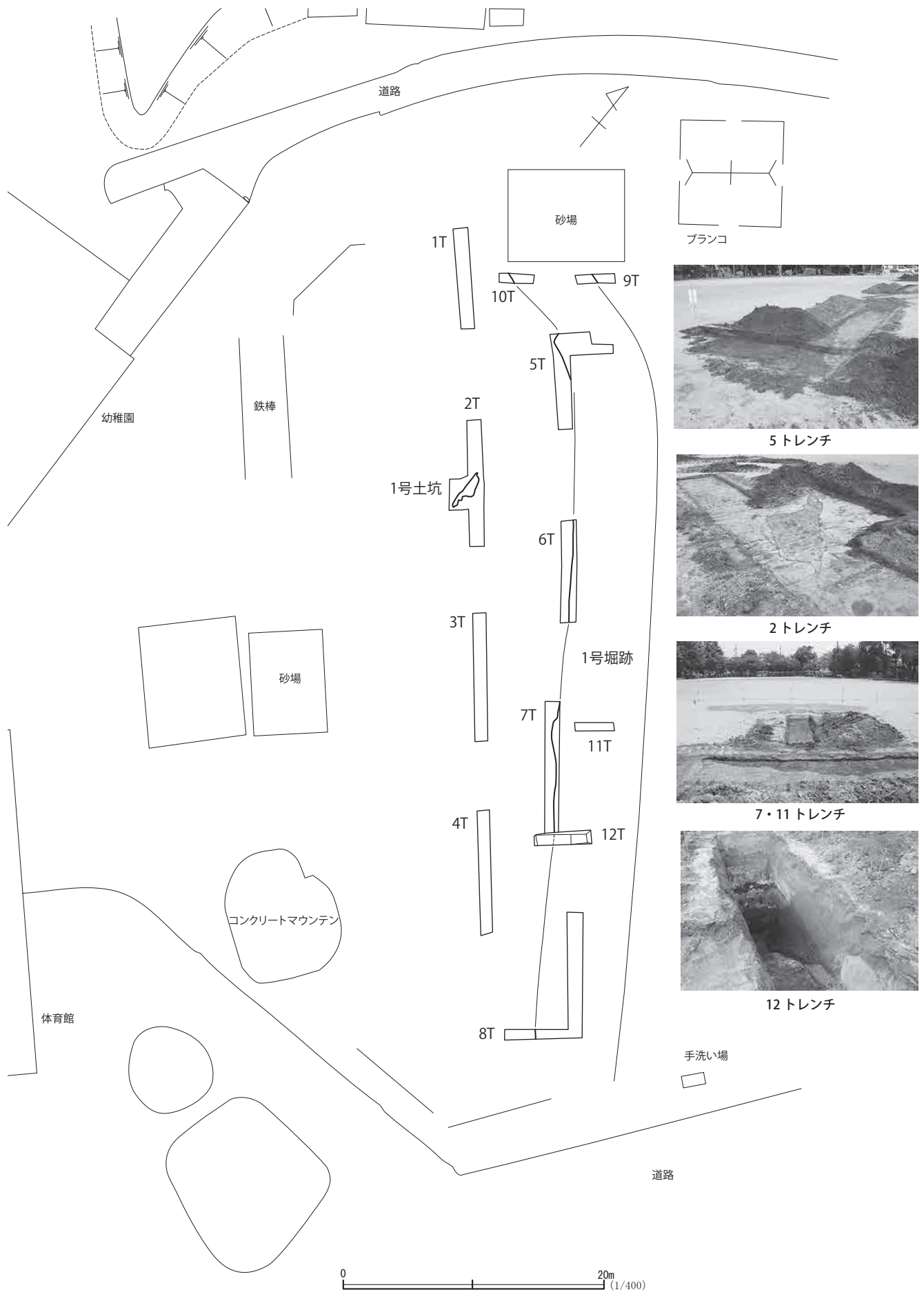
0 10cm(1/4)

第44図 勝倉城跡第1次・勝倉古墳群第2次・勝倉富士山遺跡第2次調査区出土遺物

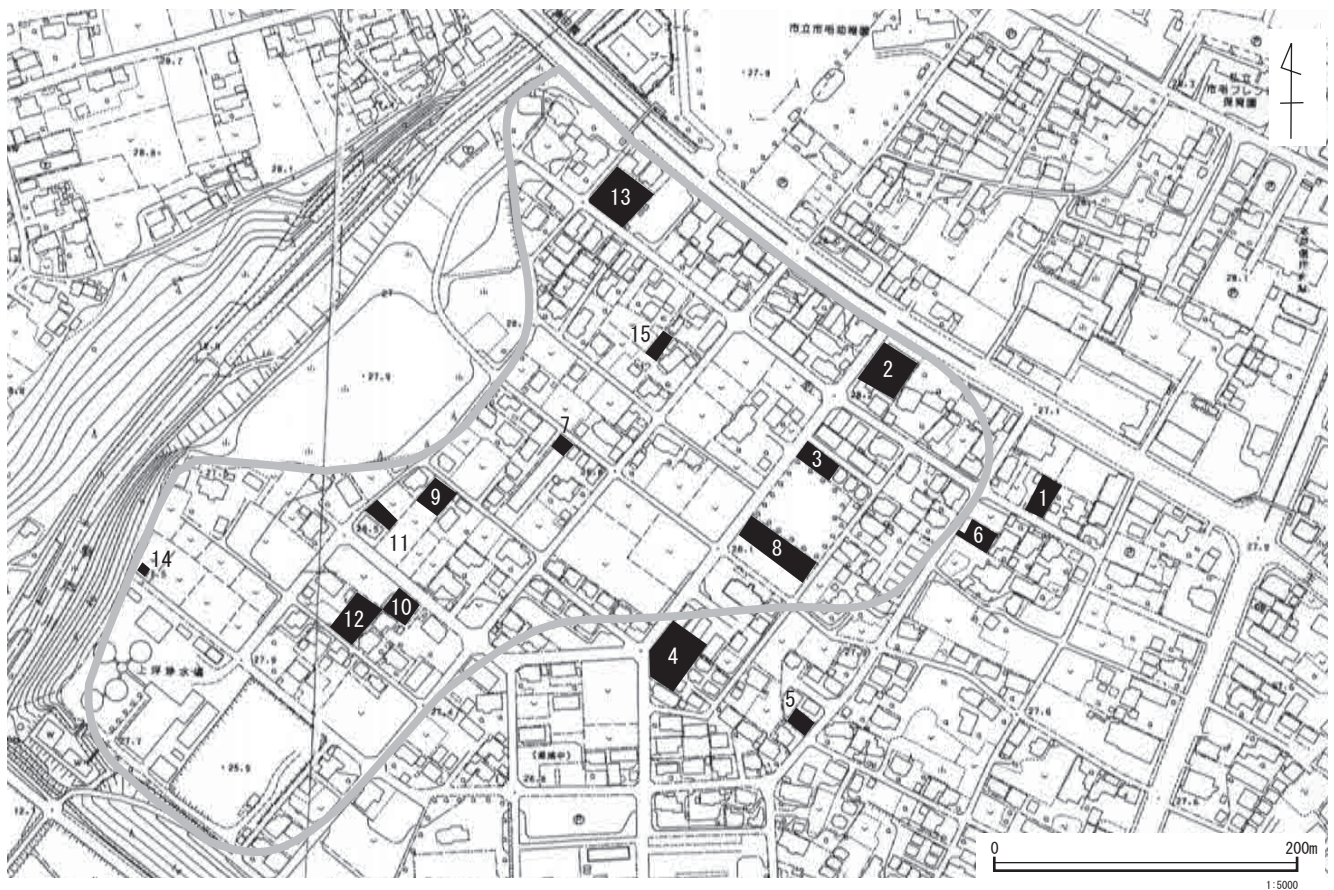
13 市毛上坪遺跡

(1) 過去の調査

市毛上坪遺跡においては、これまで14次に及ぶ調査が実施され、24基の住居跡が検出されている。そのな



第 45 図 勝倉城跡第 1 次・勝倉古墳群第 2 次・勝倉富士山遺跡第 2 次調査区



第 46 図 市毛上坪遺跡の調査地点

第 9 表 市毛上坪遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1980	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳後期)	1
2	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 1 (古墳)	なし
3	1985	勝田市教委	試掘調査	なし	2
4	1985	勝田市教委	本調査	住居跡 2 (平安), 溝跡 1 (時期不明), 土坑 10	2
5	1986	勝田市教委	試掘	なし	3
6	1991	勝田市教委	試掘	なし	4
7	1992	勝田市教委	本調査	溝跡 1 (時期不明)	5
8	1996	市教委	試掘	なし	6
9	2006	市教委	試掘	なし	7
10	2006	市教委	本調査	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 土坑 1	7
11	2006	市教委	試掘	住居跡 2 (古墳後期 1, 平安 1), 溝跡 1 (時期不明)	7
12	2012	公社	試掘	住居跡 14 (古墳時代か)	8
13	2013	公社	試掘	住居跡 1 (古墳前期)	9
14	2014	公社	試掘	住居跡 1 (古墳), 土坑 1 (時期不明)	10

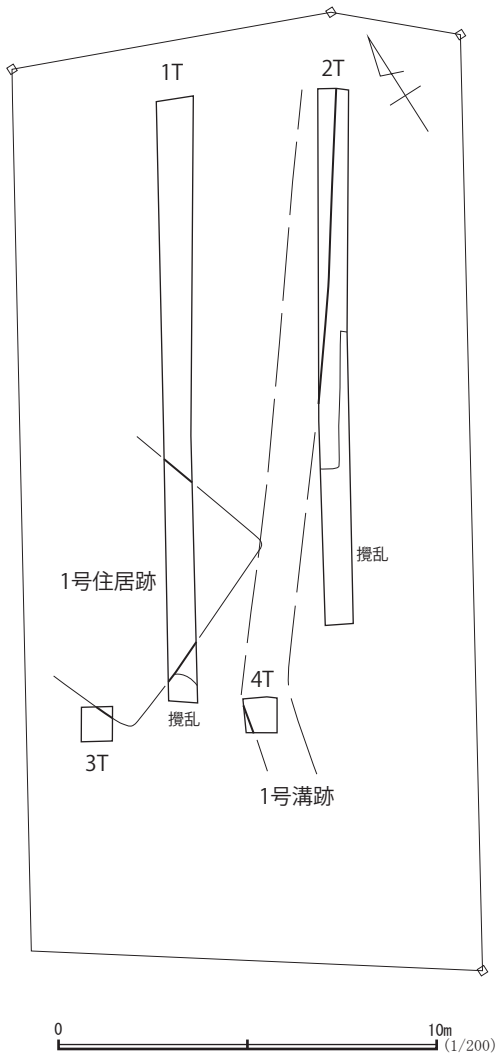
文献

- 1 市内遺跡発掘調査報告書 (昭和 55 年度)
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 61 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 3 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 4 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 8 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 10 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

かで時期が判明している住居跡は、古墳時代前期が 1 基、後期が 3 基、平安時代が 4 基である。なお、第 12 次調査で確認された 14 基の住居跡は、プラン確認にとどめたため時期不明となっているが、覆土中から出土した土器をみると、すべて古墳時代の住居跡である可能性が高

い。このようにこれまでの調査からみると、市毛上坪遺跡は古墳時代の大集落と捉えることができる。

遺構分布をみると、古墳時代は台地縁辺からやや奥に入った地区である遺跡北東部と、台地縁辺に近い遺跡南東部にわかれて集落が展開するようである。第 12 次調

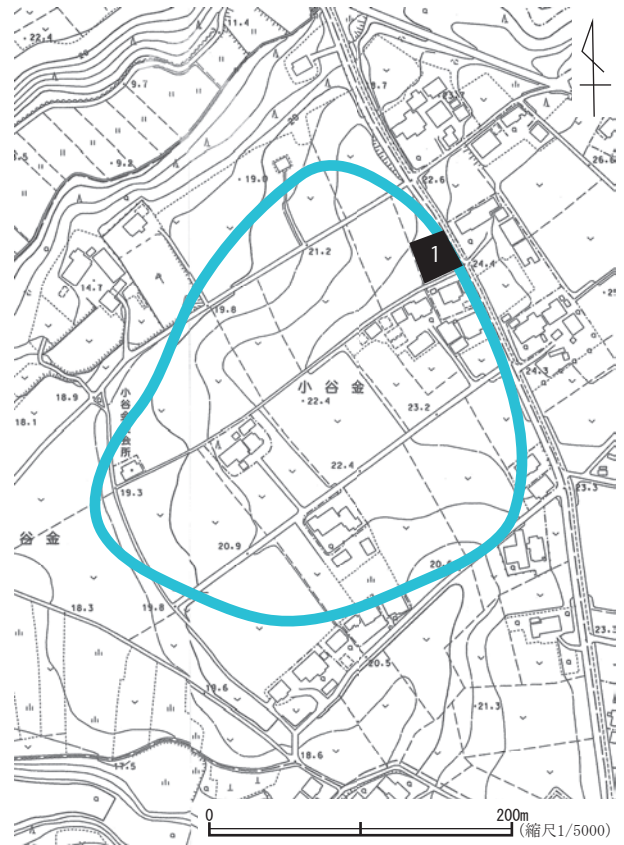


第 47 図 市毛上坪遺跡第 15 次調査区

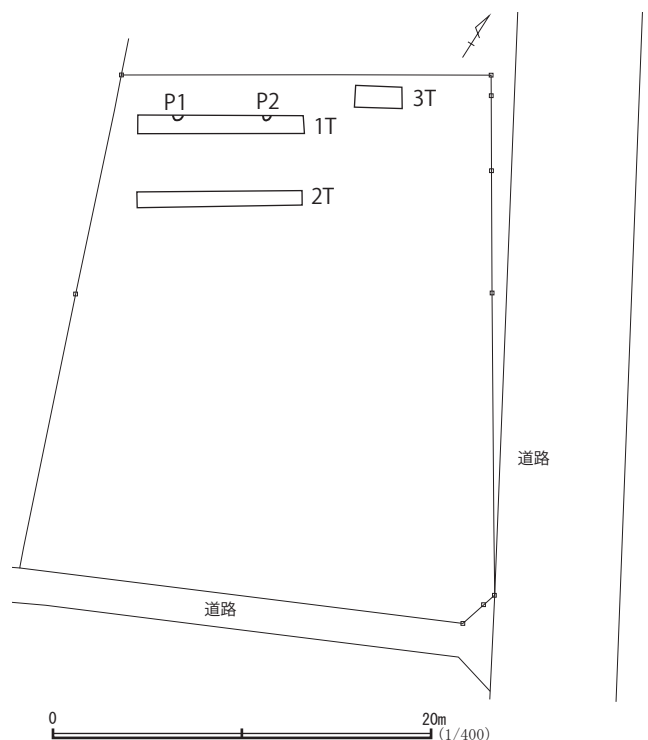
査区は南西部の集落域に該当し、その地区の遺構密度が高いことからみて、市毛上坪遺跡の古墳時代集落の中心は遺跡南西部にあると思われる。なお平安時代の集落域もこの南西部集落域に重なるようである。

(2) 第 15 次調査報告

調査経緯 市毛字上坪 1262-2 ほかの所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は市毛上坪遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 7 月 14 日～ 15 日にかけて行われた。



第 48 図 小谷金東遺跡の調査地点



第 49 図 小谷金東遺跡第 1 次調査区



第 50 図 小谷金東遺跡第 1 次調査区出土遺物

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から440 mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は4か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.7 mを測る。調査の結果、住居跡1基、溝跡1条が確認された。住居跡は1・3トレンチから出土した土師器小片からみて、古墳時代と思われる。溝跡は出土遺物がなく時期不明である。遺物は各トレンチの表土より、縄文土器・土師器・陶器・石製模造品の小片が出土している。

14 小谷金東遺跡

(1) 第1次調査報告

調査経緯 小谷金 11167-1 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は小谷金東遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は7月14日～15日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川低地から北東方向に延びる谷から130 mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は荒地であった。調査は3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.3～0.4 mを測る。調査の結果、ピット2基が確認された。遺物は表土中から縄文土器片が1点出土している。

遺物説明

第50図

1 出土位置・注記：2トレ 時代時期：縄文時代早期（鶴ヶ島台式）
器種：深鉢形土器 文様：篋状工具による沈線区画内に棒状工具による沈線文あるいは刺突文、沈線区画の交点には刺突文 備考：器内外面条痕文、胎土に繊維と金雲母を含む



第51図 黒袴遺跡の調査地点

第10表 黒袴遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1965	不明	本調査	道路1, 土坑1	なし
2	1983	勝田市教委	本調査	住居3(古墳前期2, 平安1), 土坑3	1
3	2008	公社	試掘	溝1	2

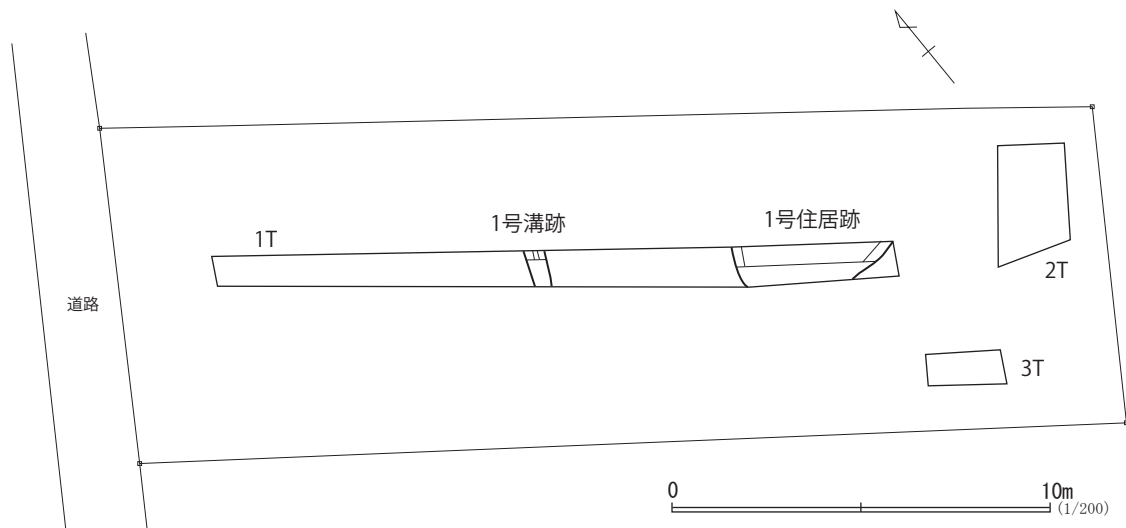
文献

- 1 昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書
2 平成20年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

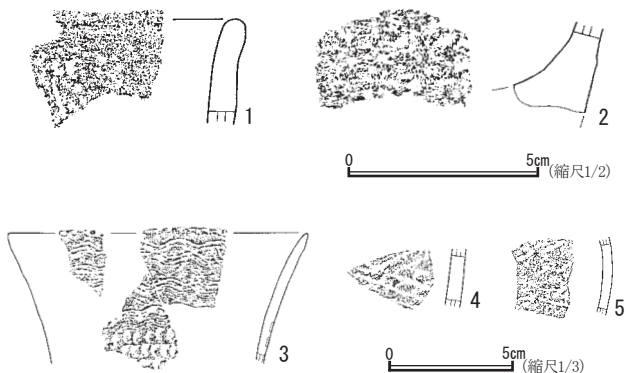
15 黒袴遺跡

(1) 過去の調査

黒袴遺跡は、ここから採集した資料をもとに、1952年に伊東重敏が「クロマタギ式」を提唱した遺跡として知られている。「昭和40年9月に伊東重敏氏らによって小規模な発掘調査が実施され、道路状遺構と土壇1基が確認されている」(『昭和58年度市内遺跡発掘調査報



第 52 図 黒袴遺跡第 4 次調査区



第 53 図 黒袴遺跡第 4 次調査区出土遺物

告書』)と伝えられているが、詳細な調査地点は不明である。これが第 1 次調査となる。第 2 次調査は 1983 年に、個人住宅建設に伴う市内遺跡の発掘調査が実施されている。2 × 32 m のトレンチ内から、住居跡 3 基、土坑 3 基が検出され、住居跡は 2 基が古墳時代前期、1 基が平安時代と報告された。縄文時代中期、弥生時代中・後期の土器も出土している。

(2) 第 4 次調査報告

調査経緯 津田 3372 番 4 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は黒袴遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は

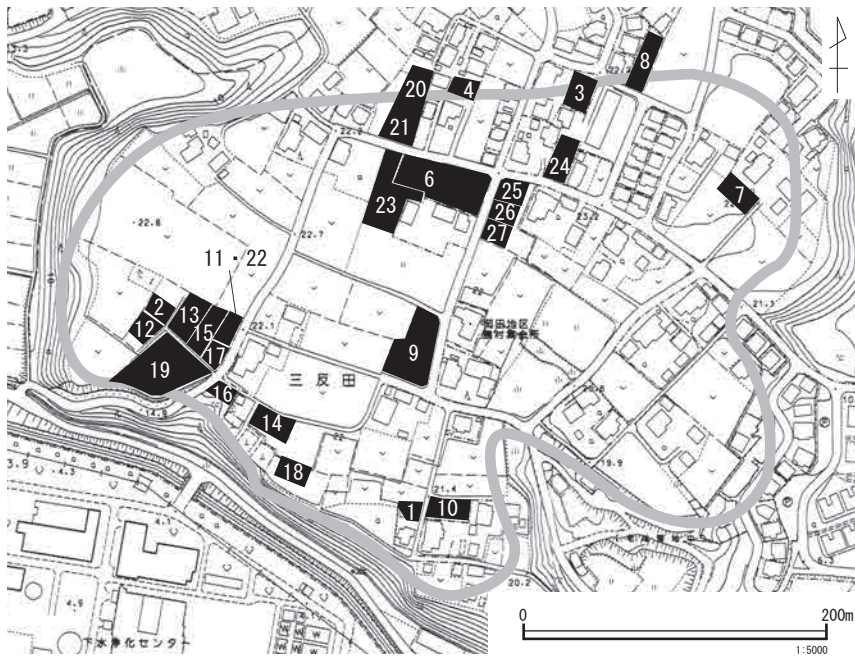
7 月 24 日～ 28 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地から北に入り込む小支谷を望む台地縁辺に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ～ 0.4 m を測る。調査の結果、住居跡 1 基（弥生時代後期）、溝 1 条（時期不明）が確認された。遺物は、住居跡覆土から弥生土器（十王台式土器）の小片が出土し、表土中から縄文土器片が出土している。

遺物説明

第 53 図

- 1 出土位置・注記：2 トレ 時代時期：縄文時代早期（撚糸文系） 器種：深鉢形土器 文様：縄文 (RL)
- 2 出土位置・注記：1 トレ 時代時期：縄文時代 文様：無文 備考：底部付近
- 3 出土位置・注記：1 住フク土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：小型壺形土器 法量：口径 118 mm（残存率 9%） 文様：口唇部 - 籠状工具刻み, 口縁部 - 櫛描文（櫛歯 4 本）, 頸部 - 带状刺突文（半截竹管） 備考：器内面に炭化物付着
- 4 出土位置・注記：1 住フク土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：中・小型壺形土器 文様：付加条縄文 (R-S, L-Z) 備考：器外面に炭化物付着
- 5 出土位置・注記：1 住フク土 時代時期：弥生時代後期（十王台式） 器種：中・小型壺形土器 文様：付加条縄文 (R-S, L-Z)



第54図 岡田遺跡の調査地点

16 岡田遺跡

(1) 過去の調査

岡田遺跡においては、これまで24次に及ぶ調査が実施され、38基に及ぶ住居跡が検出されている。その住居跡数を時期別にみると、弥生時代後期（十王台式期）8基、古墳時代前期1基・後期6基、奈良・平安時代10基、時期不明13基となり、弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代の集落が認められる。これまでの住居跡の検出状況からみると、弥生・古墳時代の集落は遺跡全体に展開するようであるが、奈良・平安時代の集落は岡田遺跡の北部を中心とするようである。

(2) 第25次調査報告

調査経緯 三反田字岡田3488-1に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は岡田遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は7月24日～28日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺か

ら240mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は5か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2～0.5mを測る。調査の結果、住居跡1基（古墳時代後期）、ピット1基（時期不明）が確認された。住居跡は、土師器片の出土や竈をもつことからみて、古墳時代後期の住居跡であろう。なお住居跡覆土からは土師器片のほか弥生土器片も出土している。

(3) 第26次調査報告

調査経緯 三反田字岡田3488-3に所在する土地について、埋蔵文化財の所在

の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は岡田遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は10月1日～6日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から230mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は3か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.2～0.3mを測る。調査の結果、住居跡は5基が確認された。出土土器からみて、2号住居跡は弥生時代後期、3号住居跡は平安時代、4号住居跡は古墳時代の住居跡であろう。1号・5号住居跡は土器が少なく時期は不明である。ただし1号住居跡は竈を持つことから古墳時代後期以後になるだろう。5号住居跡は4号住居跡より古いため、古墳時代以前の住居跡と思われる。なおピット1の上層から須恵器盤底部が出土している。

遺物は、弥生土器（後期）、土師器、須恵器、陶器が出土した。

遺物説明

第55図

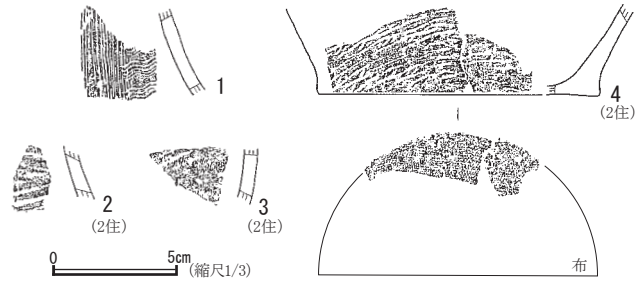
第11表 岡田遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	主な遺構	文献
1	1982	勝田市教委	試掘	なし	1
2	1983	勝田市教委	本調査	住居跡3(十王台1, 古墳後期2)	2
3	1985	勝田市教委	試掘	住居跡2(古墳後期1, 不明1)	3
4	1990	勝田市教委	本調査	住居跡3(8世紀1, 9世紀1, 不明1), 竪穴遺構1	4
5	1991	勝田市教委	試掘	なし	なし
6	1997	市教委	本調査	住居跡5(十王台1, 古墳後期1, 8世紀2, 9世紀1)	5
7	2003	市教委	試掘	なし	6
8	2005	市教委	試掘	なし	7
9	2006	市教委	試掘	なし	なし
10	2006	市教委	試掘	住居跡2(時期不明)	8
11	2006	市教委	試掘	なし	8
12	2006	市教委	本調査	住居跡1(十王台)	8
13	2006	市教委	試掘	なし	8
14	2006	市教委	試掘	住居跡(時期不明)	なし
15	2007	市教委	試掘	住居跡1(時期不明)	9
16	2007	市教委	本調査	住居跡1(古墳後期), 溝1	9
17	2007	市教委	試掘	住居跡1(時期不明)	9
18	2010	公社	試掘	住居跡2(十王台1, 時期不明1)	10
19	2011	公社	試掘	住居跡6(十王台4, 古墳前期1, 時期不明1)	11
20	2012	公社	試掘	住居跡1(時期不明)	12
21	2012	公社	試掘	住居跡2(古墳後期1, 時期不明1), 溝1	12
22	2012	公社	試掘	土坑2, ピット9	12
23	2012	公社	試掘	住居跡6(奈良・平安4, 時期不明2), 土坑2, ピット4	12
24	2013	公社	試掘	住居跡1(奈良・平安)	13

文献

- 1 昭和57年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和58年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和60年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成元年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 岡田遺跡発掘調査報告書
- 6 平成15年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成17年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成18年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 9 平成19年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 10 平成21年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 11 平成23年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 12 平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 13 平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

- 1 出土位置・注記:1住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:
中・小型壺形土器 文様:櫛描文(櫛歯5本)
- 2 出土位置・注記:2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:
中・小型壺形土器 文様:付加条縄文(L-Z, R-S) 備考:器外面に炭化



第55図 岡田遺跡第26次調査区出土遺物(1)



第56図 岡田遺跡第26次調査区出土遺物(2)

物付着

- 3 出土位置・注記:2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:中・小型壺形土器 文様:付加条縄文(R-S) 備考:器外面に炭化物付着
- 4 出土位置・注記:2住 時代時期:弥生時代後期(十王台式) 器種:大型壺形土器 法量:底径112mm(残存率32%) 文様:付加条縄文(L+R), 底面布目痕 備考:軸縄とは絡条の角度が異なるが, 付加条第1種の原体である。

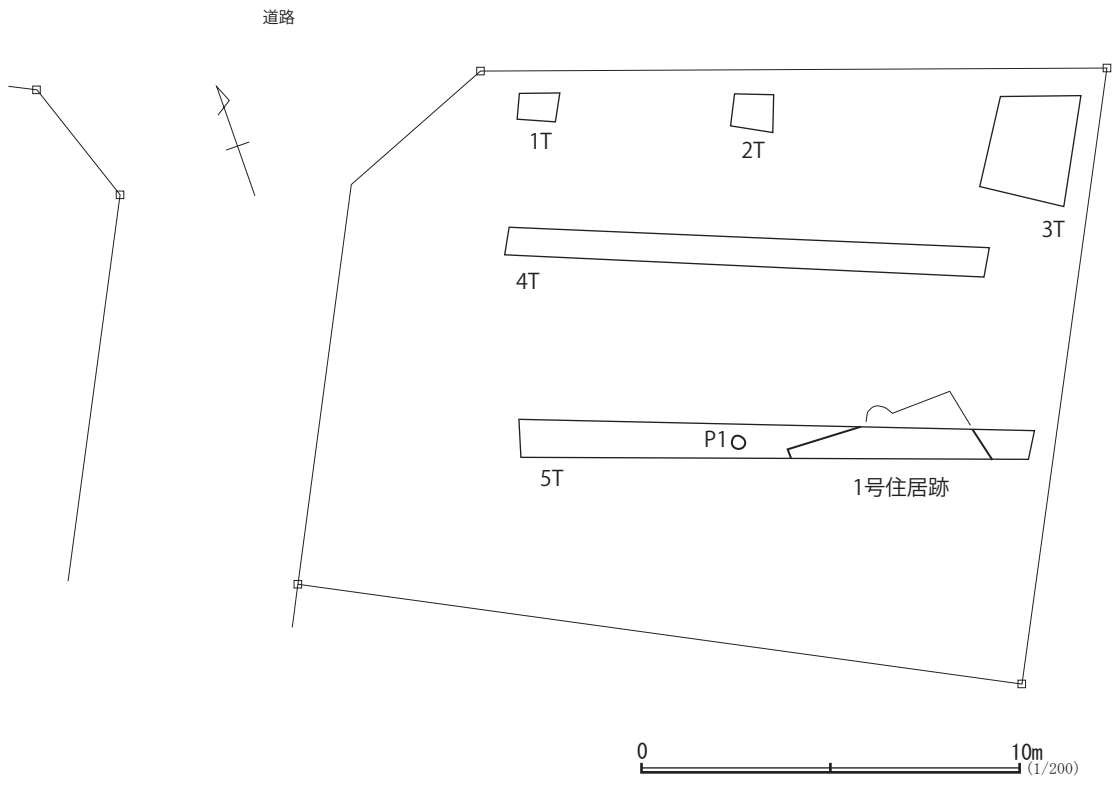
第56図

- 1 出土位置:ピット1 材質:須恵器 器種:有台盤か 残存:底部外周30%(高台部15%) 法量:高台径(13.4) 色調:灰色 胎土:礫(白, 白透少, 灰少), 骨針微量 技法等:底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。備考:木葉下窯産か。

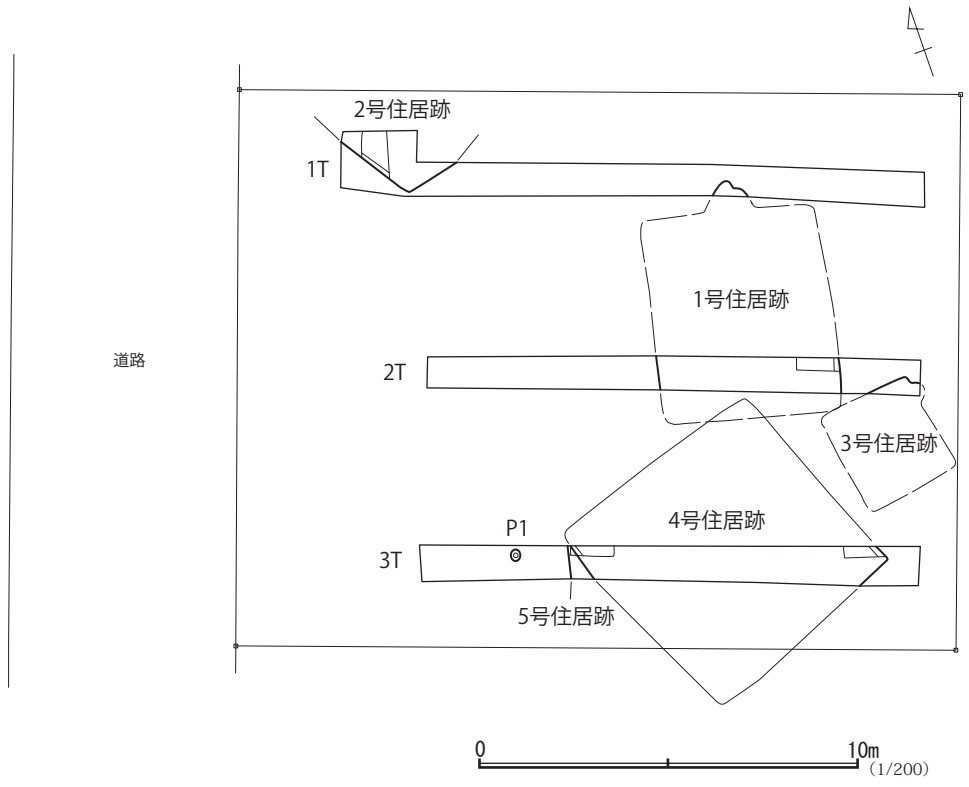
(4) 第27次調査報告

調査経緯 三反田字岡田3488-5に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は岡田遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は12月10日～22日にかけて行われた。

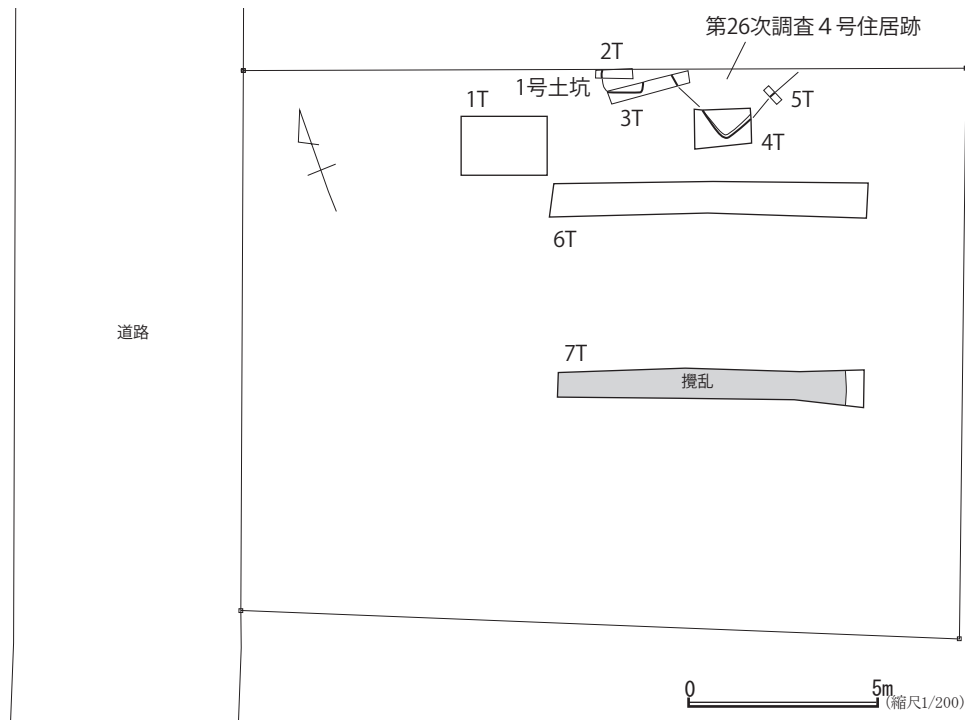
調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から220mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は7か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深



第 57 図 岡田遺跡第 25 次調査区



第 58 図 岡田遺跡第 26 次調査区



第 59 図 岡田遺跡第 27 次調査区

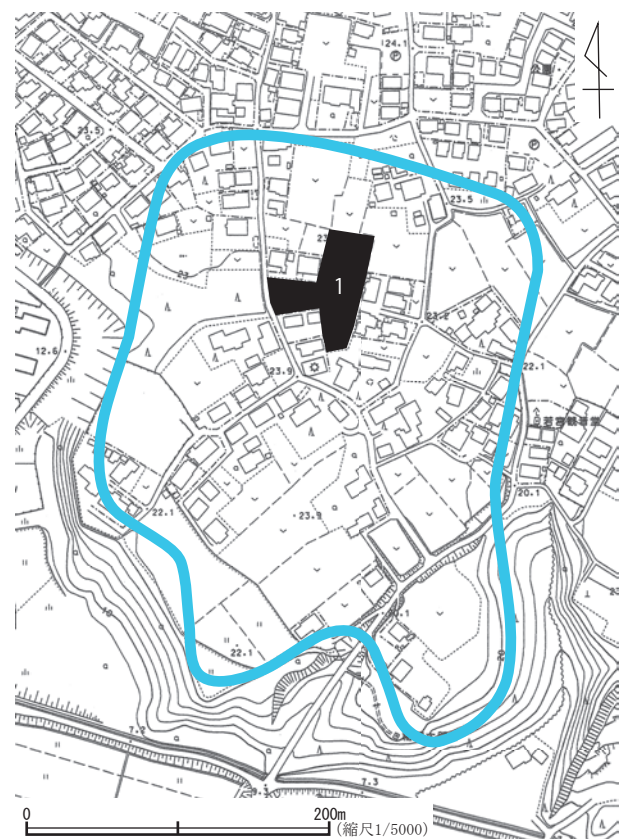
さは 0.2 ～ 0.3 m を測る。調査の結果、住居跡 1 基と土坑 1 基が確認された。検出位置からみて 1 号住居跡は第 26 次調査 4 号住居跡の一部であろう。1 号土坑の時期は不明である。なお調査区から遺物は出土せず、また調査区南部には大きく攪乱が入っていた。

17 地蔵根遺跡

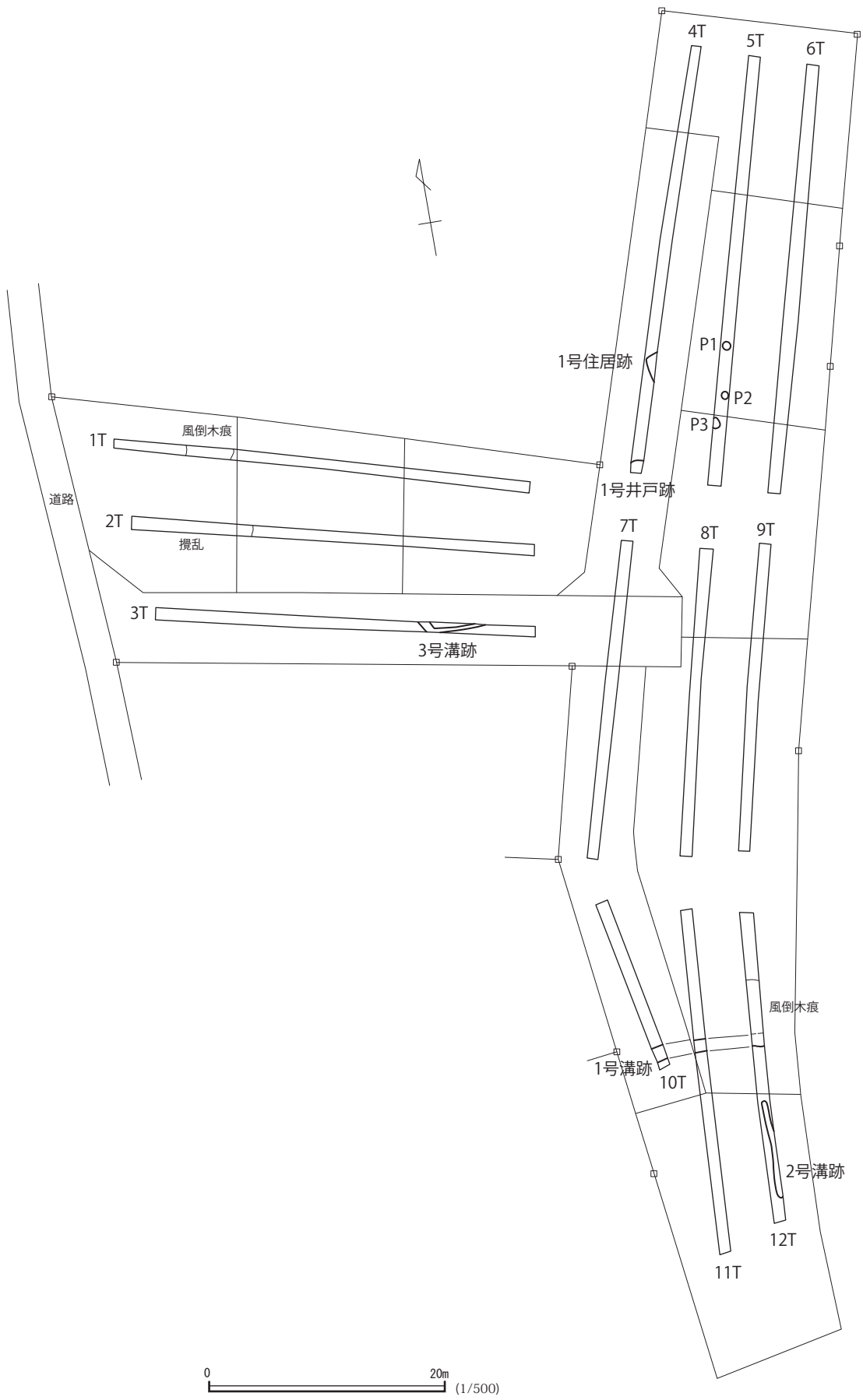
(1) 第 1 次調査報告

調査経緯 大字勝倉字地蔵根 2830 番 1 外 5 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は地蔵根遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 9 月 2 日～ 18 日にかけて行われた。

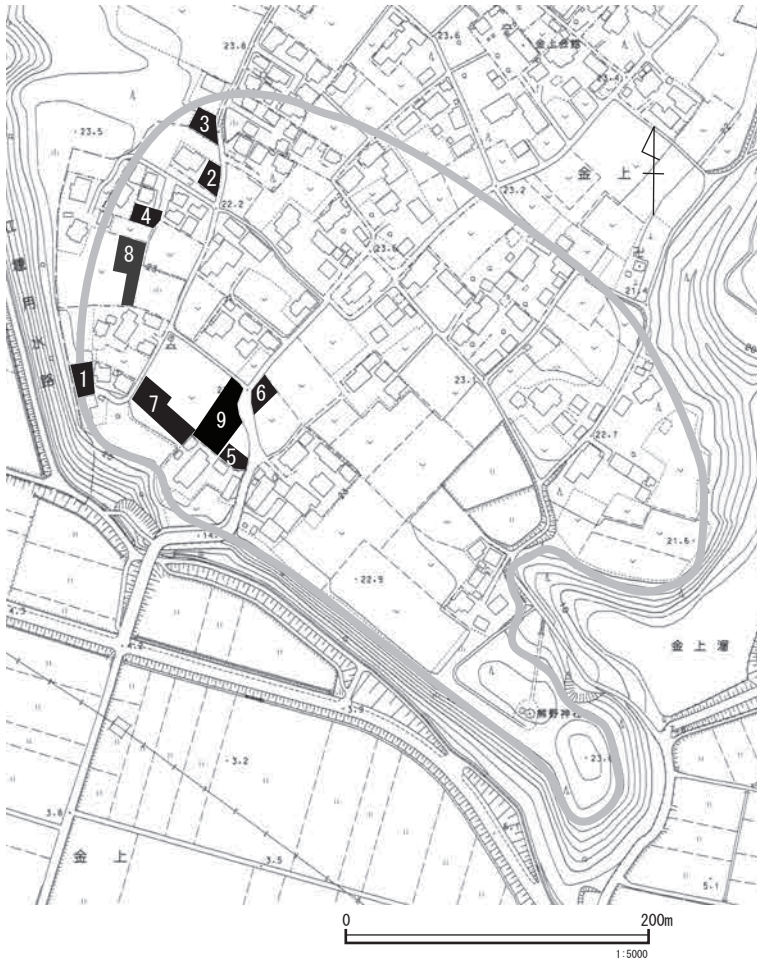
調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から 100 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。



第 60 図 地蔵根遺跡の調査地点



第 61 図 地藏根遺跡第 1 次調査区



第 62 図 金上埜遺跡の調査地点

第 12 表 金上埜遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	1984	勝田市教委	試掘	住居跡 1 (奈良)	1
2	1985	勝田市教委	試掘	なし	2
3	1988	勝田市教委	試掘	なし	3
4	1999	市教委	試掘	土坑 2	4
5	2003	市教委	試掘	住居跡 2 (奈良), 溝 1 (中世)	5
6	2007	市教委	試掘	住居跡 1 (平安), 井戸 (7c 末)	6
7	2012	公社	試掘	住居跡 4 (平安 2, 時期不明 2), 溝跡 4 (時期不明)	7
8	2015	公社	試掘	住居跡 2 (奈良・平安 1, 時期不明 1)	8

文献

- 1 昭和 59 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 2 昭和 60 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 3 昭和 63 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 4 平成 11 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 5 平成 15 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 6 平成 18 年度市内遺跡発掘調査報告書
- 7 平成 23 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
- 8 平成 26 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

調査時は荒地であった。調査は 12 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.3 ~ 1.2 m を測る。調査の結果、住居跡 1 基 (時期不明), 井戸跡 1 基 (近世以後), 溝跡 3 条 (時期不明) が確認された。遺物は、表土から土師器・須恵器の小片が少量出土したのみである。

18 金上埜遺跡

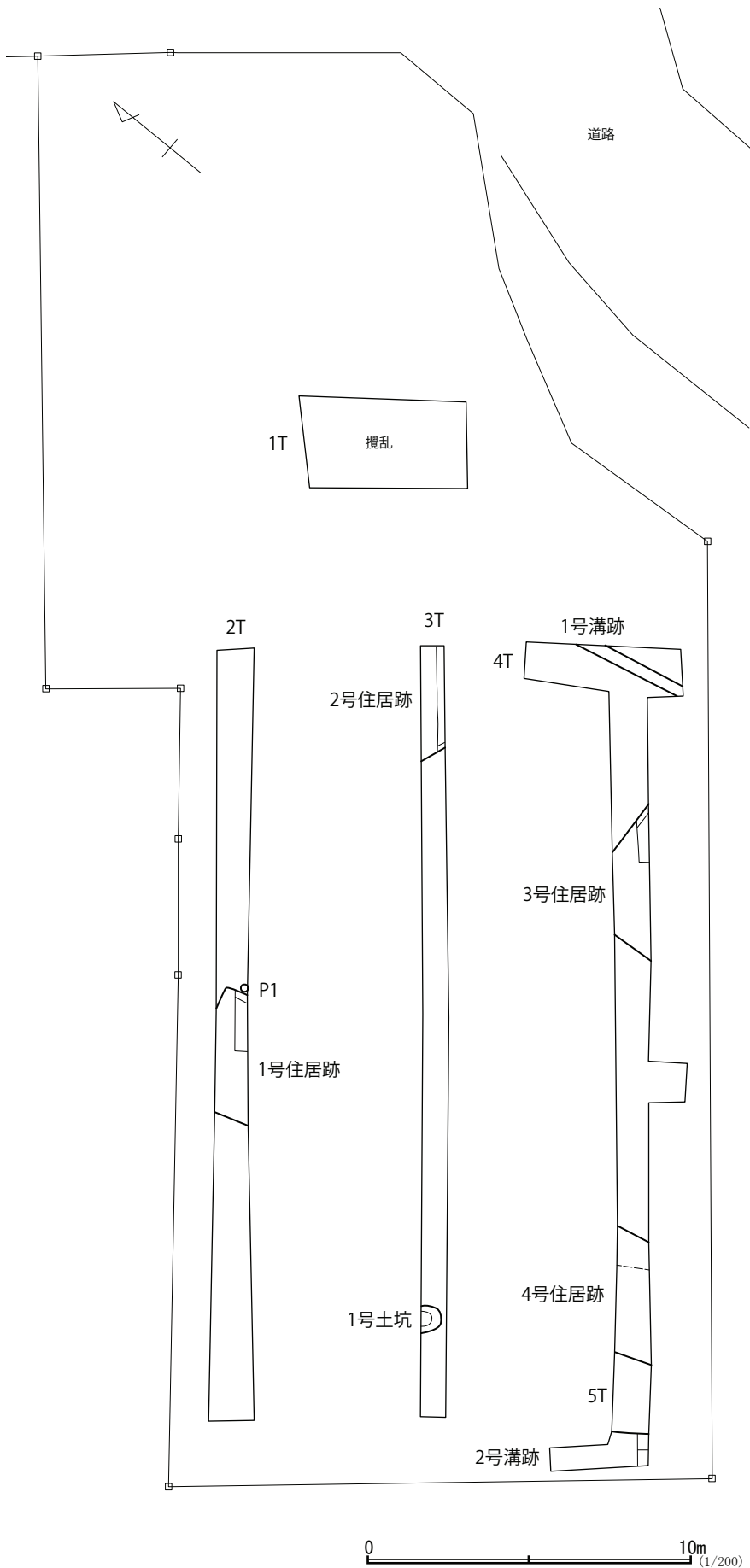
(1) 過去の調査

金上埜遺跡は、過去に 8 回の調査が実施され、奈良・平安時代の住居跡が 7 基検出されている。住居跡は第 1・5・6・7・8 次調査区で検出されていることから、那珂川を臨む台地縁辺部に集落域が広がるようである。今回の調査区もそうした集落域であり、試掘の結果、奈良・平安時代の住居跡のほか古墳時代の住居跡も確認されている。なお今回の試掘調査区に隣接する第 6 次調査区では、7 世紀末の大型井戸と推定される遺構が確認されていることから、この付近に当該期の有力者の居宅が存在する可能性は高いと思われる。

(2) 第 9 次調査報告

調査経緯 金上字埜 802 番 1 外 3 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は金上埜遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 9 月 29 日 ~ 10 月 6 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、那珂川低地を望む台地縁辺から 30 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 5 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ~ 0.8 m を測る。調査の結果、住居跡は 4



第 63 図 金上埜遺跡第 9 次調査区

基が確認された。出土土器からみて、1号住居跡は平安時代（10世紀以後か？）、2号住居跡は古墳時代中期、3号住居跡は古墳時代、4号住居跡は平安時代（9世紀）の住居跡であろう。時期不明の2号溝跡は、確認面からの深さが40cmを測り、幅が不明であるが、やや規模の大きな溝になりそうである。おそらく第5次調査区で検出された金上埜に関わる可能性のある、室町時代の溝の延長部分になるであろう。なお1トレンチは全体的に攪乱されていた。

調査区からの遺物は、石斧（縄文時代早期）、弥生土器（中期）、土師器、須恵器、砥石等が出土した。

遺物説明

第 64 図

1 出土位置・注記：3トレ 時代時期：縄文時代早期（条痕文系）備考：胎土に繊維を少量含む、器内外面撫で調整

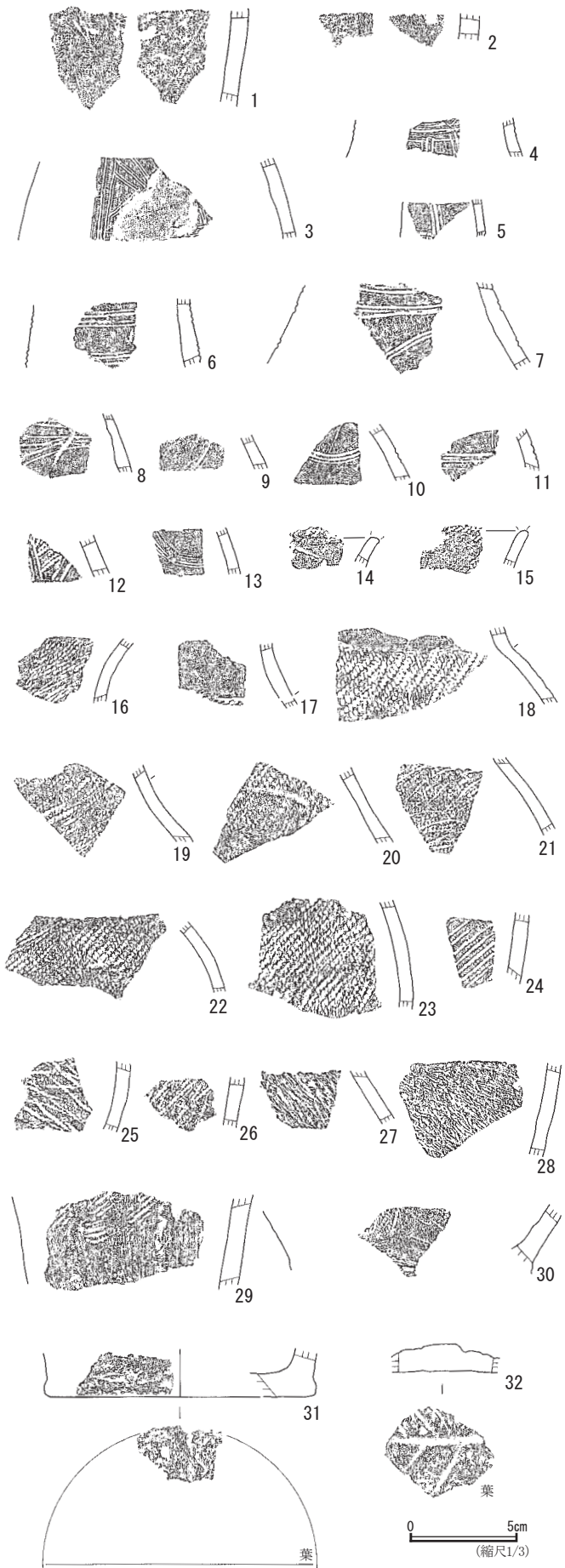
2 出土位置・注記：1住 時代時期：縄文時代早期（条痕文系）文様：撫で 備考：胎土に繊維を少量含む、器内外面撫で調整

3 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：広口壺形土器 法量：最大径126mm（残存率13%）文様：平行沈線文（半截竹管）備考：器内面磨き調整、器外面に炭化物付着、器外面の一部剥落

4 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：広口壺形土器 法量：最大径81mm（残存率10%）文様：平行沈線文（3本同時施文）備考：器内面磨き調整

5 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：小型壺形土器 法量：最大径39mm（残存率27%）文様：平行沈線文（3本同時施文）

6 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期（足洗式）器種：壺形土器 法量：最大径80mm（残存率12%）文様：平行沈線文（半截



竹管)

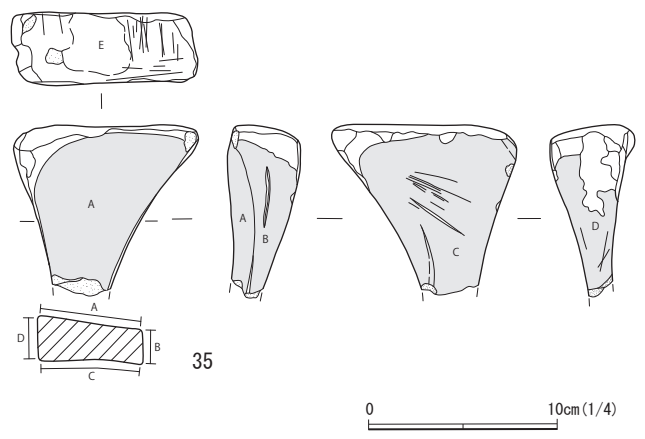
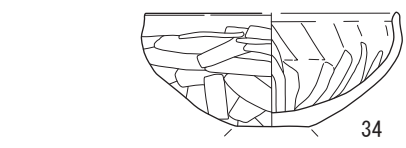
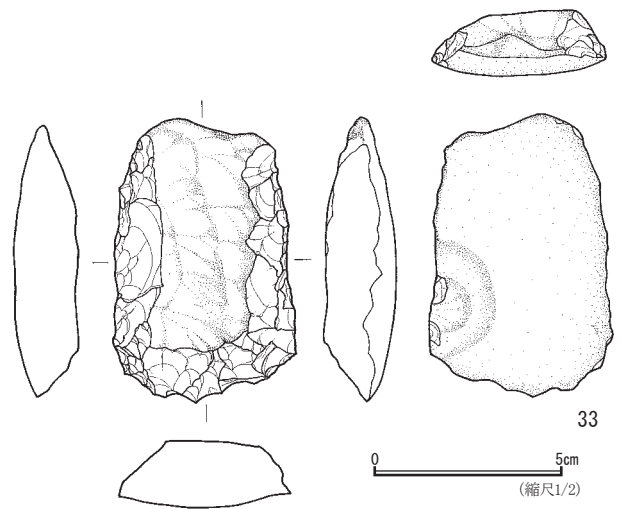
7 出土位置・注記：SK1 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 法量：最大径120mm(残存率13%) 文様：平行沈線文(半截竹管)

8 出土位置・注記：2溝 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(半截竹管) 備考：胎土に骨針を多量含む、器内面の大部分剥落

9 出土位置・注記：2溝 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(半截竹管) 備考：胎土に骨針を含む

10 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(3本同時施文) 備考：胎土に骨針を多量含む

11 出土位置・注記：1住 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：



第64図 金上埴遺跡第9次調査区出土遺物

壺形土器 文様：平行沈線文(3本同時施文)，付加条縄文(R-S)

12 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期(足洗式) 器種：壺形土器 文様：平行沈線文，付加条縄文(LR+R)

13 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：壺形土器 文様：平行沈線文(櫛歯状工具)

14 出土位置・注記：2溝 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：口唇部付加条縄文(LR+2R)

15 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：口唇部付加条縄文(LR+Rか)

16 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：付加条縄文(LR+R)

17 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：縄文 備考：器外面に炭化物付着

18 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：単節斜縄文(LR) 備考：器内面磨き調整，器外面に炭化物付着

19 出土位置・注記：1トレ 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：付加条縄文(LR+2R)

20 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：単節斜縄文(LR)

21 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：付加条縄文(LR+R)

22 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：単節斜縄文(LR)

23 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 器種：甕形土器 文様：単節斜縄文(LR) 備考：器内面磨き調整

24 出土位置・注記：3住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文(LR+2R)

25 出土位置・注記：3トレ 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文(L-Z)

26 出土位置・注記：3住 時代時期：弥生時代中期 文様：付加条縄文(LR+R)

27 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 文様：反撚り縄文(RR)

28 出土位置・注記：2トレ 時代時期：弥生時代中期 文様：反撚り縄文(RR)

29 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 法量：最大径110mm(残存率22%) 文様：無節斜縄文(R) 備考：器内外面に炭化物付着

30 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 法量：最大径135mm(残存率7%) 文様：付加条縄文(LR+R)，結節文 備考：底部付

近

31 出土位置・注記：3トレ 時代時期：弥生時代中期 法量：底径124mm(残存率11%) 文様：縄文 備考：底面木葉痕

32 出土位置・注記：2住 時代時期：弥生時代中期 備考：底面木葉痕

33 出土位置・注記：2住 器種：打製石斧 石材：砂岩 法量：長さ71mm，幅49mm，厚さ13mm 重量：91.5g 備考：円礫の破片を素材としており，礫片としての破断面にも水摩が見られる。類例は，武田西埴遺跡(鈴木素行他 2001『武田西埴遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』公社文化財調査報告第21集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社)等にあり，第64図1・2の縄文時代早期条痕文系土器群に伴う石器と考えられる。

34 台帳：2住 材質：土師器 器種：杯 残存：40% 法量：口径(13.4)，器高6.0，底径4.0 色調：外面にぶい黄橙～黒褐色，内面橙～黒褐色 胎土：礫(白微)，砂(白多，透多，灰少) 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ，体～底部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：— 備考：—

35 出土位置：4住 材質：砥石 器種：砥石 残存：50%か 法量：長9.0，幅9.8，厚3.9，重量300.3g 色調：白褐色 技法等：4面使用。B～E面に刻線がみられるので最終使用面はA面であろう。中央部が薄くなり折れたものと考えられる。 備考：流紋岩製か

19 雷遺跡

(1) 過去の調査

雷遺跡においては，これまで3次に及ぶ調査が実施され，4基の住居跡が確認されている。すべて古墳時代の住居跡であることから，雷遺跡の集落は古墳時代を主とするようである。

(2) 第4次調査報告

調査経緯 田彦字雷土1491-7に所在する土地について，埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は雷遺跡の範囲内に当たっており，現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため，教育委員会は建築・土木工事を行なう際は，事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い個人住宅の建築に伴う文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため，試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査

第 13 表 雷遺跡調査一覧

次	調査年度	調査主体	調査種別	遺構	文献
1	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳), 溝 2 (時期不明)	1
2	2013	公社	試掘	溝 1 (時期不明)	1
3	2013	公社	試掘	住居跡 2 (古墳中期 1, 古墳 1)	1

文献

1 平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

は 9 月 30 日～ 10 月 6 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺から 100 m ほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は 3 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.4 ～ 0.5 m を測る。調査の結果、溝跡 1 条が確認された。時期は不明である。遺物は出土していない。



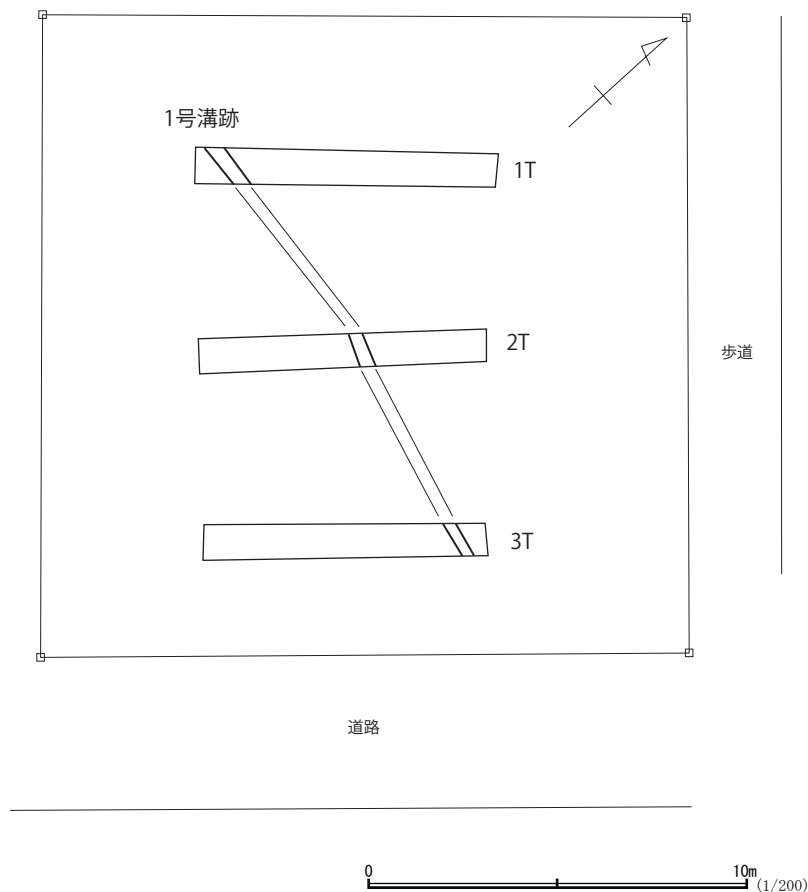
第 65 図 雷遺跡の調査地点

20 堂端遺跡

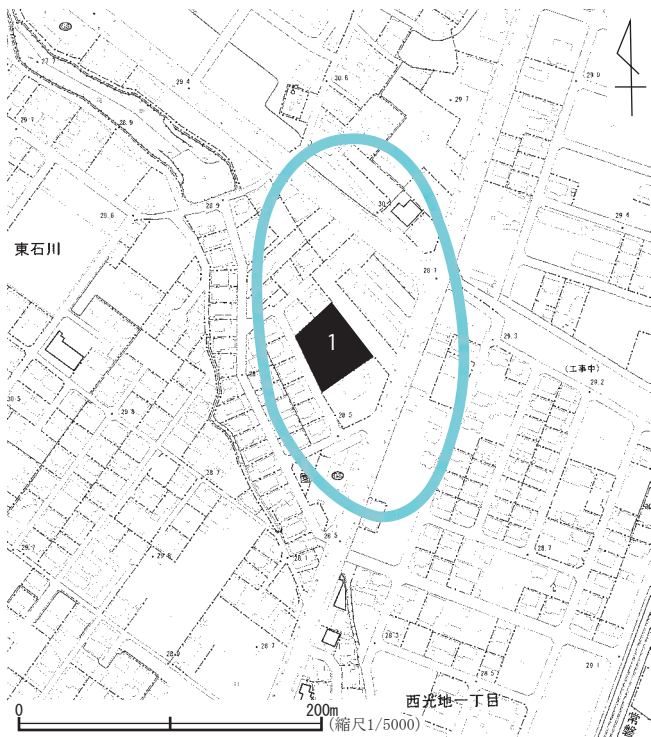
(1) 第 1 次調査報告

調査経緯 東石川字トウハタ 2433-102, 103 に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は堂端遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 11 月 11 日～ 13 日にかけて行われた。

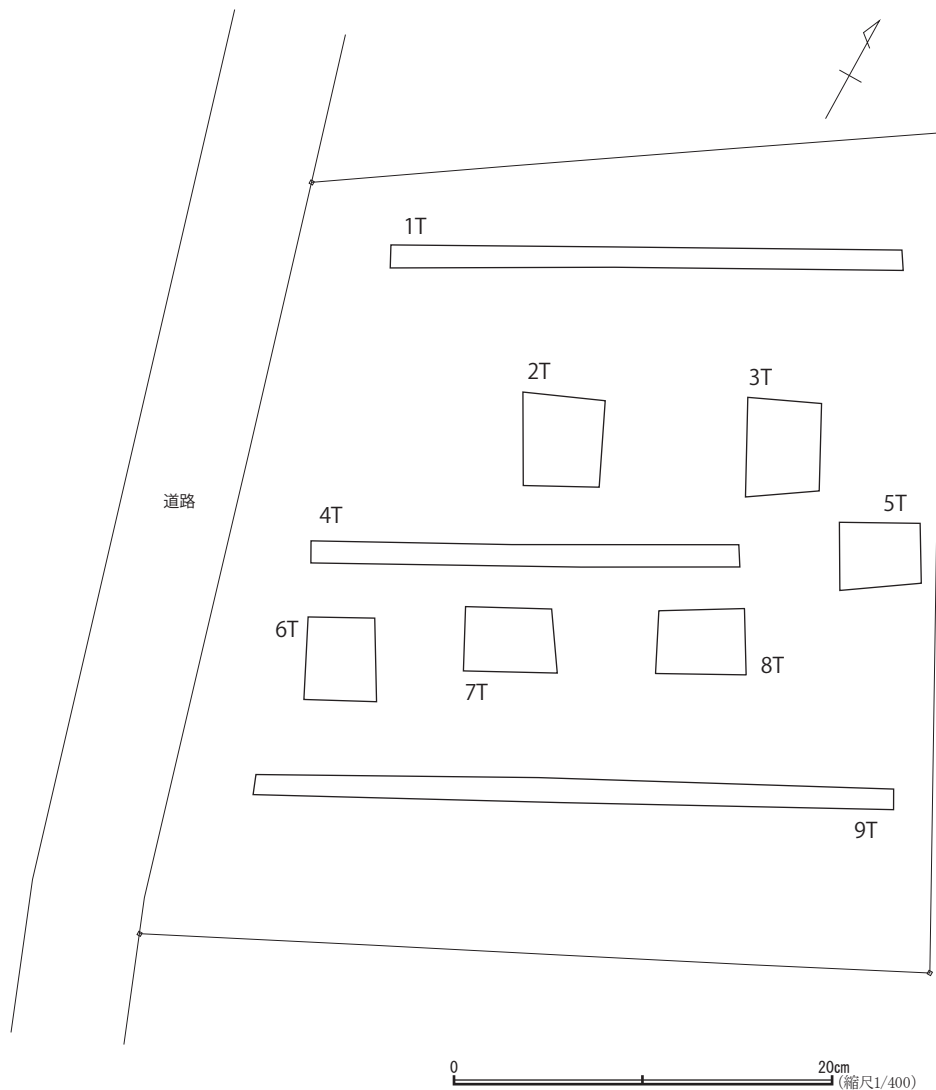
調査結果 調査地は、現在は平坦な住宅地の一角となっているが、地図を見ると、かつては中丸川の谷から伸びてくる浅い小支谷が西側にあり、その縁辺に位置していることがわかる。現状はかつて存在していた小支谷にむかって南西に緩く傾斜する地形を呈する。調査時は畑地であった。調査



第 66 図 雷遺跡第 4 次調査区



第 67 図 堂端遺跡の調査地点



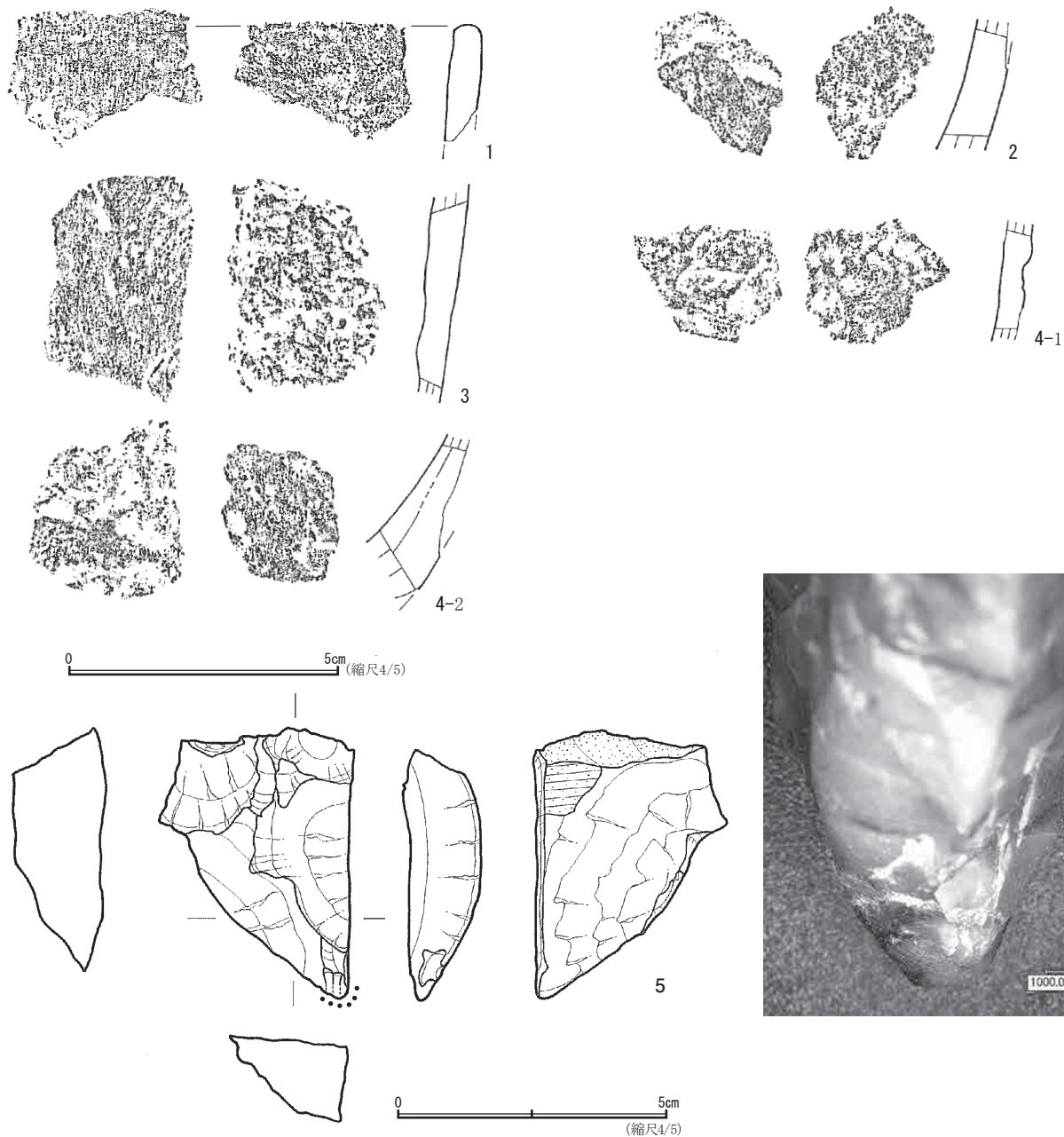
第 68 図 堂端遺跡第 1 次調査区

は 9 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2 ～ 0.3 m を測る。調査の結果、遺構は確認されなかった。遺物は調査区南東寄りのトレンチ表土から、縄文土器と石器が少量出土している。

遺物説明

第 69 図

- 1 出土位置・注記：9 トレ 時代時期：縄文時代草創期 文様：なし
備考：器内面凹凸。所謂「薄手無文土器」であり、向野 A 遺跡（色川順子他 2007 『向野遺跡群』公社文化財調査報告第 36 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社）の土器群に類似する。以下 4 まで同じ。
- 2 出土位置・注記：7 トレ 時代時期：縄文時代草創期 文様：極細い沈線による格子状の施文あり
- 3 出土位置・注記：6 トレ 時代時期：縄文時代草創期 文様：なし
備考：胎土に骨針と微量の繊維を含む。器内面ほぼ剥落。
- 4 出土位置・注記：8 トレ 時代時期：縄文時代草創期 文様：なし（但し、4-1 に刺突状の窪みあり）備考：胎土に骨針と微量の繊維を含む。
- 5 出土位置・注記：6 トレ 器種：石錐 石材：チャート 法量：長さ 50 mm、幅 36 mm、厚さ 17 mm 重量：30.6 g
備考：剥片破片の端部に微細な調整を加えて石錐として使用している。顕微鏡観察により、主軸に直交する方向の擦痕と、摩滅が観察された（第 69 図写真参照）。



第 69 図 堂端遺跡第 1 次調査区出土遺物

21 平井遺跡

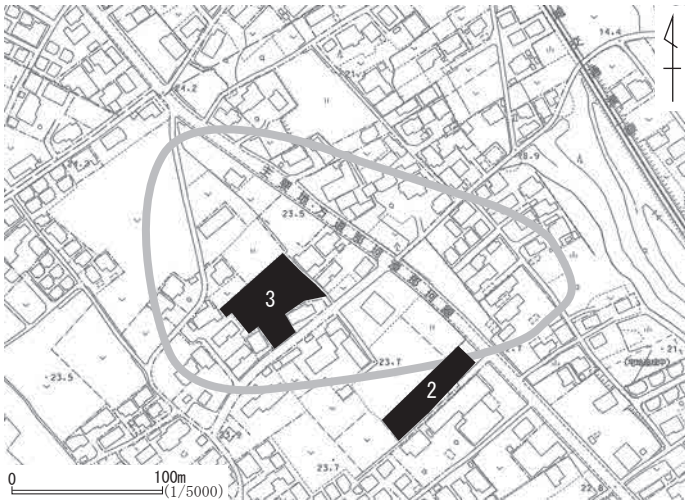
(1) 過去の調査

平井遺跡は、昭和 49 年ごろ、ゴボウ耕作の際に 7～8 m 離れて 2 個の蔵骨器が出土し、土器内には小児骨と思われる火葬骨が入っていたという（『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和 56 年度版』）。その場所は明確ではないが、第 3 次調査区の南西方向隣接地あたりのようである（市教育委員会住谷氏からご教示）。その後、第 1 次調査が平成 14 年に市教育委員会により実施され

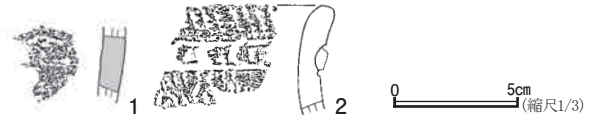
て須恵器・土師器が出土しているが未報告である。第 2 次調査は平成 26 年に実施され、縄文時代の住居跡 1 基と時期不明の溝跡が検出され、住居跡からは縄文時代前期の土器片が出土している。

(2) 第 3 次調査報告

調査経緯 金上字遠原 1017-1 外 4 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は平井遺跡の範囲内に当たっており、現地踏査したところ確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なっ



第70図 平井遺跡の調査地点



第72図 平井遺跡第3次調査区出土遺物

調査結果 調査地は、中丸川低地を望む台地縁辺から170 mほど離れた地点に位置し、平坦な地形を呈する。調査時は畑地であった。調査は9か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは0.5～0.8 mを測る。調査の結果、遺構は溝跡が2条、ピット1基、土坑1基が確認された。いずれも出土

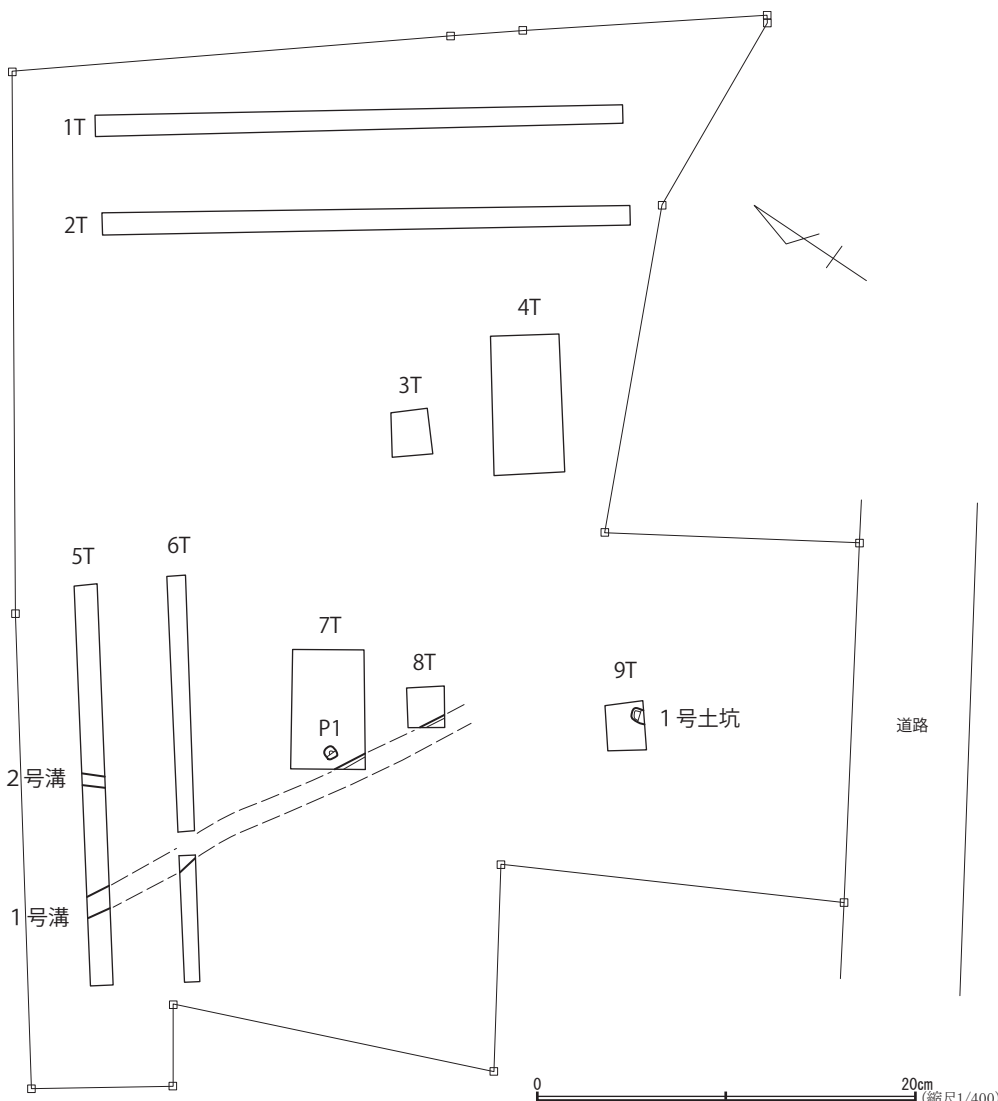
遺物はなく時期不明である。遺物は、縄文土器(前期)、須恵器、石器(剥片)がトレンチ表土から出土している。

遺物説明

第72図

1 出土位置・注記：4トレ
時代時期：縄文時代前期前半
文様：不明 備考：胎土に繊維を含む、器表面に繊維の脱落痕あり

2 出土位置・注記：1トレ
時代時期：縄文時代前期(興津Ⅱ式) 文様：放射肋を有する貝殻の腹縁文、半截竹管による平行沈線・刺突文



第71図 平井遺跡第3次調査区

た。これに従い文化財保護法93条1項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は12月1日～9日にかけて行われた。

り(『勝田市史考古資料編』P58)、その後、第1次調査が昭和56年に勝田市教育委員会により実施され石器が1点出土している(『市内遺跡発掘調査報告書』1981)。第2次調査は昭和58年に実施されたが遺物は出土して

22 足崎西原遺跡

(1) 過去の調査

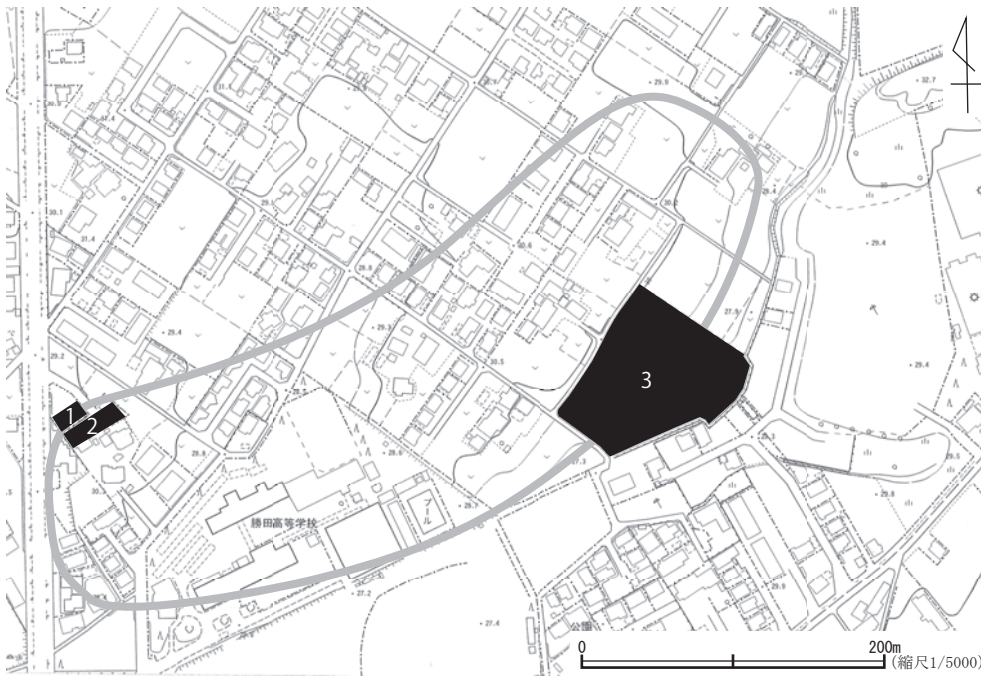
足崎西原遺跡は、昭和49年頃に発見された旧石器時代の遺跡であ

いない（『昭和 58 年度市内遺跡発掘調査報告書』）。

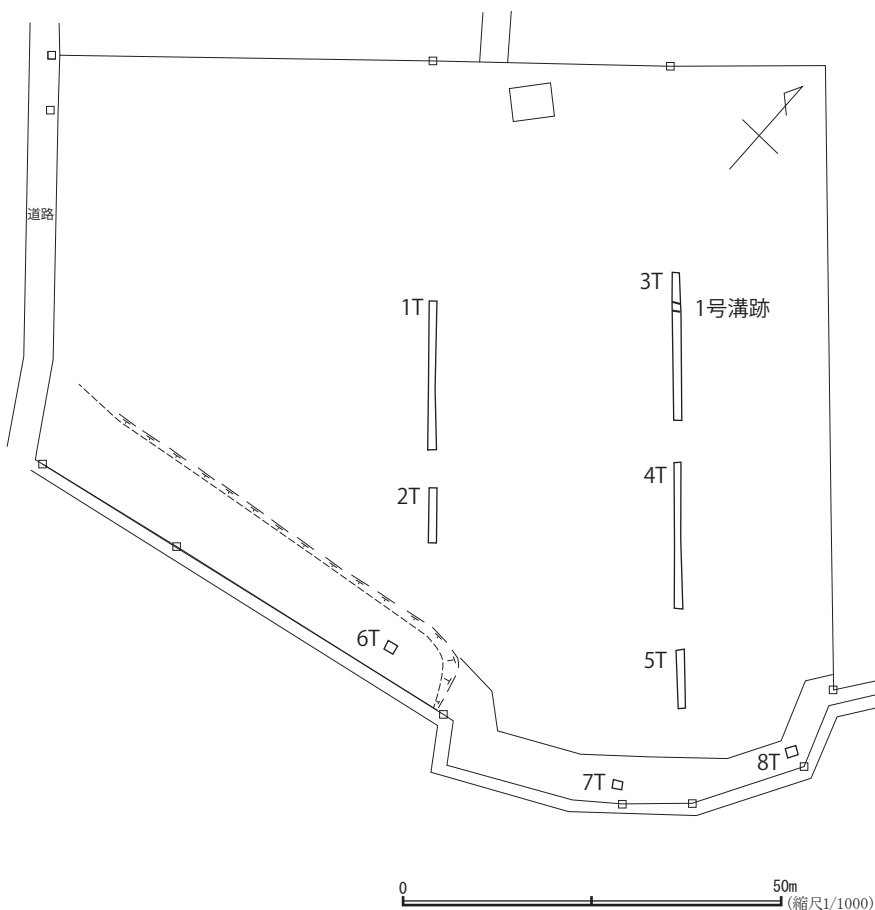
(2) 第 3 次調査報告

調査経緯 足崎字西原 1458-26 外 6 筆に所在する土地について、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会文書が提出された。現地は足崎西原遺跡の範囲内に当たっており、確認調査の必要な土地であったため、教育委員会は建築・土木工事を行なう際は、事前に試掘調査を必要とする旨の回答を行なった。これに従い宅地造成に伴う文化財保護法 93 条 1 項に基づく届出が提出されたため、試掘調査についてひたちなか市生活・文化・スポーツ公社に依頼した。試掘調査は 12 月 17 日～18 日にかけて行われた。

調査結果 調査地は、大川の谷から分かれて東方に伸びてくる小支谷を南側にもつ緩く南に傾斜している土地であり、調査時は畑地であった。調査は 8 か所のトレンチを設定し、重機による表土除去を実施した。確認面までの深さは 0.2～1.0 m を測る。調査の結果、遺構は溝跡 1 条が確認された。出土遺物はなく時期不明である。調査区から遺物は出土しなかった。



第 73 図 足崎西原遺跡の調査地点



第 74 図 足崎西原遺跡第 3 次調査区

III 堀口遺跡における 弥生時代後期「十王台式」 の集落跡について

1. はじめに

ひたちなか市域における弥生時代後期「十王台式」の集落跡について、部分的な発掘調査を繰り返すことで情報が徐々に蓄積されてきた遺跡には、岡田遺跡[鈴木2013]の他に、堀口遺跡がある。堀口遺跡については、武田遺跡群の一部として、1997年度の第8次までの成果を検討[鈴木2001]してあるが、2015年度には調査も第20次を数えたことから、新たな知見を加えて、これを改訂しておきたい。

2. 集落跡としての堀口遺跡

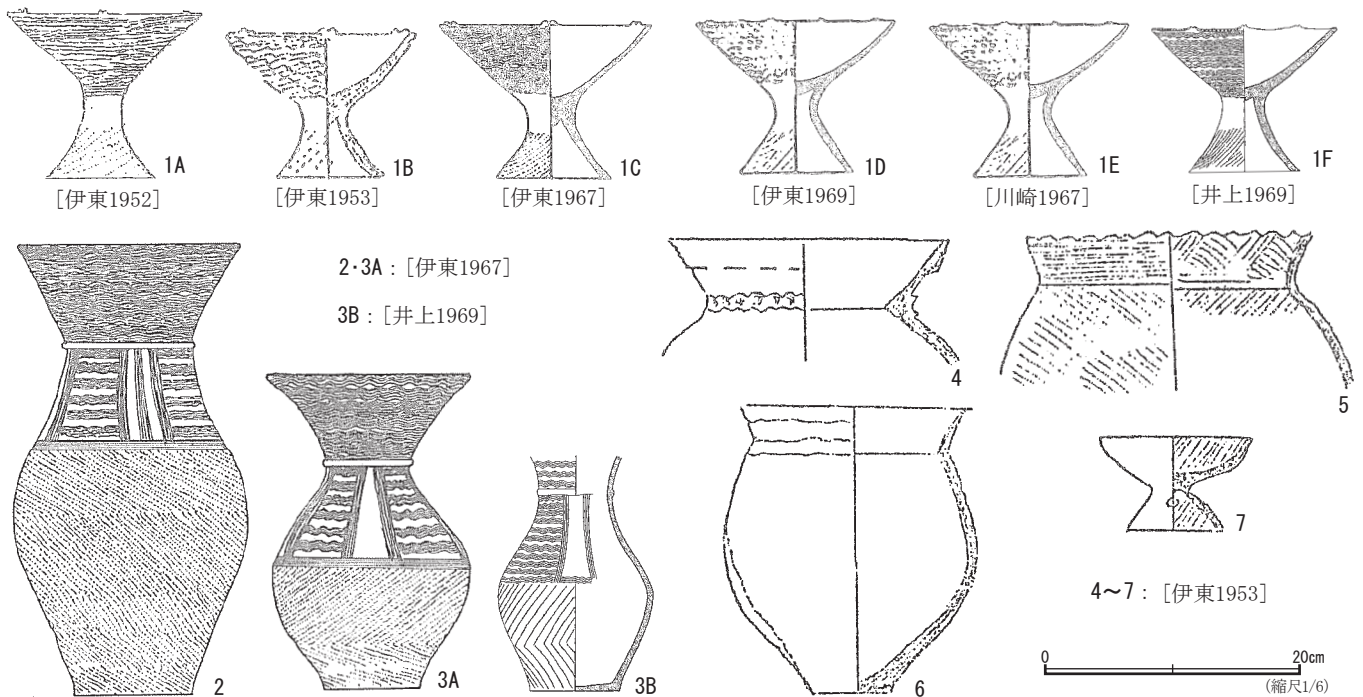
「堀口遺跡は戦後まもなくの考古学ブームの中で発見されたものと思われ、茨城県内の研究者の間ではかなり著名な遺跡の1つ」[川崎1979]と伝えられ、堀口遺跡から出土した十王台式土器には、高环形土器と、いくつかの壺形土器が報告されていた。特に高环形土器は、こ

の器種の報告がほとんどなかった頃に、繰り返し図化されている(第76図1A~F)。^{註1}

井上義安は、高环形土器(第76図1F)とともに小型細頸形の壺形土器(第76図3B)を報告し、その出土位置を「勝田市堀口金砂神社付近」[井上1969]と記述している。これとは別の壺形土器の破片が『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』から『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』へと掲載されており、川崎純徳は、「昭和27年ごろ、高环形土器、壺形土器が出土」[川崎他1975]と記述している。これらの土器の詳細な出土位置と状況については、記録が残されていない。ただ、高环形土器が初めて報告された文献の中に、伊東重敏による次のような記述を見出した。「11月10日、堀口遺跡が工事の為、トレンチを入れたように切れ、10以上の住居跡が露出した。ここは国分式・和泉式の土師と須恵式土器が主となっていたが、それに混じって、十王台式の破片も若干認められた。…(中略)…その破片の中に、5個の壺形(内1個はB形)片にまじって、上に示す高环形の土器があった」[伊東1952]。土器が出土した時期は、川崎の記述と一致する。さらに、堀口地区において、「トレンチを入れたよう」な状況の「道路工事」[伊東1952]の地点を求めるならば、低地へと続く坂道の切通し(第75図網部分)のみが該当し、ここは金砂神社の付近にあることから、井上の記述とも一致する。伊東が



第75図 堀口遺跡における「十王台式」の住居跡の分布(黒丸が住居跡の位置)



第76図 堀口遺跡採集土器の報告

註3

報告 [伊東 1953] した古墳時代前期の土器群 (第76図4~7) も、おそらくは同所から採集されたものなのであろう。

この採集地点と推定される道路を境界に堀口遺跡を東西に分割してみると、19次の調査は、17箇所の調査地点が東部に集中し、2箇所 (第2・9次) の調査地点が西部に位置する。西部の調査地点が道路から離れていることもあって、「十王台式」が検出されたのは、東部の調査地点に限られている。東部では各調査区から十王台式土器の破片が出土しており、第1次 (1979年度)、第7次 (1993年度)、第17次 (2015年度)、第18次 (2015年度) の調査区からは、住居跡が検出された。

3. 各調査区の土器群

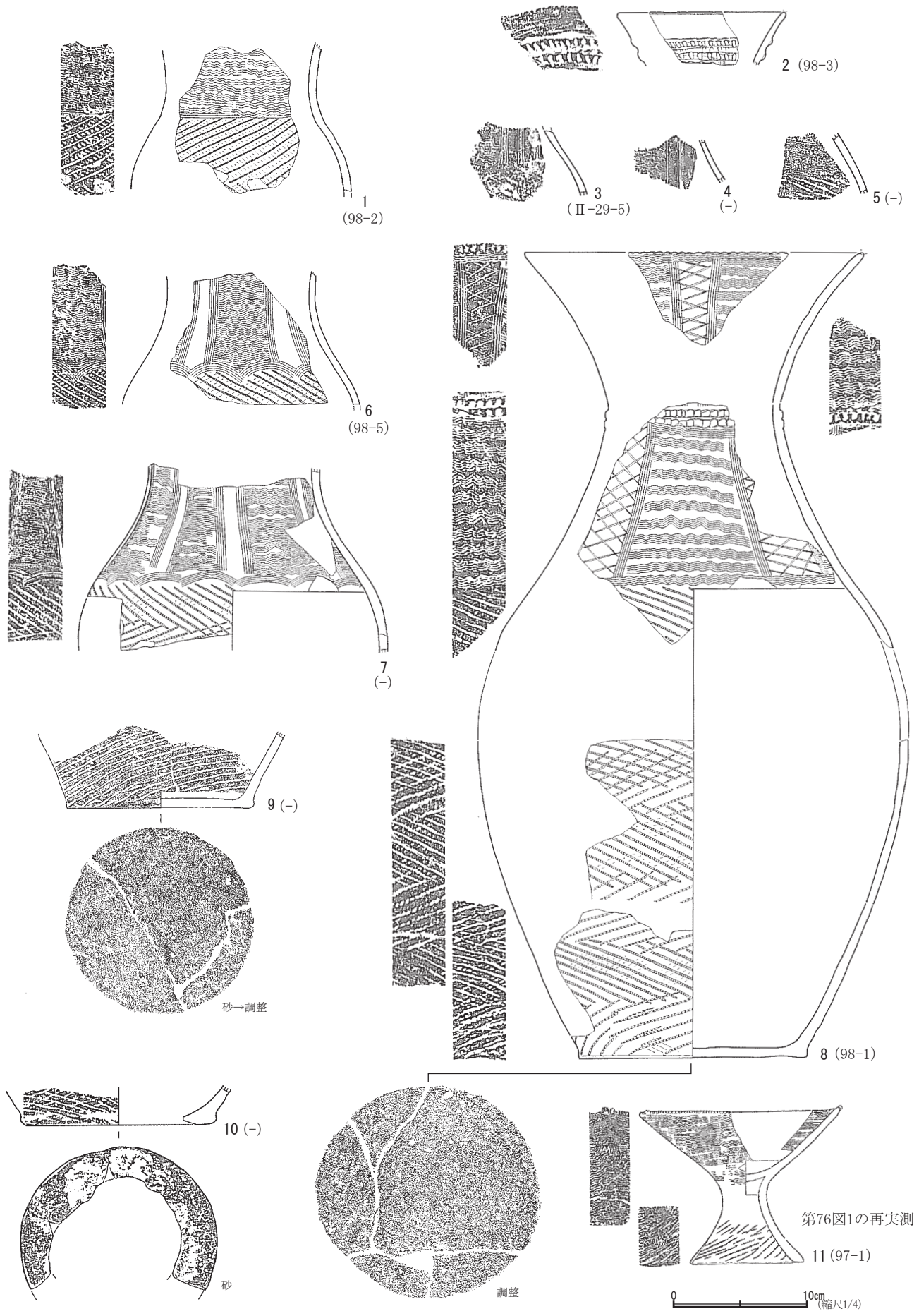
調査ごとに報告されていた遺物を観察し、一部を新たに実測して再報告する。「十王台式」については、武田・船窪遺跡群の分析を基礎とした細別と時期区分 [鈴木 2013, 21014] に拠りながら記述している。

「金砂神社付近」採集の土器群

台地から低地へと抜ける道路部分に、その採集地点を推定した土器群は、一部がひたちなか市埋蔵文化財調査センターに保管されている。高環形土器を観察すると、器高 117 mm、口径 149 mm であり、井上義安による実測図 (第76図 1F) が、施文の表現も含めて実物に最も近い。

但し、その井上も伊東重敏や川崎純徳と同じく、現状実測ではない。高環形土器の坏部は完存せず、したがって口唇部の突起は2個のみが残存するのである (第77図 11) が、坏部の突起や文様は、復元実測により作図されている。復元による実測図は、現物が残されていないと、土器の属性がどこまで確実であるのかを判断できない。井上が高環形土器とともに報告した壺形土器の実測図 (第76図 3B) は、胴上部の櫛描文の一部が空白のままであることから、残存率が低いと想像される。低い残存率から復元したために胴部直径が異なり、欠損している口縁部までを加筆したために、別個の土器のように見える伊東の実測図 (第76図 3A) も、同一の壺形土器なのかもしれない。井上が波状文に描いた胴部の横位区画文を、伊東は直状文に表現している。こうように比較してみると、伊東が報告したもう1つの壺形土器 (第76図 2) の実測図については、頸部の隆帯数、胴部の横位区画文、胴部の斜行縄文に疑問を持たざるを得ない。頸部から胴上部までが残存する部分的な破片から想像して作図されたようにも思えるのである。

新たに図化した10点の壺形土器 (第77図) について、計測と観察の概要を記述しておく。1は中・小型の壺形土器。胴径が165 mmほどに推定される。櫛描文が頸部に位置し、区画内には、歯数3本の櫛歯状工具による波状文のみが充填される。縦に区画されないことは、



第77図 堀口遺跡採集土器（「金砂神社付近」，括弧内は『勝田市史』の挿図番号）



第78図 参考資料

(北山ノ上遺跡, 原報告 [藤本 1983]41-7)

横位の波状文に継ぎ目があり、口縁部を全周させる波状文と同じ施文工程が窺えることから、確実に推定さ

れる。このような文様構成は、「十王台式」直前に成立し、「十王台式1期」に特徴的である。これは、「2期」にも継承されており、「3期」の北山ノ上遺跡 [藤本 1983] や武田西塙遺跡 [鈴木 2001] にも残存する (第78図)。櫛描文の施文具と施文位置、胴部が付加条第2種の羽状縄文であることから、「十王台式古期 (1・2期)」と位置付けておきたい。2は小型の壺形土器。口径が126mm (残存率15%) と推定される。口縁部は無文。隆帯は2条で、縄文原体による刻みが施されている。頸部の櫛描文の一部が残る。胎土には金雲母を多量に含み、「十王台式2期」の「富士山式」と捉えられる。3～5は中・小型の壺形土器の破片であり、それぞれ別個体。「西塙類型」の典型である波状文の横区画と3条の縦区画が施文されている。「十王台式3・4期」の「武田式西塙段階」に位置付けられる。6は中型の壺形土器。頸径が110mmほど、胴径が180mmほどと推定される。「梶巾類型」の典型である連弧文の横区画と2条の縦区画が施文されている。胎土に金雲母を含み、「十王台式4-5期」の「小祝式梶巾段階」に位置付けられる。7～10は大型の壺形土器。7は、頸径が130mmほど、胴径が230mmほどと推定される。「梶巾類型」の特徴である連弧文の横区画と2条の縦区画が施文されている。胎土に金雲母を含み、「十王台式4-5期」の「小祝式梶巾段階」に位置付けられる。8は、口径が252mm (残存率39%)、頸径が128mm (残存率36%)、胴径が320mmほど、底径が170mm (残存率100%) で、器高は600mmほどと推定される。口縁部と胴上部の櫛描文の縦区画には、格子状文が組み込まれている。胎土に金雲母を含む。「小祝式梶巾段階」に伴うものであろう。9は、底径が140mm (残存率100%)。胎土に金雲母を含む。10は、底径が146mm (残存率66%)。胎土に金雲母を含む。底部が穿孔されており、土器棺として使用されたことが推定される。

さて、採集土器についてやや詳しく解説したのは、後

に発掘調査で検出されることになる「十王台式」とは異なる時期の土器群で構成されていることによる。「薬王院式」もしくは「大畑式」(1)、「富士山式」(2)という「十王台式古期」の土器群と、「小祝式梶巾段階」(6～8)が伴うことから「十王台式4期」(3～5)と推定される土器群である。壺形土器の大型が中・小型を上回る数量で採集されていることも特徴的であり、そのうち1点には土器棺が推定された。

第1次調査区 (1979年度) の土器群

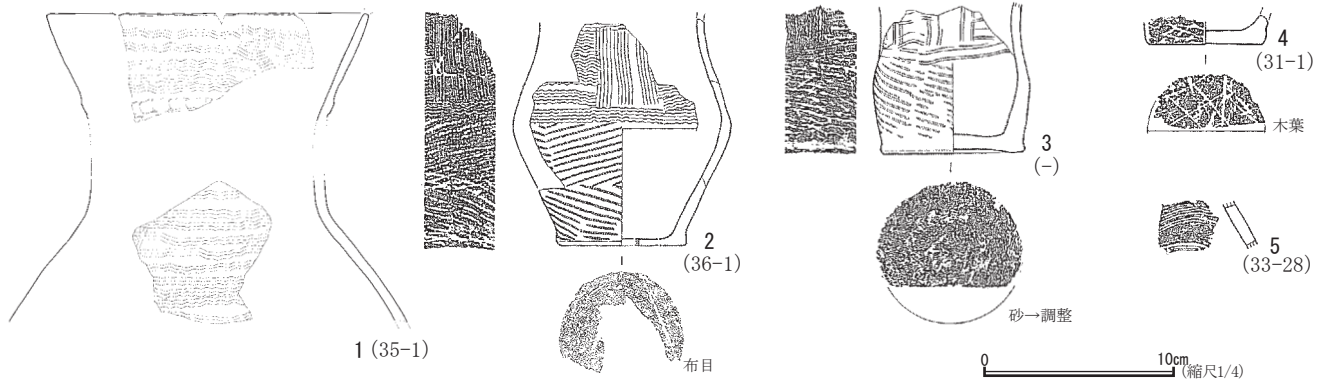
調査区は、前述の採集地点の東側に隣接した位置にある。弥生時代と報告された遺構はないが、十王台式土器が多量に出土しており、報告書 [川崎他 1980] を検討した結果、第13号住居址に弥生時代の可能性が考えられることになった。古墳時代後期の第15号住居址が重複しており、この覆土中から十王台式土器の破片がまとまって出土している (第79図1～3)。一部は第13号住居址の破片と接合する (2)。第13号住居址は、長軸5.3m短軸4.6mほどの規模、隅丸方形の平面形態が推定される。遺構の遺存状態が良くないことによるのか、炉址や柱穴は検出されていない。

第79図1～3の土器は、「武田式西塙段階」(2)と「小祝式糠塚段階」(1・3)の組合せであり、住居跡の時期は「十王台式3期」と推定される。調査区内からも、「小祝式梶巾段階」の表徴となる連弧文の横位区画は、全く検出されていない。

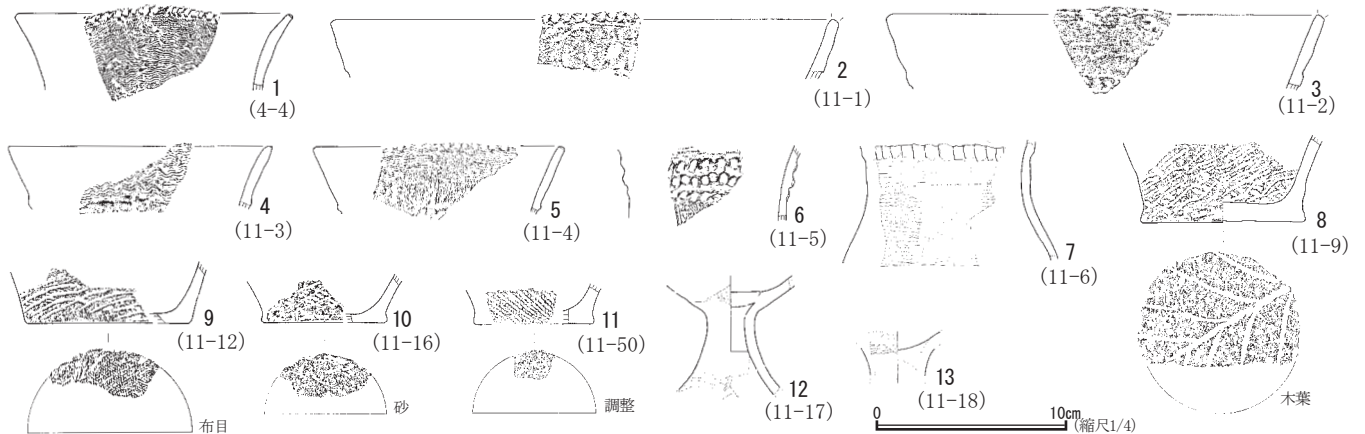
第17・18次調査区 (2015年度) の土器群

第1次調査区の東側に相当する広い範囲を対象として、トレンチによる試掘調査が実施された (本報告4-20頁)。第17次調査区では、第13号住居跡が「十王台式」と推定されている。平面形態は隅丸方形で、一辺が3m余りの小規模な住居跡である。第18次調査区では、楕円形の第27号住居跡と、円形の第47号住居跡が、その平面形態から「十王台式」の住居跡と推定された。但し、遺物は出土していない。第2号住居跡からは、十王台式土器がまとまって出土している。この住居跡の平面形態は、方形もしくは隅丸方形と推定される。第17・18次調査区に検出された「十王台式」の住居跡は、これらの4基である。

第80図1は第17次調査区第13号住居跡、2・4・5は第18次調査区第2号住居跡、7・8はその表土か



第79図 堀口遺跡第1次調査(1979年度)出土遺物 (括弧内は原報告[川崎他1980]の挿図番号)



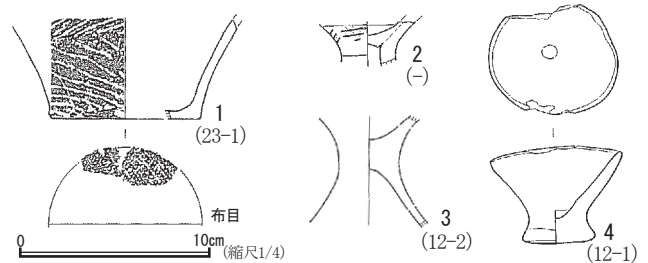
第80図 堀口遺跡第17・18次調査(2015年度)出土遺物 (括弧内は本報告の挿図番号)

ら出土した。これらの部分的な破片の特徴と、調査区全体の土器群を総合すると、「十王台式3期」と推定される。この調査区内にも、「小祝式梶巾段階」は検出されていない。

第7次調査区(1993年度)の土器群

第1・17・18次調査区から100mほど離れた東側に位置し、台地の縁辺からも100mほどの距離がある。B地区第5号住居址が弥生時代の住居跡として報告されている[鴨志田他1994]。後世の住居跡の重複で大部分が破壊されており、遺構の遺存状態は良くない。直径が4.2mほどの規模で、平面形態は円形と推定されている。主柱穴と考えられるピットの一部は検出されたが、重複する住居跡との位置関係から、炉址は破壊されたものと思われる。

第81図1～4は全て、第5号住居址外から出土したものである。4は小型の坏形土器。口縁部が完存しておらず、欠損部分に片口が付属する可能性がある。調査区全体の土器群も総合して、「十王台式3期」と推定される。この調査区にも、「小祝式梶巾段階」は検出されていない。



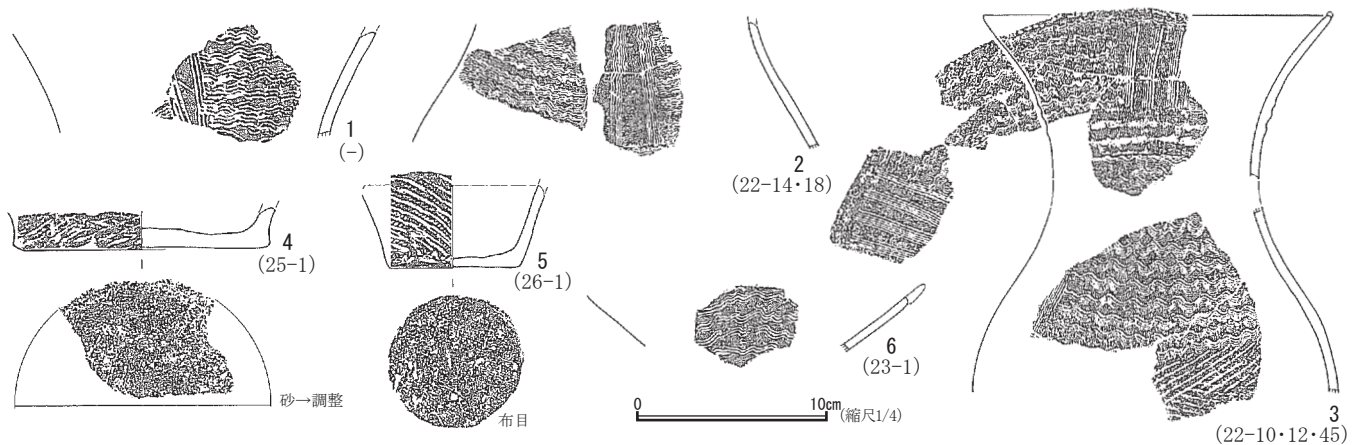
第81図 堀口遺跡第7次調査(1993年度)出土遺物

(括弧内は原報告[鴨志田他1994]の挿図番号)

第8次調査区(1996年度)の土器群

第7次調査区の東側に位置する。古墳時代前期の住居跡がかろうじて床面の一部を残すような状態で検出されており、遺構の遺存状態は全体的に良くない。出土した十王台式土器の数量や状態からは、調査区に近接して住居跡が存在するか、調査区内に存在した住居跡が破壊されたことが想定される。

第82図1～6は、大型の壺形土器(1・4)が「小祝式」、中・小型の壺形土器(2・3・5)と高坏形土器(6)が「武田式西塙段階」であり、調査区全体の土器群を総合して、「十王台式3期」と推定される。やはり、この調査区にも、「小祝式梶巾段階」は検出されていない。



第 82 図 堀口遺跡第 8 次調査 (1996 年度) 出土遺物 (括弧内は原報告 [鴨志田他 1997] の挿図番号)

さて以上のように、現在までの調査で検出された住居跡は、全て「十王台式 3 期」と推定されるものであった。採集遺物が示していた「十王台式古期」及び「十王台式 4 期」については、集落跡が未だ確認されていない。但し、採集地点と推定される道路部分より西部は未調査のまま残されており、東部でも第 7・8 次調査区の南側、台地の縁辺付近に位置する第 4・5 次調査区 (1984・1985 年度)からは、狭い範囲にもかかわらず「小祝式梶巾段階」の破片 (第 83 図) が出土している。堀口遺跡における「十王台式 4 期」の集落跡の確認は、今後の調査の課題として残されている。

4. 堀口遺跡の集落跡

堀口遺跡における「十王台式」の集落跡について、6 基の住居跡から、基本的な情報を整理しておく。

(1) 住居跡の分布は広い範囲に展開するが、その密度は低い 現在までに検出された住居跡の最西端は第 1 次調査区第 13 号住居址、最東端は第 7 次調査区 B 地区第 5 号住居址であり、その距離は 200 m 以上ある。集落跡としての範囲は広い。しかしながら、第 1・17・18 次調査区というほぼ連続した約 10,000 m²の面積が調査されたが、検出された住居跡は 5 基にすぎない。その分布は、同時期の武田西塙遺跡 (第 84 図) に共通するように見える。集落跡という遺跡の範囲は広くても、住居跡の分布する密度は低いと考えられる。

(2) 住居跡は重複しないで分布する 住居跡は分布の密度に関わらず重複して形成されることもあるが、ひたちなか市域には、武田遺跡群、船窪遺跡群でも「十王台式」の住居跡どうしの重複は見られない。常陸大宮市

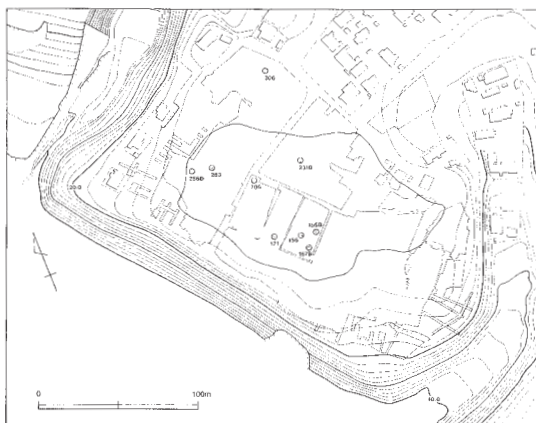


第 83 図 堀口遺跡第 4・5 次調査 (1984・1985 年度) 出土遺物

上岩瀬富士山遺跡、大洗町一本松遺跡で調査されたのは、「十王台式古期 (2 期)」と「十王台式新期 (4 期)」の重複であり、接近した時期の住居跡は重複しない傾向にある。堀口遺跡でも、現在のところ、これが追認される。

(3) 超大型の規模の住居跡は検出されない 長軸の長さが 7 m を超える住居跡を「超大型」と呼んでいる。この規模の住居跡は、一本松遺跡のほか茨城町大戸遺跡群、那珂市瓜連城址に調査されているだけで、ひたちなか市域では検出されていない。「十王台式」の平均的な住居跡の規模は、長軸が 4.0 ~ 6.0 m であり、第 1 次調査区第 13 号住居址、第 7 次調査区第 5 号住居址は、これに相当する。

(4) 方形と円形の平面形態の住居跡がある 住居跡の平面形態は、第 1 次調査区第 13 号住居址が方形、第 7 次調査区 B 地区第 5 号住居址が円形であった。第 17 次調査区第 13 号住居跡と第 18 次調査区第 2 号住居跡は方形、第 18 次調査区第 27 号と第 47 号住居跡は円形と推定されている。「十王台式」には、方形と円形の住居跡があり、武田西塙遺跡にも両者が検出されている。但し、武田西塙遺跡では、9 基のうち方形が 8 基、円形が 1 基であり、大戸遺跡群でも円形は全体の 7 % ほどに過ぎない [鈴木 2010]。堀口遺跡では、現在のところ、方形と円形が同数であり、これが全体の比率を反映したものであるなら、円形の住居跡が多いことが特徴として指摘されることになろう。



第84図 武田西埜遺跡における「十王台式」の集落跡 (鈴木2001)より引用)

5. おわりに

堀口遺跡は、これより西に位置する武田西埜遺跡や武田石高遺跡とともに遺跡群を構成し、これを「武田遺跡群」と呼んでいる。「十王台式」の集落跡は、近接した複数の遺跡で遺跡群を形成しており、これを集落の軌跡として分析する視点は、武田遺跡群の調査から導出された。それには、「十王台式3期」の武田西埜遺跡と、「十王台式5期」の武田石高遺跡の中間に位置する「十王台式4期」の集落跡を、堀口遺跡に推定することが鍵となった。これを検証し、遺跡群が形成された上限の時期を確定するためにも、堀口遺跡の調査が課題とする役割は大きい。

さらに、船窪遺跡群の調査を経て、「十王台式」細別の異時期のみならず、同時期にも集落が軌跡を描くことに気付かされた。堀口遺跡における「十王台式3期」の集落跡は、武田西埜遺跡の集落跡とともに、同時期における集落の軌跡として捉えられるものと考えている。

註1 『勝田市史 II 考古資料編』にも、また別の実測図が掲載されている。

註2 佐藤次男が「十王台式壺形土器の二者」[佐藤1963]において「飾られたる」「飾られざる」という壺形土器をそれぞれ「A者」「B者」と呼んでおり、伊東重敏の「B形」は、佐藤の「B者」に対応する用語のようである。このような分類の表現を佐藤と伊東は共有していたと見られる。

註3 当時の伊東重敏と佐藤次男は、第76図4～7の土器群を「堀口式」として弥生時代後期に位置付けていた。

参考文献

- 石井 篤 2007 『平成18年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (堀口遺跡第9次調査)
- 石井 篤 2007 『堀口遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (堀口遺跡第10次調査)
- 伊東重敏 1952 「高坏形弥生式土器」『ヒタチジ』5号 5-6頁
- 伊東重敏 1953 「常陸地方弥生式土器に関する系統と時差の問題」『考古学』第12号 6-15頁
- 伊東重敏 1967 「茨城の弥生式土器—その1— 一十王台式土器成立に関する試論—」『ひたちじ』No.6 3-7頁
- 伊東重敏 1969 「茨城における弥生式文化終末についての試論」『茨城考古学』第2号 1-17頁
- 伊東重敏 1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書(応急版)』水戸市文化財調査報告第1集 水戸市教育委員会
- 井上義安 1969 「勝田市堀口遺跡の土器」『茨城県弥生式土器集成I』茨城県弥生式土器集成グループ 17-18頁
- 嶋志田篤二他 1980 『市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (堀口遺跡第2次調査)
- 嶋志田篤二 1993 『平成4年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (堀口遺跡第6次調査)
- 嶋志田篤二他 1994 『平成5年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (堀口遺跡第7次調査)
- 嶋志田篤二他 1997 『平成8年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (堀口遺跡第8次調査)
- 川崎純徳 1967 「十王台式土器小論」『常総台地』第1号 1-4頁
- 川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第1集 勝田市教育委員会
- 川崎純徳他 1979 『勝田市史 II 考古資料編』勝田市
- 川崎純徳他 1980 『堀口遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (堀口遺跡第1次調査)
- 佐々木義則他 2009 『平成20年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (堀口遺跡第11・12次調査)
- 佐々木義則他 2014 『平成25年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (堀口遺跡第13・14次調査)
- 佐々木義則他 2015 『平成26年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (堀口遺跡第15・16次調査)
- 鈴木素行 2001 「遺跡の位置と環境」「弥生時代の遺構と遺物」『武田西埜遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』公社文化財調査報告第21集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1-8頁, 337-443頁
- 鈴木素行 2010 「弥生時代後期「十王台式」の集落構造 一大戸遺跡

- 群の分析を基礎として」『武田遺跡群 総括・補遺編』公社文化財
調査報告第40集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 47-91 頁
- 鈴木素行 2013 「旅する「十王台式」—弥生時代終末の久慈川・那
珂川流域—」『ひたちなか埋文だより』第38号 2-4 頁
- 鈴木素行 2013 「岡田遺跡における弥生時代後期「十王台式」の集落
跡について」『平成24年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひ
たちなか市教育委員会 31-37 頁
- 鈴木素行 2014 「茨城県域「十王台式」の土器と社会」『弥生時代後期
の北関東』公開講座「ひたちなか市の考古学」第6回 19-32 頁
- 住谷光男他 1984 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和58年度）』勝田市
教育委員会（堀口遺跡第3次調査）
- 住谷光男 1985 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和59年度）』勝田市教
育委員会（堀口遺跡第4次調査）
- 住谷光男他 1986 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和60年度）』勝田市
教育委員会（堀口遺跡第5次調査）
- 藤本彌城 1983 『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』（私家版）

IV 津田遺跡群における 弥生時代後期「十王台式」 の集落跡について

1. はじめに

ひたちなか市域的那珂川左岸には、下流方向から岡田遺跡群、武田遺跡群、津田遺跡群が3kmほどの間隔で並ぶ。そのうち最も上流に位置する津田遺跡群は、ひたちなか市と那珂市を跨ぐ。ひたちなか市域では、津田黒袴、津田若宮、津田天神山、西中島、上馬場遺跡、那珂市域では、中台、中台東遺跡に「十王台式」が報告されており、これが津田遺跡群として捉えられるのである。さらに上流の東木倉遺跡にも「十王台式」が報告（第85図左）されており、中台東遺跡と東木倉遺跡の中間に位置する中台下宿、中台新地、鳥栖、羽黒前遺跡は「弥生時代」[茨城県教育委員会編2001]と記載されていて、津田遺跡群が東木倉遺跡へと連続することも考えられるのであるが、本稿が検討する対象は、現在のところ連続が確実な中台東遺跡までとしておきたい。東木倉遺跡より上流には、平塚、富士山、権現山、軍民坂、阿川遺跡で構成される上国井遺跡群があり、この上国井遺跡群と東

木倉遺跡との不連続は、広い面積が調査された砂川遺跡[渡辺1982]や白石遺跡[榎村1993]に「十王台式」が報告されていないことから確認できる。

2. 津田遺跡群の調査

津田の「黒袴」を「黒跨」と誤植した地図により「クロマガギ式」と呼ばれた土器群がある。これが、茨城県における弥生式土器の編年研究に登場したのは、1952年のことであった。津田黒袴遺跡の採集資料をもとに、伊東重敏により設定された土器型式であったが、資料が公表されないまま、井上義安が設定した「足洗式」に取って代わられた。後の1971年になって公表された資料[伊東1971]からは、中期後葉の「足洗式」を主体としながら、後期初頭の土器群も含む内容であったことが窺える。この時期の遺構は、後に1983年度の津田若宮遺跡第3次調査区から土坑が1基検出されることになった。

津田遺跡群の「十王台式」を最初に報告したのも1953年の伊東であったが、挿図のキャプションを「富士の上」と誤記したことから、一般には知られていない[伊東1953]。伊東が報告した土器（第87図1）は現在、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターに所蔵されており、「那珂町中台」と出土地が墨書されている。1979年には川崎純徳も、「後台遺跡」（第87図2）と「津田遺跡」（第86図1・2）の採集資料を紹介している。



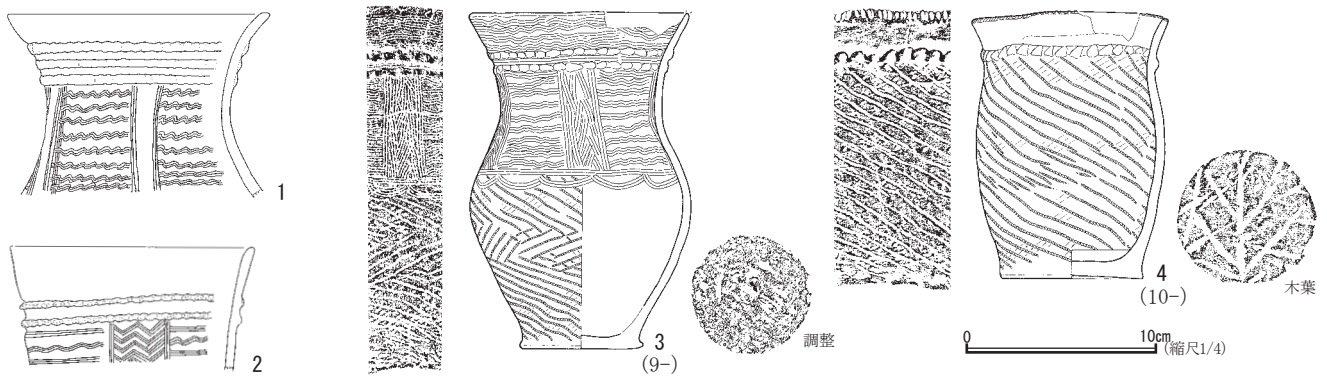
東木倉遺跡採集土器

([川崎他1988]より引用)

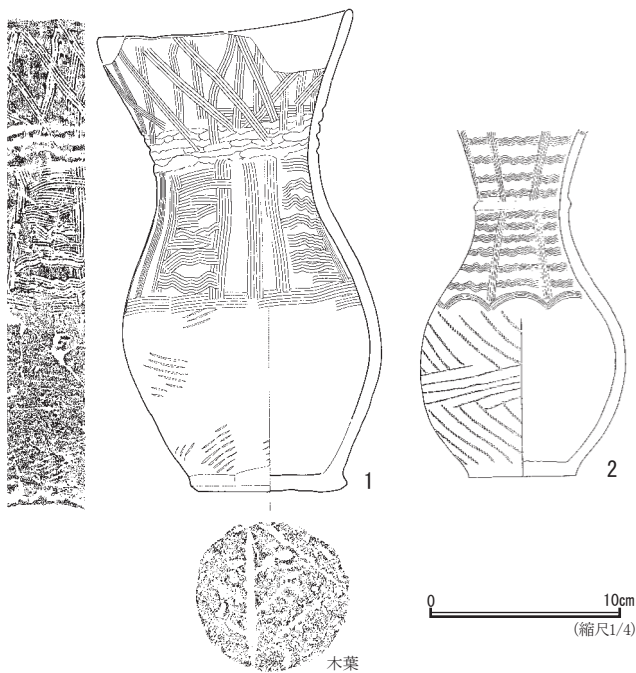


1.那珂市中台東遺跡1978年度 2.黒袴遺跡第3次 3.若宮遺跡第7次
4.若宮遺跡第4次 5.若宮遺跡第6次 6.天神山遺跡第1次

第85図 津田遺跡群における「十王台式」の遺跡の分布（黒丸が住居跡の位置）



第 86 図 津田天神山遺跡採集土器と第 1 次調査 (1965 年度) 出土遺物 (1・2 は [川崎 1979] より引用, 括弧内は原報告 [伊東・川崎 1966] の挿図番号)



第 87 図 中台遺跡採集土器 (2 は [川崎 1979] より引用)

川崎の「後台遺跡」は中台遺跡, 「津田遺跡」は津田天神山遺跡に対応するらしい。^{註 2}

1965 年, 住宅団地の建設に対応するため当時の市教育委員会による緊急調査が, 津田天神山遺跡を対象に実施された。この調査では「十王台式」の住居跡が 1 基検出され, 津田遺跡群に「十王台式」の集落跡が形成されていることが確認された。1978 年には, 国道 349 号線のバイパス建設に伴い中台東遺跡が調査され, ここにも「十王台式」の住居跡が 1 基検出された。その後は, ひたちなか市域において, 個人住宅建設等に対応する小規模な調査がその都度実施されて, わずかながら遺跡群の情報が集積されてきている。

3. 各遺跡調査区の遺構と土器群

調査ごとに報告されていた遺物を観察し, 一部を新

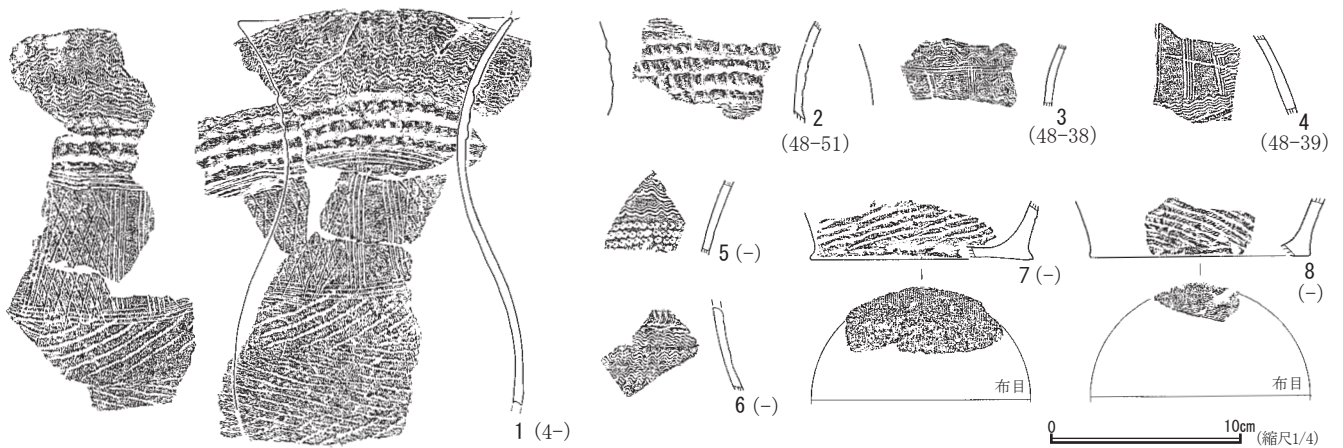
たに実測して再報告する。「十王台式」については, 武田・船窪遺跡群の分析を基礎とした細別と時期区分 [鈴木 2013, 2014] に拠りながら記述している。

天神山遺跡第 1 次調査区 (1965 年度)

調査された住居跡は, 長軸 3.9 m, 短軸 3.3 m の「小判形」つまり楕円形と報告された [伊東・川崎 1966]。この規模と平面形態は, 壁下を巡っていたと考えられる周溝により推定されている。炉址には炉石が伴う。床面からは小型壺形土器 1 点 (第 86 図 3), 床面近くからは土製紡錘車 1 点が出土した。土器は胎土に金雲母を含み, 「十王台式 2 期」の「富士山式」, 下っても「十王台式 3 期」の「小祝式糠塚段階」までに位置付けられる。^{註 3} 調査区の土器には「十王台式 2 期」の土器が多く, 川崎純徳が紹介した土器 (第 86 図 1・2) も「十王台式 2 期」と考えられるものであった。一方で「十王台式 3 期」の確実な資料は報告されていない。津田天神山遺跡には, 「十王台式 2 期」の集落跡が形成されていたことを考えて良いのであろう。なお, 調査区出土の小型の甕形土器 (第 86 図 4) は胎土に金雲母が認められず, 底面には木葉痕が残されている。

中台東遺跡 1978 年度調査

北区第 6 号住居跡が「十王台式」の住居跡として報告されている [海老原・汀 1979]。住居跡の実測図からは, 長軸 4.5 m ほど短軸 3.9 m ほどで, 楕円形の平面形態が見て取れる。炉址は報告されておらず, 4 本主柱が想定される配置で 3 基の主柱穴だけが検出されている。火事の痕跡を示す炭化材も出土した。住居跡には, 「十王台式 3 期」の土器群 (第 88 図 1・2) が報告されている。^{註 4} 1 は「小祝式糠塚段階」の文様構成でありながら, 胎土には金雲母が認められない。3 も土器の注記を見る限り,



第 88 図 中台東遺跡 1978 年度発掘調査出土遺物 (括弧内は原報告 [海老原・汀 1979] の挿図番号)

同じ住居跡から出土したらしい。中台東遺跡には、「十王台式 3 期」の集落跡が形成されていたことを考えて良いのであろう。調査区からは、带状刺突文が施文された「十王台式 5 期」の破片 (第 88 図 5・6) も出土しており、この時期の集落跡が重複することも想定される。

若宮遺跡第 4 次調査区 (1985 年度)

第 1 号住居址は、部分的な調査ではあるが、一方の軸長が 4.8 m で、隅丸方形の平面形態が推定される。炉址の「焼土の中に礫が 1 個置かれていた」のは、炉石であろうか。「床面からは弥生式土器・土師式土器の破片が若干出土した」と報告され、「住居址の掘り込みの深さ、貼り床構造を有するなどの一般的な考え方から、土師式土器に伴う住居址 (古墳時代前期)」と推定されている [住谷他 1986]。床面から出土した中・小型の壺形土器 (第 89 図 4) は、胴部の縄文が羽状を構成せず不整な斜行縄文であることから、「十王台式 5 期」ではないかと見られる。同じ住居跡の覆土からは、带状刺突文 (2) や、撚糸文のように密な絡条の付加条縄文 (7) も出土している。

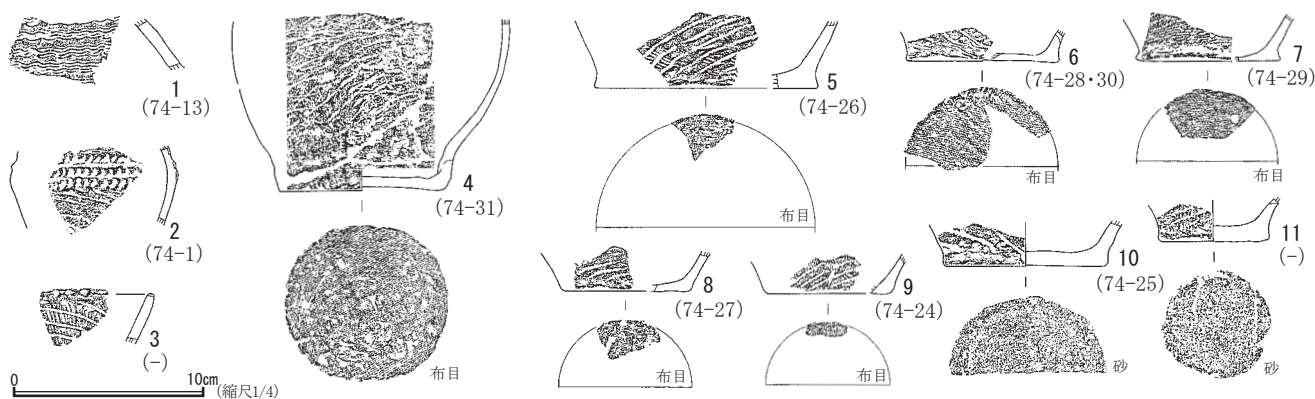
若宮遺跡第 6 次調査区 (1997 年度)

第 2 号、第 3 号住居址から「十王台式」が出土している。いずれも部分的な調査ではあるが、第 2 号住居址は「方形の竪穴住居址のコーナー部分」、第 3 号住居址は「かなり大型の円形の竪穴住居址」と推定されている [鴨志田 1998]。土器の注記では、第 90 図 1・2 が第 2 号住居址、3・4 が第 3 号住居址から出土した土器である。^{註 5} 1 は、頸部が押し引き状の带状刺突文、胴部が無節の羽状縄文。2 には櫛描による格子状文が施文されている。これらは「十王台式 5 期」に位置付けられる。一方、

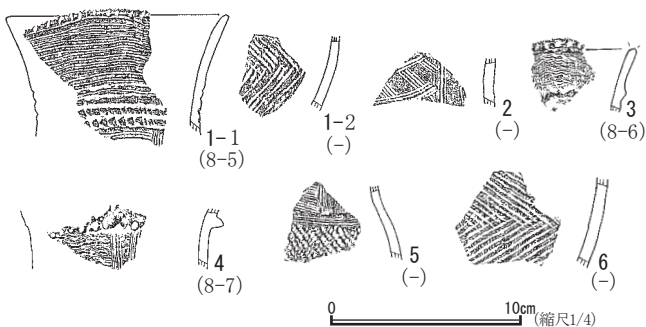
3 は、胎土に金雲母を含み、「十王台式 2 期」の「富士山式」もしくは「十王台式 3 期」の「小祝式糠塚段階」。4 は、複合口縁の下端に縄文原体の刻みと錐状の貼付文があり、「上稲吉式」と「十王台式」の融合が認められる。3 と 4 が伴うのであれば、これらは「十王台式 3 期」に位置付けられる。つまり、「十王台式 3 期」と「5 期」という 2 つの時期の住居跡が、この調査区には推定されるのである。

若宮遺跡第 7 次調査区 (2001 年度)

土器 (第 92 図 1) の発見を契機として、それに伴う遺構を確認する調査が実施された。検出された第 1 号住居跡は、長軸 5.38 m、短軸 5.10 m で、主軸の方がやや短い横長の隅丸方形の平面形態である。確実な主柱穴は 2 基のみであるが、4 本主柱が想定される配置である。炉址には炉石が伴う。東隅のピット 1 付近からは小型の土器 (第 92 図 2)、南隅のピット 2 からは大型の土器 (1) が「底部はピット 2 に接して出土」 [鴨志田 2002] したという。ピット 2 に伴うらしい大型の土器には、「廃屋土器棺墓」 [鈴木 2010] の可能性もあるが、詳細が記録されておらず検討はできない。第 92 図 1 の細頸形は、大型の中でも超大型と表現し得る。頸部付近までの残存高^{註 6}で 762 mm、胴径 613 mm、底径 244 mm を計測する。武田・船窪遺跡群において底径が 20 cm を超える土器は見られず、他に類を見ない法量である。胴部には、撚糸文のように密な絡条の付加条縄文により羽状縄文が構成されている。底面は砂痕であるが、胎土には金雲母が認められない。2 は小型太頸形の壺形土器。有段口縁で、口縁部と胴部には撚糸文のように密な絡条の付加条縄文により斜行縄文が構成されている。胴部の縄文は部分的に撫で

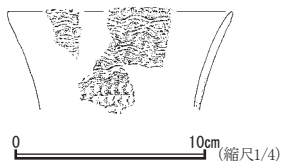


第 89 図 若宮遺跡第 4 次調査 (1985 年度) 出土遺物 (括弧内は原報告 [住谷他 1986] の挿図番号)



第 90 図 若宮遺跡第 6 次調査 (1997 年度) 出土遺物

(括弧内は原報告 [鴨志田他 1998] の挿図番号)



第 91 図 黒袴遺跡第 3 次調査 (2015 年度) 出土遺物

消されている。底面は砂痕であるが、これも胎土には金雲母が認められない。2～6は、同じ住居跡の覆土中から出土した破片。頸部に隆帯は見られず、帯状刺突文(3)がある。これらは「十王台式 5 期」に位置付けられる。覆土中からは、古墳時代前期の土師器も出土しているが、台付甕は欠落している。なお、近接した位置にあり、一部が調査された第 2 号住居跡も、隅丸方形の平面形態で、炉址には炉石が伴う。遺物は、古墳時代前期の土師器のみで、「十王台式」は報告されていない。

黒袴遺跡第 3 次調査区 (2015 年度)

その存在が確認された第 1 号住居跡は、規模は明らかでないが、隅丸方形の平面形態が推定される。覆土中から出土した土器 (第 91 図) には、帯状刺突文が施文されており、「十王台式 5 期」に位置付けられる。

以上のように現在までのところ、津田遺跡群において調査された「十王台式」の住居跡は 7 基であり、「十王台式 2 期」「3 期」「5 期」における集落跡の形成が確認

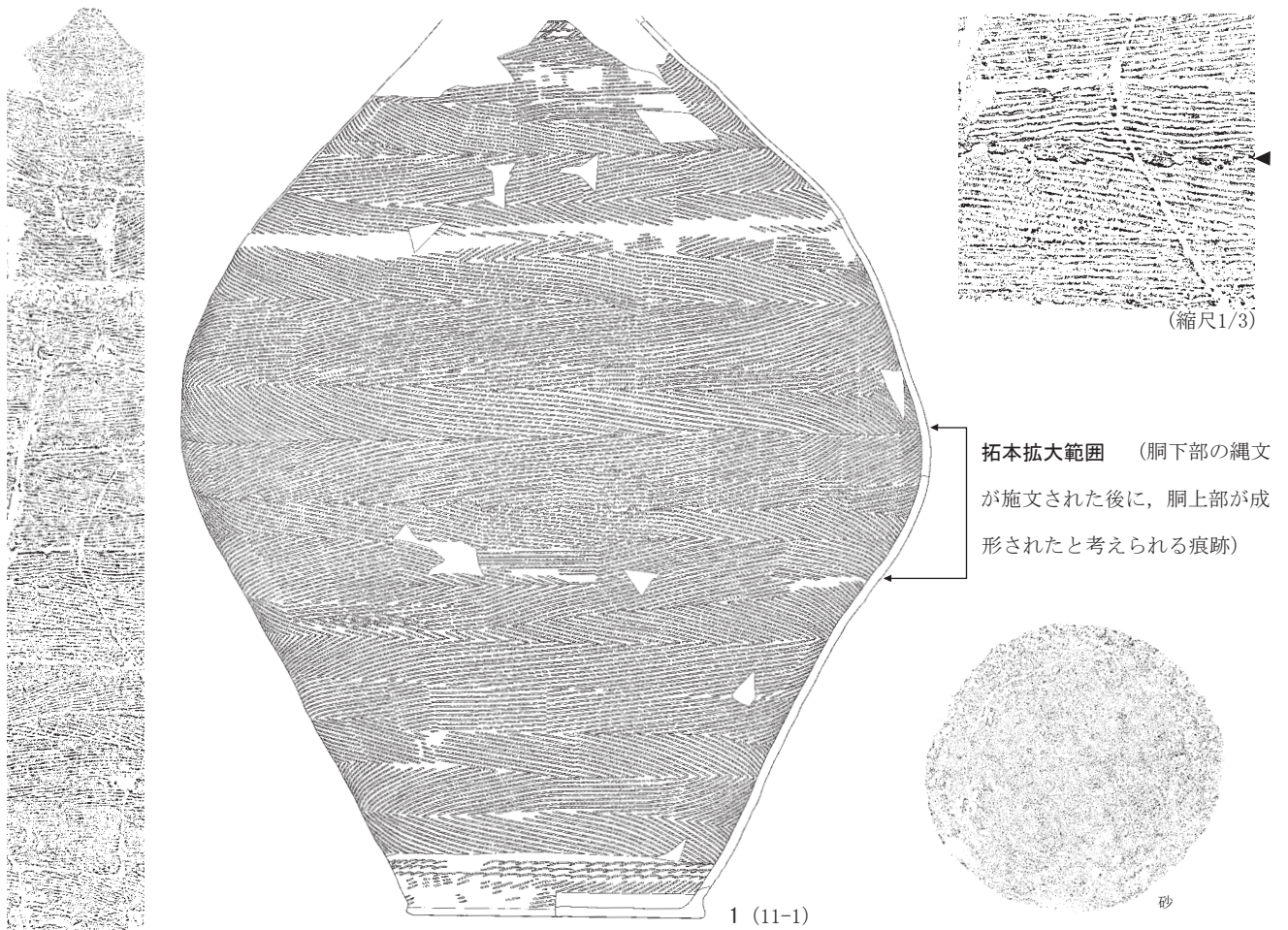
されるのである。

4. 津田遺跡群の集落跡

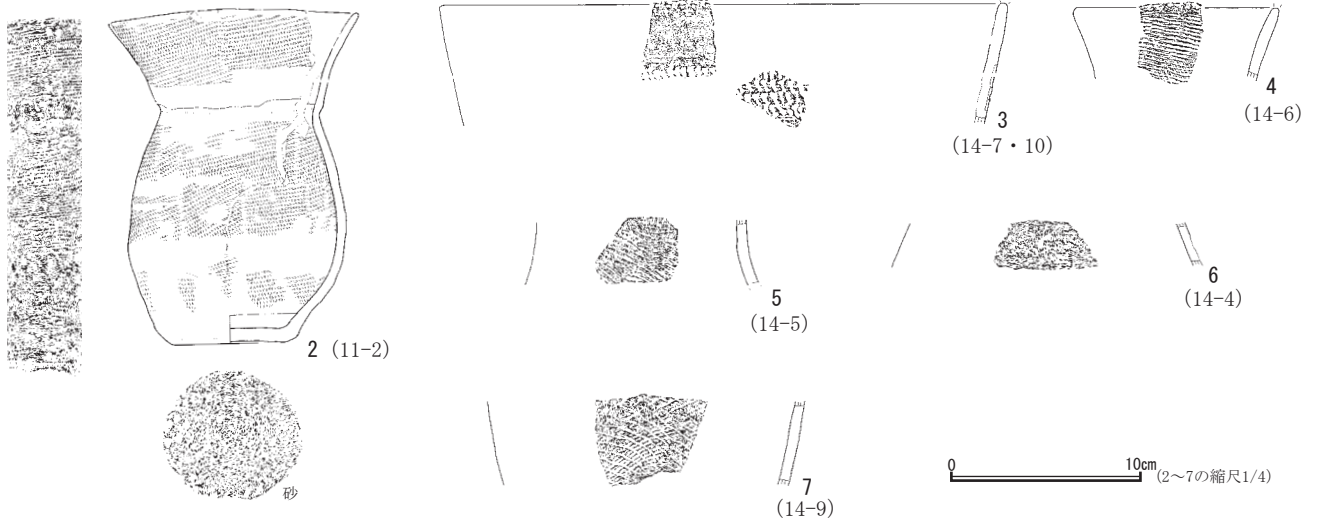
津田遺跡群における「十王台式」の集落跡について、7 基の住居跡から、基本的な情報を整理してみると、「住居跡の分布は広い範囲に展開するが、その密度は低い」、「住居跡は重複しないで分布する」、「超大型の規模の住居跡は検出されない」、「方形と円形の平面規形態の住居跡がある」ということが堀口遺跡に共通している。住居跡の平面形態については、7 基のうち隅丸方形の 4 基はいずれも「十王台式 5 期」の住居跡である。大戸遺跡群に認められたように [鈴木 2010]、「十王台式 5 期」には円形の住居跡が見られなくなるのであろう。住居跡のほぼ全体が調査された津田若宮遺跡第 7 次調査第 1 号住居跡は、ベッド状遺構こそ付属しないが、同時期の武田石高遺跡第 5 号住居跡の構造によく似ている (第 93 図)。一方で、「十王台式 2 期」及び「3 期」の住居跡は、3 基とも全てが円形で、円形の住居跡が多いという堀口遺跡に共通した現象を認めるのである。今後の調査の進展に期待される課題の 1 つである。

5. おわりに

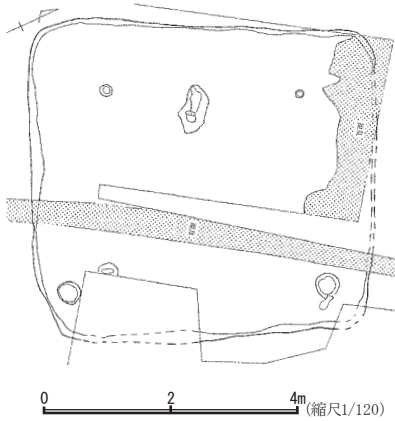
津田遺跡群においては、「十王台式 2 期」に津田天神山遺跡がある。「十王台式 1 期」は確認されないことから、ここに、津田遺跡群の最初の集落が形成された。那珂川下流域の左岸には、「十王台式 2 期」に岡田遺跡も形成されている。岡田遺跡の土器群が「大畑式」を主体とするのに対して、津田天神山遺跡の土器群は「富士山式」で占められており、これもまた今後の調査の進展が期待される課題である。新たに開拓された集落の故地を



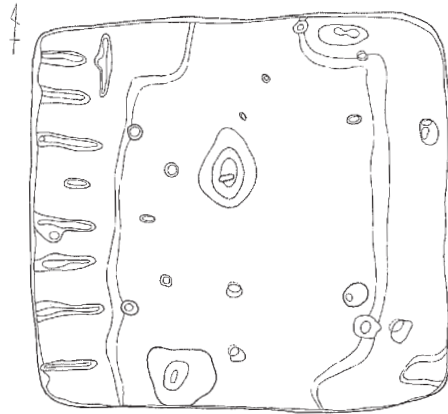
0 20cm (1の縮尺1/6)



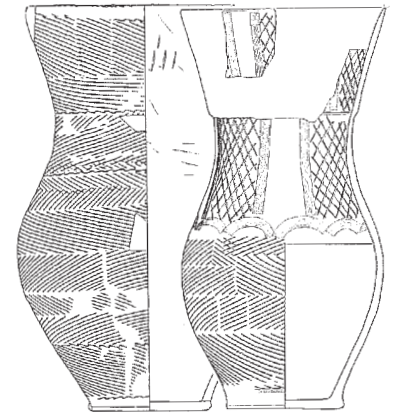
第 92 図 若宮遺跡第 7 次調査 (2001 年度) 出土遺物 (括弧内は原報告 [鴨志田 2002] の挿図番号)



1. 若宮1住 ([鴨志田2002]より加筆引用)



2. 石高5住 ([鈴木他1998, 白石1999]より加筆引用)



(土器縮尺1/6)

第93図 若宮遺跡第7次調査(2001年度)第1号住居跡と武田石高遺跡第5号住居跡

示す資料となるであろうか。「十王台式3期」には、津田若宮遺跡と中台東遺跡に集落が形成されており、「十王台式4期」の集落跡については、川崎純徳が紹介した土器(第87図2)から、中台遺跡に想定するが、これは確実でない。土器の破片が出土している上馬場遺跡[佐々木他2013]や西中島遺跡[佐々木他2014]にも、「十王台式3期」もしくは「4期」の集落跡が形成されてあるかもしれない。そして「十王台式5期」には、津田若宮遺跡、津田黒袴遺跡に集落が形成されることになる。伊東重敏が紹介した土器(第87図1)から中台遺跡、発掘調査で出土した破片から中台東遺跡にも、この時期の集落跡は想定される。以上が、現在のところ描き得る、集落の軌跡としての津田遺跡群の構造である。

註1 2000年度までの調査の概略[鈴木2001]では、東木倉遺跡を含めて津田遺跡群と捉えていた。本稿は、その改訂でもある。

註2 遺跡の対応は、川崎純徳氏のご教示による。

註3 再実測した2点の土器以外は、遺物の所在が不明であり、詳細な観察ができていない。

註4 報告書[海老原・汀1979]第4図では、底部までの器形が復元されているが、残存するのは口縁～胴部であり、もともと底部は欠失していたと考えられる。報告書図版6に「北第6号住居跡出土遺物(初の圧痕)」として掲載された土器は、同住居跡のものではなく、報告書第5図の土器の底部の誤りである。なお、この報告書には、調査区全体図や遺構分布図も欠落している。

註5 報告書[鴨志田1998]では、第2号住居址の土器(第90図1)も第3号住居址の土器として報告されていた。

註6 2011年の東日本大震災で被災し、破壊されたものを再び接合し

復元した。本稿の計測値は現状のものである。

参考文献

- 伊東重敏 1953 「常陸地方弥生式土器に関する系統と時差の問題」『考古学』第12号 6-15頁
- 伊東孝太 1965 「津田遺跡調査について」『ひたちじ』No.2 茨城考古学会 1頁
- 伊東重敏・川崎純徳 1966 『津田・天神山遺跡調査報告』勝田市教育委員会 (天神山遺跡第1次調査)
- 伊東重敏 1969 『勝田市下高場遺跡調査予報 附・勝田市津田天神山遺跡調査報告追補』勝田市教育委員会 (天神山遺跡第2次調査)
- 伊東重敏 1971 『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書(応急版)』水戸市文化財調査報告第1集 水戸市教育委員会
- 茨城県教育委員会編 2001 『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 海老原幸・汀 安衛 1979 『中台東遺跡 一国道349号線内埋蔵文化財調査報告書一』那珂町教育委員会
- 樫村宣行 1993 『白石遺跡(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第82集 財団法人茨城県教育財団
- 鴨志田篤二他 1994 『平成5年度市内遺跡発掘調査報告書』勝田市教育委員会 (若宮遺跡第5次調査)
- 鴨志田篤二他 1998 『津田若宮遺跡発掘調査報告書—1997年度津田若宮遺跡発掘調査の成果—』ひたちなか市教育委員会 (若宮遺跡第6次調査)
- 鴨志田篤二 2002 『平成13年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会 (若宮遺跡第7次調査)
- 川崎純徳 1979 「勝田市後台遺跡出土の弥生式土器」『常総台地』10 49-51頁

川崎純徳 1979 「勝田市津田遺跡出土の弥生式土器」『常総台地』10号 52-54 頁

川崎純徳他 1975 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』勝田市文化財調査報告第 1 集 勝田市教育委員会

川崎純徳他 1979 『勝田市史 II 考古資料編』勝田市

川崎純徳・鴨志田篤二 1981 『上馬場遺跡発掘調査報告書』上馬場遺跡調査会（上馬場遺跡第 1 次）

川崎純徳他 1988 『那珂町史 自然環境・原始古代編』那珂町

佐々木義則他 2009 『平成 20 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（黒袴遺跡第 2 次調査, 上馬場遺跡第 2 次調査）

佐々木義則他 2013 『平成 24 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（上馬場遺跡第 3・4 次調査, 西中島遺跡第 3 次）

佐々木義則他 2014 『平成 25 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（西中島遺跡第 4・5 次）

白石真理 1999 『武田石高遺跡 古墳時代編』公社文化財調査報告第 17 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木素行他 1998 『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』公社文化財調査報告第 15 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木素行 2001 「弥生時代の環境 —弥生時代後期の「船窪遺跡群—」『船窪Ⅳ — 2000 年度船窪遺跡群発掘調査の成果—』公社文化財調査報告第 22 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 1-10 頁

鈴木素行 2001 「半分山遺跡」『第 23 回研究発表会資料』茨城県考古学協会 11-16 頁

鈴木素行 2010 「続・部田野のオオツタノハ —茨城県域における弥生時代「再葬墓後」の墓制について—」『古代』第 123 号 1-51 頁

鈴木素行 2010 「弥生時代後期「十王台式」の集落構造 —大戸遺跡群の分析を基礎として—」『武田遺跡群 総括・補遺編』公社文化財調査報告第 40 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 47-91 頁

鈴木素行 2013 「旅する「十王台式」 —弥生時代終末の久慈川・那珂川流域—」『ひたちなか埋文だより』第 38 号 2-4 頁

住谷光男他 1982 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和 56 年度）』勝田市教育委員会（若宮遺跡第 1・2 次調査）

住谷光男他 1984 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和 58 年度）』勝田市教育委員会（黒袴遺跡第 1 次調査, 若宮遺跡第 3 次調査）

住谷光男他 1986 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和 60 年度）』勝田市教育委員会（若宮遺跡第 4 次調査, 西中島遺跡第 1 次）

住谷光男他 1987 『市内遺跡発掘調査報告書（昭和 61 年度）』勝田市教育委員会（西中島遺跡第 2 次）

渡辺俊夫 1982 『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 4 宮部遺跡・鹿の子 A 遺跡・砂川遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告 X VI
財団法人茨城県教育財団



1 堀口遺跡第17次調査区



6 堀口遺跡第20次調査区



2 堀口遺跡第18次調査区



7 堀口遺跡第21次調査区



3 堀口遺跡第18次調査区



8 平磯長堀南遺跡第1次調査区



4 堀口遺跡第18次調査区



9 愛宕神社古墳第1次調査区



5 堀口遺跡第19次調査区

図版2 試掘調査(2)



10 寄居新田遺跡第1次調査区



11 津田若宮遺跡第11次調査区



12 西谷津遺跡第4次調査区



13 松原遺跡第5次調査区



14 高野富士山遺跡第8次調査区



15 東原遺跡第5次調査区



16 東原遺跡第6次調査区



17 東原遺跡第7次調査区



18 孫目古墳群第2次調査区



19 孫目古墳群第2次調査区第2トレンチ3号溝跡



20 君ヶ台遺跡第10次調査区



21 勝倉城跡第1次・勝倉古墳群第2次・勝倉富士山遺跡第2次調査区



22 勝倉城跡第1次調査区1号土坑土層断面



23 勝倉城跡第1次調査区1号土坑断面



24 市毛上坪遺跡第15次調査区



25 小谷金東遺跡第1次調査区



26 黒袴遺跡第4次調査区



27 黒袴遺跡第4次調査区1号住居跡

図版4 試掘調査(4)



28 岡田遺跡第25次調査区



29 岡田遺跡第26次調査区



30 岡田遺跡第27次調査区



31 地藏根遺跡第1次調査区



32 地藏根遺跡第1次調査区



33 金上埜遺跡第9次調査区



34 雷遺跡第4次調査区



35 堂端遺跡第1次調査区



36 平井遺跡第3次調査区



37 足崎西原遺跡第3次調査区

報告書抄録

フリガナ	ヘイセイニジュウナナネンドヒタチナカシナイイセキハクツツチヨウサホウコクシヨ
書名	平成 27 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書
編集者名	佐々木義則
著者名	鈴木素行, 稲田健一, 栗田昌幸, 佐々木義則
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化課文化財調査事務所
編集機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行機関	ひたちなか市教育委員会
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市東石川 2 丁目 10 番 1 号
発行年	2016 年 3 月 18 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	面積	備考
		市町村	遺跡番号						
ホリグチ 堀口	ひたちなか市 堀口	08221	004	36° 38' 92"	140° 51' 12"	25.3 m	201502	105 m ²	
				36° 38' 94"	140° 51' 05"	25.2 m	201506	841 m ²	
				36° 39' 11"	140° 50' 97"	25.1 m	201506	17 m ²	
				36° 39' 02"	140° 51' 17"	25.5 m	201509	42 m ²	
36° 38' 84"	140° 51' 12"	23.7 m	201512	35 m ²					
ヒライソナガホリミナミ 平磯長堀南	ひたちなか市 平磯町	08221	307	36° 36' 27"	140° 61' 39"	22.8 m	201502	26 m ²	
アタゴジンジャコフン 愛宕神社古墳	ひたちなか市 阿字ヶ浦町	08221	315	36° 38' 46"	140° 61' 07"	30.0 m	201502	20 m ²	
ヨロイシンデン 寄居新田	ひたちなか市 田彦	08221	162	36° 42' 66"	140° 51' 55"	31.4 m	201503	44 m ²	
ツダワカミヤ 津田若宮	ひたちなか市 津田	08221	135	36° 40' 39"	140° 48' 66"	25.0 m	201503	33 m ²	
ニシヤツ 西谷津	ひたちなか市 馬渡	08221	267	36° 39' 62"	140° 56' 15"	28.6 m	201504	38 m ²	
マツバラ 松原	ひたちなか市 田彦	08221	037	36° 41' 01"	140° 51' 46"	26.6 m	201504	90 m ²	
コウヤフジヤマ 高野富士山	ひたちなか市 高野	08221	062	36° 42' 93"	140° 55' 40"	30.2 m	201505	36 m ²	
ヒガシハラ 東原	ひたちなか市 高野	08221	061	36° 43' 36"	140° 55' 19"	29.6 m	201506	29 m ²	
				36° 43' 41"	140° 55' 21"	28.2 m	201509	31 m ²	
				"	"	"	201510	35 m ²	
マゴメコフンゲン 孫目古墳群	ひたちなか市 佐和	08221	052	36° 45' 15"	140° 53' 97"	31.2 m	201506	145 m ²	
キミガダイ 君ヶ台	ひたちなか市 中根	08221	011	36° 38' 33"	140° 56' 33"	21.4 m	201507	26 m ²	
カツクラジョウ 勝倉城 カツクラコフンゲン 勝倉古墳群 カツクラフジヤマ 勝倉富士山	ひたちなか市 勝倉	08221	082 021 118	36° 37' 78"	140° 52' 48"	21.5 m	201507	100 m ²	
イチゲカミツボ 市毛上坪	ひたちなか市 市毛	08221	131	36° 39' 93"	140° 50' 14"	27.3 m	201507	24 m ²	
コヤガネヒガシ 小谷金東	ひたちなか市 小谷金	08221	298	36° 36' 34"	140° 58' 95"	22.1 m	201507	19 m ²	
クロバカマ 黒袴	ひたちなか市 津田	08221	007	36° 40' 67"	140° 48' 45"	25.6 m	201507	25 m ²	
オカダ 岡田	ひたちなか市 三反田	08221	039	36° 36' 94"	140° 54' 29"	21.6 m	201507	30 m ²	
				36° 36' 93"	140° 54' 29"	21.3 m	201510	39 m ²	
				36° 36' 91"	140° 54' 29"	20.9 m	201512	21 m ²	
ジゾウネ 地蔵根	ひたちなか市 勝倉	08221	119	36° 37' 81"	140° 53' 04"	21.5 m	201509	351 m ²	
カネアゲハナワ 金上堀	ひたちなか市 金上	08221	112	36° 37' 19"	140° 53' 51"	22.0 m	201510	95 m ²	
イカズチ 雷	ひたちなか市 田彦	08221	145	36° 40' 81"	140° 51' 98"	26.1 m	201510	21 m ²	
トウハタ 堂端	ひたちなか市 東石川	08221	144	36° 41' 32"	140° 52' 90"	29.0 m	201511	194 m ²	
ヒライ 平井	ひたちなか市 金上	08221	083	36° 37' 65"	140° 53' 94"	22.5 m	201512	163 m ²	
タラザキニシハラ 足崎西原	ひたちなか市 足崎	08221	180	36° 24' 25"	140° 33' 27"	28.2 m	201512	72 m ²	

平成 27 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書

平成 28 (2016) 年 3 月 18 日発行

編 集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発 行 ひたちなか市教育委員会

〒 312-8501 茨城県ひたちなか市東石川 2-10-1

TEL029-273-0111

公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

〒 312-0011 茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL029-276-8311

印 刷 大富印刷株式会社

〒 311-1251 茨城県ひたちなか市山崎 160

(第二山崎工業団地)

